
終焉世界

ミノ

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
終焉世界

【Nコード】
N7679CQ

【作者名】
ミノ

【あらすじ】
クラス全員トリップした先は、静かに灰の降り積もる滅び行く異世界だった。
生き延びたその先に待つのは破滅のみ。暗黒世界のデッドエンド・ファンタジー。

01 最後の魔法の塔

どうやらこの世界は終わるらしい。

その日の天気も灰曇りで、雨の代わりに変な色の灰が降っていた。

灰白色にうつすら青緑の混じったようなそれはこっちの世界では地獄の灰とか悪魔の灰とか、そういう名前で呼ばれている。地面に落ちると普通の白っぽい灰になるけど、代わりにそこに含まれている毒が抜けて地面に染みこんでいく。毒が抜ける前の灰は要するに毒入りなので、吸い込まない方がいいと教えられた。

俺はもともとこの世界の人間ではないし、かと言って地球の、日本に戻るつもりもない。全く無いかというとさすがに嘘になる。でもどうやっても戻る手段がないらしい。あるかもしれないけどこの世界の誰も知らないようなので、早々にあきらめた。

諦めなかった連中も当然いた。でもそいつらはこっちの世界の三月もたたないうちに半分くらいは死んだ。何しろ毒の灰は毒だから、知らないうち肺に入るとたいてい死ぬ。で、残った四分の一くらいは化石病で石になって、さらにその残りはフィードになってそれから先はどうなったか知らない。

何となく生き残ってしまった俺は、まあ色々あって、その後も生き続けて、今は何でか知らないけどウロコ馬の引く馬車の御者をしている。

本当に、何でそうなったかよくわからない。

元は日本の高校生だった俺は、ある日突然教室にいたクラスメイトと担任と一緒にこの世界にいた。全員がだ。

教室が光りに包まれて、気がついたらこの世界にいて 誰にも何も説明されずに放り出された。

で、大半はわりとすぐ死んだ。

だから、この世界に慣れるまでは正直きつかった。それまで同じ教室で授業を受けてきた連中はころころ簡単に死んでいくし、生態系が明らかに違うから何が食べられるもので何が無理なのかわからなかったし、おまけにひっきりなしに毒は降ってくるし……。

とにかく最悪だった。

俺は運良く生き延びたけど、本当に運が良かったのかどうか未だにわからない。

考えても仕方ないだろう。

とりあえずいろいろあつて、トリップだかなんだか知らないけどこの最悪の異世界にやってきてから三年くらい経つて、まだ生きている俺は御者をやっている。

御者だ。馬を操って馬車を走らせる、例のアレだ。

人手が足りないからと適当にあてがわれた職だけど、基本はウロコ馬の機嫌をうかがって目的地まで荷台のものを運んでいくだけだから、まあ楽といえれば楽だ。それで食い物と住む場所は確保できる

なら 毎日死ぬ思いをしたり実際死んだりする護法軍の兵士とか、半分死んだ土地で死んだ目で死にかけのナナイモを育てる農家になるよりはマシじゃないかと思う。

そんなわけで俺は街道を馬車で進んでいた。

最後の魔法の塔 本当の名前は火蛋白石ファイアオパールの塔というらしいが、そう呼ばれているところは聞いたことがない を警備にあたる護法軍の駐屯地へ、近くの街で買い集めた物資を運んで手間賃を稼ぐ、というのが俺の仕事だ。帰るときには反対に護法軍の払い下げ品とエリクサーか、魔法の塔で調合される霊薬、時々人間を運んで街に戻る。

軍の補給線はボロボロで、民間のしょぼくれた運送業者でも利用しないとやっていられないそうさ。つまり俺もそのしょぼい運送業者の使い走りってことになる。

それはどうでもいいか。

その日は比較的灰を浴びていない食料を駐屯地に運び込んで、その代わりに何かやたらでかくて重い箱を積み込まれた。

いいかいリエ、そいつを2つ先の宿場に届けてくれ。その馬屋に護法軍の連絡員がいる。そいつに荷を渡してくれ。

顔なじみの輜重隊のおっさんにそう言われて、俺は正直断りたかった。なにしろその荷物は重くて、荷台が傾きそうなくらいだったからだ。おまけにいつもの街までじゃなく指定の宿場まで行くとなると距離もかなりある。ウロコ馬は頑丈で力強いが足が遅い。たぶん宿場までは急いでも3日か4日はかかるだろう。

街と駐屯地との往復なら毎日通えるわけで　当然その日数分は
仕事はもらえない。

それだけなら特別料金を護法軍に請求すればいいが、問題は移動
する時間がどうやっても長くなることだ。

なにしろこの世界では空から毒の灰が降ってくるのである。

それをしのげる屋根のある場所にいないと死ぬ危険がある。晴れ
ていればまだしも、防毒マスクを被りっぱなしで一日中馬車に揺ら
れることを考えると気が滅入る　滅入るといっか、死んだりする
のだ。ついでに言うと、晴れている時のほうが珍しい。

ただ、それでも引き受けたのは護法軍から提示された特別料金の
額がいつもの30倍近くあったからだ。

ようするに、だいたい一月分の稼ぎが一回でいただけると。そう
いうわけだ。

だから俺は恨めしそうに低い声で鳴くウロコ馬の手綱を引いて、
半笑いで馬車を走らせた。

この世界はもうすぐ終わるらしい。

が、俺は日本にいた時より上手くやれているかもしれない。

そんな気がしている。

02 第二乾季に灰は降り積もる

日の差さない曇り空から灰の降る様子は雪景色に似ている。

ただし寒さは感じない。

一方の俺は死にかけのカラスに似ている。

灰の毒素をかなり緩和できる 残念ながらあくまで『かなり』だ 防毒マスクの吸気口は、何層かのフィルターをパフエみたい詰り込んだ円錐形になっていて、大きなクチバシを付けているように見える。そこにフード付きの黒い灰合羽をかぶっていると、もう飛べなくなつたカラスを表現した舞台衣装という感じがする。

好き好んでそんな格好をしているわけじゃない。マスクを付けないと命に関わるし、黒い合羽は体に落ちた灰を見つけやすくするためだ。

花粉症を思い浮かべて欲しい。外出先から戻ってきて、花粉をはたき落とさないと家に花粉を持ち込むことになるだろう？

それと似たようなものだ。ちゃんとふるい落とさずに生活空間の中に毒の灰を持ち込んだらどうなるか。最悪の場合、クシャミと一緒に崩れた気管のかたまりを吐き出すことになる。

だから俺だけじゃなく、この世界の人間は灰を見分けやすくするような暗色の服でないと迂闊に外出できない。明度の高い色は喜ばれないし、ライトグレーとか白の服を着て人前に出るのは頭のおか

しいヤツとみなされることさえある。

実際に屋外で灰色の服を着ている人間なんて大抵は灰賊だから、頭がおかしいと言うのは当たっていると思う。

そんな理由で黒一色の出で立ちをした御者が、溶けない灰の雪道に馬車を走らせている　という状況を想像して欲しい。

街道の石畳のゆるみに車輪を取られ、ガタリと荷台が揺れる。幌から積もった灰が時折バサツと音を立てて落ちていく。

これが本物の雪なら冬の風物詩ぽくはあるけど、冷たくはないし、うっかり吸い込んだら化石病にかかったり死んだりするから、風情も何もない。そもそも今は第二乾季で、これは日本の気候でいえば夏の終わりから秋にかけての時期にあたる。むしろ残暑の季節なのだ。

だから防毒マスクの中は生ぬるくて、汗と薬液と、濾過しきれない灰の舌が痺れるような匂いがこもっていて、おまけに気軽に外すことさえできない。死ぬからだ。

どう思う？　嫌になってくるだろう？

安心してくれ。もっと嫌な話ばかりだ。この程度のことはずぐ慣れるから。

例えば食料の話。

降り積もった灰の毒は、地面に染みこんで土を爛れさせ、不毛の地　　というかまともじゃない植物しか生えないような土地に変え

てしまう。だから畑が汚されたりすると野菜なんかも全部ダメになる。

家畜もそうだ。三年前、俺がこの世界に転移したというか、連れ込まれたというか、とにかくこっちに來た年に、地球で言うニワトリに当たる種が絶滅した。

半世紀前には当たり前のように飼われて、食卓に上っていたトリ肉も卵もいっさい無くなった。生産されないから流通も止まって、まあ……とにかく絶滅したらしい。

異世界からの部外者に過ぎない俺にとっては、存在を知るより先に消滅した食材に対する思い入れなんてないのだが、『鶏の唐揚げが二度と食えなくなった』と想像したら、それがどれだけ深刻か理解できた。

ついでに言うと、この世界の食糧事情関係なく、日本に戻らない限り唐揚げを食うことはできないわけで、想像というか俺は本当にもう二度と唐揚げを食うことはできないわけで、そのことに気づいた時にはさすがにことの重大さに体が震えた。

それも過ぎた話だ。

俺はもう、この世界の運送業者の雇われ御者で、手間賃をもらって生活して、死にかけた世界の隅っこでもう少しだけマシな生活をしたいと思って生きていくだけ。異世界から転移して、望みはそれだけだ。

本当にそれだけなんだ。

防毒マスクの中で生あくびをして、俺は目の前で車を引くウロコ馬の足取りを確かめた。

最後の魔法の塔にある駐屯地から出て、交易所のある麓の街で数日分の食料と水、あとなんだかんだと細かい道具を揃えて、目的の宿場へ馬車を走らせたのがだいたい丸一日前。

ウロコ馬の調子は悪くない。このペースなら、とりあえずは最初の宿場まではスムーズに行けそうだ。

気をつけないといけないのは灰賊やフィンドだが 護法軍の常駐している魔法の塔に近いこの辺りの土地では、まず心配はいらないだろう。頭イカれた灰賊どもは護法軍に討伐されるし、魔法の塔の修行僧たちが^{エリクサー}霊薬で浄化を施してるから、フィンドがいきなり現れることもないはずだ。

そんなことを考えて、半分眠りながら馬車を走らせている内に、急に空腹感が湧いてきた。

滅亡しかけた異世界に来てお腹は減る。

減る気はなくても減るのはなんでだろうな？

まあ、それもどうでもいい話だ。

マスク越しの視線の先に、うらぶれた宿場町が見えてきた。何事もないだろうと思っただけでも、道中安全だったことに感謝した。

誰に？ この世界の交通安全の神？ 別に誰でもいい。

ともあれ宿場の厩舎まで馬車を回し、駐車料を払い、そこに停めた。

下車してからウロコ馬のザラザラした脇腹を撫でる。何を考えているかわからない面構えだが、喜んでいると思う。

異世界で過ごした三年の間でだいたい確信を持てるようになったのだが、俺はどうもウロコ馬の世話に向いているらしい。

黒ずくめの灰合羽に降りかかった灰を念入りに落としてから、俺は今日の寝床と食事を求めて安宿の戸をくぐった。

一刻も早くマスクを外さないと、鼻のかゆみで発狂しそうだ。

03 毒色の雲の下で

ウロコ馬は文字通りウロコの生えた馬っぽい動物で、卵で増える。

爬虫類だと思っただけで恒温動物で、鳥類との中間とか恐竜とかそんな感じだろうか。哺乳類でもセンザンコウみたいなウロコっぽい皮膚の生き物はあるし……と、以前は色々と考えたものだが、もうそういうものなんだと思って追求するのは諦めた。

ウロコ馬という言葉があるくらいだから、この世界にはもっと地球の馬に似た動物もいるにはいる。でも俺は実物をほとんど見たことがない。これもまた例のごとく、灰の引き起こす病気でごっそり死滅してしまったらしい。それはもう、数が減りすぎて乗用に使うのももつたないほどで、馬車に回す分なんてありはしない。

その点、ウロコ馬はもともと呼吸孔を閉じる機能があつて、砂とかドロとか、そういうものを吸い込まないようにする事ができる。だから地獄の噴火で灰が降ってきてても被害は少なかった。そこに防毒フィルターを装着させれば、人間よりもずっと抵抗力がある使役獣の出来上がりというわけだ。

欠点は動きが鈍いのと、背骨の構造上騎乗するにはあまり適さないことくらいだろう。だから荷駄に重用される。

「お客さん、ここからどちらへ？」

宿で一晩泊まった翌朝、朝食を食い終わった俺に宿のおやじが声をかけてきた。

朝のメニューは蒸かしたナナイモと代用スクランブルエッグ。エグミのあるジャガイモと、味のしないおじやをかき集めたやつみたいな、だいたいそんな感じのを想像して欲しい。汚染されていない調味料があれば、まあ食える範囲だ。

俺が街道の先にある次の宿場だと答えると、おやじは関心したような顔で何度もうなずいた。

愛想のいい態度だが、本気で関心があるなんてこつちも思っていない。単なる社交辞令だ。来た道の方角を考えたら次の宿場に向かう以外ほとんど選択はないのだから。

まあ、そんなことにケチを付けるのは馬鹿げている。

俺は朝食代に多少色をつけて支払って、黒い灰合羽を着込んだ。護法軍からの特別料金は前金で半分もらっているし、多少気前よくしても構わないだろう。

*

この宿場は、よくあるタイプの薄汚い町で、日本で言うシャッター街と流行っていない温泉の歓楽通りを合わせて陰気にしたような場所だ。酒場とか、淫売宿とか、そういうものもあるにはあるが、薄汚れていて利用する気にはならない。

通りは寂れ、わずかな旅人と、最後の魔法の塔への巡礼者、それに俺みたいな運び屋が一晩泊まっていくだけの宿場町。客よりも店の方が多いくらいだ。

「東の大坑道にまたフィードの群れが出たらしいな」

旅用の雑貨を扱う店の軒下で、客と店主がカウンター越しに何かを話している声が聞こえた。

俺はそれとなく近くによって、買う気もない商品を物色しながら耳を傾けた。うわさ話はいくら聞いておいても損はない。

なにしろこの世界は情報をやりとりする手段が限られている。新聞とか郵便はもう機能していない。理由はわかるだろう？

あとは面と向かって会話するか、魔法で遠隔通信するくらいしかない。

これがまた極端な話で、手紙みたいなアナログな手段は使えないくせに、魔法を使った情報伝達はWebカメラを使ったりアルタイルの双方向通信みたいなことまでできる。

俺自身は使ったことはないが、最後の魔法の塔で護法軍の士官が何かがりとりしているのを何度か横目で見たことがある。その時に聞いた『通話料』の高さは今でも記憶に残っている。とてもじゃないが俺の稼ぎで気軽に使えるものじゃない額だった。庶民じゃなく、軍事用だから利用できるようなものだろう。

それほど金のかからない手段はほぼ壊滅していて、物凄く便利な方法は高額すぎて使えない　という状態なので、一周か二周回つてうわさ話が一番重要になってくる、というわけだ。

ただし、聞こえてくるのはほとんどが暗く惨めな話ばかりなのだ
が……。

「またか……今年に入って何回目だ？」

「護法軍が死守しているらしいが、もうまともに補給も回ってないってんだろ？ いつまでもつやら」

「やっぱり鉱山を先に攻め落としてるってのは本当なんだなあ」

「そりゃあそうだろう。秘石は魔法の要だからな。あの忌々しいフイールドも、人間から魔法を奪おうとしているのさ。ヒデエ話だ」

「もうずっとそんな話ばかりだろ。マスクを作れなくなったら、あとはもう……」

「鉱山を墮とされて、『真の名前を授かりしトゥルメイン導師』様がたの魔力がなくなったら、あとはもう……」

「そうだな……そうになったら、あとはもう……」

店主たちの会話はそこで途切れた。

続けて何を言おうとしていたかは、別に俺じゃなくてもこの世界にいる人間なら誰でもわかる。

あとはもう、滅びるしかない。

「そんなこと、分かりきってるだろ……」

口に出してそう言うってから、俺はマスクを付け、灰よけの浄化隔壁をくぐり抜けて厩舎に向かった。

珍しく灰は降っていなかったが、不吉な毒色の雲は空に居座り続
けていた。

完全に晴れる日は、おそらくもう来ないのだろう。

俺は青空がどんな色だったか思い出せなくなってきている。

04 灰に取り憑かれし者

目的地の宿場町が見えてきた。長時間席に座りすぎてケツが痛い。道中で新しめの死体が転がっていたのを見た。外傷はなかったから灰の毒にやられたんだと思う。

無視して通り過ぎたが、別に俺が薄情だと思わないでほしい。

灰の毒が回った地面を掘り返して叩くのはそれだけで危険が伴う。荷台に載せて街まで運ぶのも喜ばれないだろう。これ以上墓を増やしていたら土地が全部死体で埋まってしまふ。

目的地の宿場も、ひとつ前のところと大差はない。つまり、寂れていて活気がなく、死にかけている。

護法軍から指定されている場所はここの馬屋で、荷台のものを引き渡せばひとまず仕事は終わりだ。

ウロコ馬にはかなり無理をさせてしまった。距離はともかく載せている荷物がやたらに重い。

長方形のいかにも頑丈そうな箱は固く封をされていて、中身については聞いていない。軍に依頼されているのだから武器やら何やら、そういう軍需品が入っているのだと思う。多少興味はあるけど、手間賃の上積みが気前良かったのは詮索するなという意味も含まれている。余計なことを考える必要はないだろう。

今ははとつとと護法軍の連絡員とやらに引き取ってもらって、宿で休みたい。

馬車を停めて、俺は馬屋の様子をうかがった。管理人らしきおばさんがいるだけで、他に人影はなかった。

俺のもの以外には馬車も停まっていけない。荷物は人間の力で運ぶような重さじゃないから、つまり相手はまだ来ていないということになる。

こっちに待たせる気か？

俺は防毒マスクの中でうんざりとため息をついた。それに合わせたかのようにウロコ馬も小さく鳴いた。馬というよりはヤギとウシガエルをミックスしたような声だ。

誰かがやってくる気配もなく、仕方なく馬屋のほうきを借りてウロコ馬の背中や馬車の幌にかぶった灰を払い落とした。サラサラとこぼれる灰は、角度によつてはやや青みがかつて見える。なんて言えばいいのか、駅前のハトの羽根みたいだな、そんな感じだ。その色は灰から毒性の抜けていない証でもある。

あらかた掃除は終わったが、まだ誰も現れない。

はい。はやく防毒隔壁の中に入ってマスクを外したいのにそれもできない。

まさか相手がその隔壁の中でのうのうとしているなんてことはないだろうな。そう疑うと、何かどんどんそんな気がしてきた。よく考えれば馬屋で荷物を引き渡せと言われただけで、誰がどんな風

に接触してくるかは気にしていなかった。護法軍なら特別な紋章を付けているはずだから 制服を作っている余裕なんてない すぐわかるとしか思っていなかったからだ。

ウロコ馬が濾過水を飲んでる様子をぼんやり眺めながら、やることもなく俺は自分が御者の仕事をあてがわれた経緯を思い出していた。

と言っても大した理由じゃない。どんどん死んでいくクラスメイトの連中や、どんどん疲弊していくこつちの人間を相手にするよりは、異世界の妙な姿をした動物の世話をしている方が気が楽だったからだ。

その時、急にどこかで雷が鳴った。

俺も、ウロコ馬も、馬屋の管理人のおばさんも、同時に驚いて音のした方角に振り向いた。

灰白色に煙っているものの、今日は晴れている。晴れているというか、いまは乾季にあたる時期なので灰は降っても雨が降ることはごく稀で、雷鳴が響くというのはちょっと考えられない。

雷でないなら何なのかと言えば、それは……。

今度は馬の嘶いななきが聞こえた。それはどんどん近づいてきて、車輪の音もする。どうやら馬車の走っている音だ。

ついでに誰かの叫び声も載せて、とうとう馬屋から見える距離まで馬車が近づいてきた。全速力で、しかもそれは本物の馬車だ。つまり、ウロコ馬じゃなくて、地球で言う農耕馬に似た本物の馬

毒の灰のせいでほとんどが死滅したはずの大馬を二頭立てにして引かせている、この世界にかつて存在していた馬車だ。

馬の頭には専用の防毒マスクがつけられ、背中には馬用のマントまで被せられている。

そして御者の席には マスクとフードを引きちぎられ、顔中の穴から血の泡を噴き出している男がいた。

何度も見たから知っている。

灰の毒を直接吸い込んで、気管から肺、あとおそらく胃まで毒が回ったんだろう。毒と言っても爛れるとか神経毒とかそういうものじゃない。内臓が砂山みたいにボロボロ崩れて、致死率は100%。

だがそれよりも問題なのは、その大馬車がまっすぐ馬屋の方へと突っ込んでくるコースをとっていることだ。

いかにも特別製といった感じの屋根付きの荷台には護法軍を示す紋章が掲げられ、そして……。

その屋根の上には、異様に手足の長い丸裸の男がへばりついていた。

病的な青白い肌。その手足はまるでバツタか何かのようで、人間のように見えてまるで人間ではない。そいつは狂ったような叫び声を上げ、馬車の屋根を引き裂こうとしているようだった。

しかし見ていられる余裕はそこまでだ。

大馬車は、本当にそのまま馬屋に突っ込んできた。

俺は驚いてその場を離れたが、そうしなければ轢かれていただろう。

酷い状況だった。

貴重な大馬は柵に激突して横倒しになり、同じように屋根付きの馬車も車輪が壊れて横転した。御者だった男は地面に投げ出され、痙攣しながら血を流し続けている。

そして 屋根から振り落とされた人間もどきが、しばし手足を上に向けてもがいたあと、四つん這いに姿勢を立て直した。

最悪だ。

俺はマスクと灰合羽の中でどっと汗がにじむのを感じた。

御者の男は毒を吸って死んだ。

目の前の男は、毒を吸っても死ななかった。

体組織が崩れる代わりに、まるで違う何かに変わってしまったのだ。

人間の中には、何割かそういう奴がいる。そういう奴は、人間じゃなくなる。人間じゃなくなったそいつは 人間の敵になる。

灰に取り憑かれた悪鬼、フィードとなって。

05 ルシウム

先に死ねた奴は運がいい。

地獄の噴煙が舞い上がり、空から毒の灰が降り積もるようになってからこちらの世界の暦でおよそ半世紀が経つという。

その間に何人死んだのか　というより、何割が生き残っているのか　それを把握している人間はたぶんこの世にはいないだろう。

俺が3年前にこの世界に来た時は、もう何度か言ったかもしれないが授業中の教室にいた全員が一緒だった。その時は灰に毒があるなんて誰も知らなかったから、わずかな間に大勢死んだ。

そのペースを参考にすると、もし防毒マスクや魔法の力で灰の影響を抑える事ができなければ、この世界はとっくに死滅していただろう。

灰を吸い込んだ人間の体が内側から崩れる様子は最悪だ。

初めてそれを見た時は、日本からそのまま持ち込んだ胃の中のもの全部吐いた。クラスメイトが何人もそうなるのを見た。その何十倍も多くこっちの世界の人間がそうなるのを見た。

お陰で俺は無感動な人間になった。

わかるだろう？　試しにこっちに来てみるといい。死ぬか、慣れるか、どちらかしかないんだ。

死んだ奴にしてみれば、わけもわからず血反吐撒き散らして死んで無念だったのかもしれないし、激しい苦痛でそんなことを考える時間さえなかったかもしれない。

眼窩から目玉と一緒に血の塊を吹きこぼして死んだ同じクラスの女。その死の様は覚えているのに、もう顔も名前も思い出せない。あいつがどんな思いで死んでいったかなんてわかるものか。

ただ、どうせ死ぬならすぐ死ねただけマシだったはずだ。

それはつまり　すぐに死ねない場合もある。

呪われた毒のせいか、持って生まれた体質のせいか、どちらが原因なのかわからないが、体組織が崩れてほぼ即死するのではなく、肉体が別のものに作り替えられてしまうことがある。

そのひとつは、体の末端から少しずつ石に変わっていったって、最後には全身が石になる化石病。

もうひとつが、生きながら化け物に成り果ててしまう灰憑きだ。

灰の毒は地表にせり上がってきた地獄に由来している。ドロドロの溶岩を想像して欲しい。そこには浄化のために地の底へ投げ込まれた罪業や怨念が岩に混じって溶けている。事実なのか単なる神話なのかは別として、魔法が実在する世界なのだから地下に悪魔がいてもおかしくないし、そのせいで世界が滅びても不思議じゃない。

地獄の灰を浴びた人間が人間以外の何かに変わることだってありえる。

灰の毒に取り憑かれ、他の人間を襲うことだつてある。

死ぬほど苦しみながら、生きている人間を死ぬまで苦しめるだけの存在になつてしまふこともありうる。

フイーン下
悪鬼だ。

*

話を戻そう。

いま俺の目の前には、灰を吸い込んで内側から崩れた死体と、馬屋に激突して横転した護法軍の馬車と、それに巻き込まれた二頭の大馬と、そしてバツタのような長い手足の人間もどき、つまりフイーン下がいる。

大急ぎでこの場から立ち去るべきなのは言われなくてもわかっている。

でも頭が真っ白になつて、俺は逆に馬屋の奥の方へと逃げこんでしまった。とっさの行動だったとはいえ、全然上手くない。逃げ場のないところに逃げ込んで、その先は？

追い打ちを掛けるように手長足長のフイーン下が狂つたように泣いた。

叫び声が青くない晴天に響き、水死体のような顔は吹き出す涙でぐちゃぐちゃだ。動物のように鳴いているんじゃない。人間みたいに泣いている。

泣き叫び、大量の涙を流しながら、フィンドはがさがさと横倒しの大馬のところへと這い寄った。そのまま長すぎる手足を馬体に絡めて抱きつくのと、逃れられず暴れるその濃い栗色の首筋に爪を立て、引き裂いた。

大馬は信じられないような大声で嘶き、残りの一頭にも恐怖が伝染して叫びを上げ、さらにフィンドの泣き叫ぶ声が入り混じり、その場にある全部が発狂したかのようだった。

もしかしたら気がついていないだけで、俺も一緒に悲鳴をあげていたかもしれない。

分厚い大馬の首の皮はぱっくりと裂け、血を吹き出した。なおも力強く振り落とそうとする大馬に対し、青白く浮腫んだフィンドは鉤爪を伸ばし、顔面をかきむしった。

また絶叫が、そして鮮血が吹き上がった。

メチャクチャだ。

痙攣してそのまま失血死するであろう大馬からフィンドは体を引き剥がし、血まみれの体で虫のように這いずった。涙にまみれた目の、その視線の先には馬屋から飛び出て逃げようとする管理人のおばさんの姿があった。

足首を掴まれて引き倒されて、それから……それから？

別に細かく説明する必要はないだろう。

おばさんは死んだ。そのあと服ごと腹を裂かれて、中身を食われた。

食いながら、フィードはときおり激しく泣き叫んだ。

よく泣くんだ、フィードは。

誰がどうやって調べたのか知らないが、意識を残したまま脳を乗っ取られ、拷問に掛けられたような苦痛を全身に受けながら人間を殺して喰うように仕向けられているせいだという。

理性のある善人が拷問にかけられて、他人を殺すように強制されたらどうなるだろう？ 肉体的な苦痛だけでなく、精神的にも葛藤で責めさいなまれて……。

泣くしかないだろう、そんなの。

で、次は俺の番だ。

灰合羽の内側に護身用の銃を吊るしていることなんてすっかり頭から飛んでいる。もっとも、撃てたところでフィードを殺せる保証なんてどこにもないんだが。

ともかくフィードは、泣きながら俺の方を見て、肉片の生々しい汚れをこびりつかせた顔で詫びた。今から殺すけどごめんなさい、とでもいうように。そう見えたのは、俺の都合のいい解釈だったかもしれない。

長い手足に力を込め、狙いを定めて一気に飛び跳ね、次の瞬間血がぶちまけられた。

フィードは、胴体を杭で貫かれていた。うつ伏せの背中側から胸を貫通し、地面に縫い付けられている。

水たまりのようになった鮮血を、フィードのタールみたいな体液が上塗りしていく。

「君がイリエか？」

急に声を 生きている普通の人間の声をかけられて、俺は死ぬほどびっくりした。

尻餅をついた俺を見下ろすようにして、誰かが立っている。

「事が後先になったが、『荷物』を受け取りに来た」

防毒マスクからのくぐもった声。護法軍の腕章をつけていることを指さして、そいつは自分が連絡員であることを示した。

そいつは その女は、自分のことをルシウムと名乗った。

引き渡し相手の名前なんて知ったことではない。

今すぐこの場から解放してくれ。

俺はそれしか考えていなかった。

06 別け隔てなく地を洗う絶滅の波

国土が毒で腐って、統治者が死んで、国民の大半がいなくなったらどうなるかということ、法も秩序も無くなる。

地獄が地上にあふれ、空から毒の灰が降るようになるると本当にそうなった。文字通りの無政府状態だ。

考えうる限り最悪の伝染病も、降り続ける灰による絶滅の波に比べれば鼻風邪みたいなものだ。誰かがそう言うのを聞いたことがある。

そんな状況だというのに、強盗や山賊、暴徒の群れがあちこちで暴れまわって、手が付けられなくなっていたという。そんな状況だからこそというべきか。

最初に灰が降り始めて数年は、混乱に乗じた戦争だの略奪だの、人類の内も外も本当に酷いものだったらしい。毒で死に、食料不足で死に、残った土地と食料を奪い合い、殺し合いで死体が増えるだけ増えた。その様子を実際に目撃した人間はほとんど生き残っていない。半世紀ほど昔の話だし、この世界ではまっとうに歳を取ることにさえ難しい。

やがて護法軍ができた。

危機に直面した世界の狂乱を鎮めて秩序を取り戻すという使命感から、滅んだ国や機能しなくなった組織から自然と軍人や法の番人が集まって生まれたいらしい。新しい統一国家を作るのではなく、た

だ人命を守り、歴史が築いた法を護るための組織。信じられないことだけど、連中は本気で平和を求めている。全員が全員じゃないにせよ、護法軍という組織そのものは公正と正義と義憤を基礎にして、そうするように、そうあるように、そうなるために働いている。

俺の知り合った護法軍の軍人は少なくともその手の人間だった。心が広いといつかなんといつか、地球とは少し考え方が違う気がする。神の祝福で言葉が通じ合うからだろうか？

でもそれとは全く反対の略奪行為が横行していたわけで やっぱりそんなに変わらないのかもしれない。

山賊や略奪者たちは、真っ先に護法軍に狩られた。あぶれ者とはいえ元々正規の軍人たちが集まった軍隊だ。明日の命も顧みない賊どもは片っ端から捕縛され、尋問され、処刑された。

大規模な暴徒の発生や略奪はなりをひそめ、一応の平穏を取り戻したのは護法軍の貢献によるものだ とされている。

確かにそれは間違いないと思う。

だとしても、人間同士の脚の引つ張り合いが減ったところで毒の灰による死者の増加は止めようもなかった。人間の法と秩序は人間に対して有効でも、人間の枠の外から襲ってくるものに対してはそれほど効果は期待できない。

護法軍も大勢死んだ。

善意も誠意も別け隔てなく死んだ。

そうなるとうとうしても抑えきれない犯罪者が現れる。灰の降る野山に紛れて通行人を襲うような連中が。

毒の灰に埋もれて犠牲者を待ち構えるのは狂気の沙汰だ。わかるだろう？ 爛れた土と毒の灰にまみれて獲物を狙っている様を想像して欲しい。いくらマスクをつけていても全てを防ぐことなんて無理だ。

それで金品や食料を手に入れたとしても、その先には何も無い。半日先の命さえ見えない。略奪と言うよりは無理心中に巻き込むようなものだ。

灰賊。単なる無法者と言うよりもっとひどい、完全に頭がイカれた連中を指す言葉として、今では山賊でなくそう呼ばれている。

フィンドと同じく、そいつらはもう人間社会すべての敵と言っている。

その両方に人間は脅かされ、その両方と護法軍は戦っている。

フィンドの苦痛に満ちた残虐さのせいで血の雨に濡れた馬屋で俺の目の前に現れたルシウムと名乗る女もそのひとりだとしたら、化け物を倒せる力を持っていても不思議じゃない。

とはいえ たとえ死体を見慣れたとしても、殺しあう場面にはどうあっても慣れない。何がどうなったかわからない内にフィンドを串刺しにして殺した相手を前に、助けられたのだと頭半分ではわかっていても、俺はその場から一秒でも早く逃げ出さなくては仕方なかった。

「どうした？ 君がイリエなんだろう？」

フードとマスクで顔もわからない女の声はいかにも軍人然とした口調だった。高圧的なようにも聞こえる。俺を助け起こそうともしない。

緊張のせいでマスクの中で咳き込んでから、その通りですとだけ答えた。立ち上がった途端に強烈な立ちくらみに襲われ、ふらついて馬屋の柱に寄りかかった。膝の皿が面白いように震えている。

「もう少し早く着く予定だったのだが、見ての通りだ」

死人と死人と死んだ大馬と死んだフィード。二頭立ての馬車も横転して軸受けから車輪がすつ飛んでいる。最悪だ。

「それで、荷物は？ 無事か？ どこにある？ あれか」

そいつは俺に有無を言わせる間を与えることなく馬屋の隅に停めである俺の馬車を指さすと、勝手に覆いをはぐって荷台の中を改めた。無遠慮に、こっちのことなどお構いなしだ。

何だこの流れは。

興奮冷めやらず、感情を持って行く場がない。理不尽なものを感じた。依頼されたからこんなところまで持ってきたのに、取り調べを受けているような気分だ。

「よし、では出発する」

でかくて重い長箱の蓋を軽く叩き、そいつはあっさりとそう言う

た。箱の中身は開けてないようだ。頑丈で見た目からして普通ではないので確かめなくてもわかるのだろう。

俺は全身から気が抜ける思いだった。

物音を聞きつけて、宿場町の住民やら逗留客やらが防毒隔壁から出てきてこちらに寄ってくる気配がする。これから事情を説明しなければいけないかと思うとたまらなく億劫だが、マスクを外して一息つかせてくれればそれでもかまわない。

荷物を下ろして、この女に渡して……。

「違う、そうじゃない。これから出発するんだ」

「え？ だから荷物をそっちに渡しますよ」

「君はアレが動くと思うのか？」

そう言っつて、女は自分が乗ってきた二頭立ての馬車を指差した。

「いや、その……思いませんが」

険のある言い方だと苛つきながらも、一応は下手に出た。護法軍と余計な衝突をしても何の得にもならない。

「だから出発だ。今すぐ準備をしてくれ、ここに長居するつもりはない」

「準備、つて……まさか？」

「まさかも何も無い。君が走らせるんだ、あのウロコ馬を。あの箱と、私を載せて」

人だかりが馬屋を見て、その惨状を見て、死体と俺と女を見て、大騒ぎになっていくのがわかった。

灰合羽の内側に吊るしてある銃の存在を、俺は肝心なときにも忘れる。

どんなに焦っていても、そのことは思い出せるようにしておかないとダメだ。

でないと肝心なときに撃ちぬけない。

たとえば、目の前の女の頭を。

07 魔法は消え、インフラストラクチャーは呼吸を止めた

誰かに似ている。

俺はウロコ馬の引く馬車を走らせながら、ずっとその誰かのことを考えていた。

護法軍の連絡員、今は馬車の荷台に例の大きな荷物と一緒に乗っているルシウムという女軍人。

俺の知っている誰かに似ているような気がする。

まだマスクを外した顔を拝んでもいないのに似ているも何もないのだが、口調とか、立ち居振る舞いとか、そういう雰囲気の話だ。いかにも有能そうで、実際有能で、本人は無意識なのかもしれないが相手よりも自分が一段高いという関係を最初に作り上げるタイプ。

「イリエ」

荷台から灰よけの覆い越しにルシウムの声がした。くぐもって聞こえないのは、幌の中でマスクを外しているからだろう。

「……何スか」

「ここにある水だが」

「ああ、それは……」

「ひと瓶飲ませてもらった。清浄水かと思ったが、印が入っているだけで中身は濾過水か。君、まさかこんなやり口で商売をしているのか？」

感心しないな、とルシウムはたしなめるようにそう言った。

俺は荷台に飛び乗って顔面をぶん殴る自分を想像した。ありありと想像できた。実行はできない。相手は正規の訓練を受けた軍人で、こっちは何となく生き残っただけの臆病な異世界人だ。やれと言われても身体は動かないだろう。

情けない野郎だと思われても仕方ない。無理なものは無理だ。

ただ、この時の俺がかなりの怒りを感じていたのは知っておいて欲しい。

この世界は年がら年中毒の灰が降ってくる。わかるだろう？ 土や生き物だけじゃない。水も穢されているんだ。

上下水道は、俺がこっちに来た時にはもうほとんど機能していなかった。最後の一本を残して魔法の塔がなくなったせいで魔力の供給ができなくなったとか、設備を維持できる人間が死に絶えたとか、そういう理由でだ。

だからある程度我慢しないといけない。

生活用水、飲料水、そういうものの全部に毒が混じっていることを承知のうえで、それでも使わざるを得ない。

防毒マスクと同様のフィルターで毒を濾過して、許容量を上回ら

ないようギリギリまで抑えた濾過水が一般的だけどそれでも十分手間がかかる。もちろんタダでは手に入らない。

魔法を使って純化させた清浄水はもつと貴重で、ほとんど嗜好品扱いだ。

この世界の王侯貴族が味わう贅沢とは何か、と言われたら、清浄水100%の風呂に好きなだけ入って、風呂あがりに冷えた清浄水を一杯飲むことだろう。王侯も貴族ももういないけど。死んだから。

荷台に置いてあった水は、確かに清浄水の空き瓶に入れたものだったがそれは偽装して売りつけるためではなく、単に俺自身が飲むために取っておいたものだ。文句をつけられる謂れはない。

しかも何の断りもなく勝手に飲んでおきながらの話だ。もう一度言っておくが濾過水でさえタダじゃない。

付け加えると、俺はもう何時間もマスクをつけたままで飲まず食わずなんだ。わかるか？ わかるだろう？

俺は最大限皮肉を込めて、タダ飲みはカンベンしてくださいよとか、何かそういうことを言おうとした。だが、言葉を選んでいる間にルシウムの方が先に口を開いた。

「ああ、料金については心配しないでいい。護法軍から相場の倍支払おう」

金の問題じゃないんだよ。

無意識に、俺は懐の銃の感触を確かめていた。あくまで無意識に

だ。抜くつもりなんてない。こんなところでキレて撃つほどバカじゃない。人類全部が少しずつ崩れる崖に追いやられたような世界だとしても、犯罪は犯罪だ。だから撃たないし、撃てないが、撃ちたい気持ちになったことくらいは許して欲しい。

「じゃ……じゃあ何でしたら残りの水も買ってもらいましょうかねえ？」

「それには及ばない。私は自前の携帯まほつびん式浄化魔法瓶を持っている」

「……は？」

「ちょっと試しにここにあるものを飲んでみただけだ。もう結構。それよりこの馬車、もう少し早く走れないのか？ やはり大馬二頭を潰してしまったのは痛手だったな……」

ルシウムがそのあと何を言っているのか、俺はもう耳に入らなかった。携帯式浄化魔法瓶とは、名前の通り水を入れたら浄化する魔法をかけられた水筒のことだ。浄水場が持ち運びサイズになったようなもので、それだけでひと財産築けるという代物だ。

そんなものがあって、自分はいつでも清浄水を飲めるのに、荷台の水を、俺の水を、この女勝手に、勝手に飲んでおきながら……。

環境が悪いと、マスクを剥ぎとって地面に叩きつけることもできない。

肝心なときにはいつも銃の存在を忘れてしまうのに、こういつとき限って銃の存在をはっきりと意識できる。

ウロコ馬が恨みがましく鳴いて、首をブルブル振った。こいつもあんまり休めていない。おまけに人間ひとり分荷物が重くなっている。本当なら宿場で俺も泊まって、何ならもう一泊休んで魔法の塔に引き返してもいいか、くらいに思っていたのだが……。

肝心なときって、もしかして今なのか？

08 血の色の森に鳥は啼かない

地獄の灰は地上に満遍なく降り積もって、平等に人間を行き場のない道に追い込んでいった。国家元首も芸術家も医者も魔法使いも平等に死んだ。

金持ちや社会的地位のある人達は、灰を防ぐ手段を一般市民よりは多く用意できたから少しは延命できただろう。でも、権力や金でどうにかできても限界はあるし、そういういわゆる「持てる者」は混乱期に戦争と略奪という、悪魔のしわざとは別の理由で削られてすり潰されて、結局灰を被った。

生き残りの人々が積極的に守ろうとしたのは、魔法の使い手だけだ。

まあ、当然のことだ。

この世界で何とか人間が生きていられるのは防毒マスクや浄水装置、村とか町を守る防毒隔壁のおかげで、そういうものを作り出せるのは魔法使いしかいない。

最後の魔法の塔に護法軍が駐屯地を作って嚴重に警護しているのはそのためだ。魔法の力の総元締めである魔法の塔と、そこに住むほんの数人しかいないトウルーマイジたちが失われたら とうなるのかな？ たぶんもっと多くの人間の死が二次関数みたいに跳ね上がるんだろうな。

ついでだから少し説明しておくと、この世界の魔法は神様に与え

られたもので、魔法使いはその力の源に近づこうとする人たちのことだ。だから坊さんとか神父とか牧師とか、宗教の出家修行者みたいな存在を想像して欲しい。下は修行僧から上は大司教、頂点にいる真の魔法使いは法王とか教主とか、そういう感じだ。

防毒マスクに欠かせない霊薬をつかったフィルターなんかを作るのは階級が下の方の修行者の役目なんだがそれも年々数が減っている。生活の維持に欠かせない存在だからむやみに忙しい　　というか酷使されている上に、毒を受ければ魔法使いも死ぬ。下っ端を指導する高位の魔法使いも死ぬ。教育者がいないと弟子が育たない。霊薬を必要量生産できる体制はどんどん崩れていく。

悪循環が極まっている。

そうやって上に上に原因を辿って行くと頂点にいる真の魔法使いたちに行き着くわけだけど、これもまあ似たような話になる。つまり魔法の本質が一番近いトゥルーメイジたちも頭数が減りすぎて今さらどうにもできないのだそうだ。

それならもうどうにもならないんだろう。

魔法の力が栄華を誇っていた時代のことなんて俺には知る由もないが、魔法を使える者が多い場所、魔力の根源に近い場所ほど灰の毒を抑える力や方法が多いことは事実だ。逆に言えば魔法の力の及ばない場所、魔法使いの少ない地域はそれだけ危険が多い。俺はたまたま命拾いして、魔力の中心地である最後の魔法の塔とその近くの街を往復する仕事につけたわけで、この世界に来てしまったことを除けばその他大勢の世の人たちよりはるかに運が良かったといえるだろう。

いまはそうでもない。

俺は初めはまったくそんなつもりはなかったのに、魔法の塔を出発してからもう一週間以上馬車を走らせ続けている。

目的地は旧アベリー市と呼ばれている都市。魔法の塔からも、俺のささやかな住まいからもどんどん遠ざかっていくルートをとることになる。

旧アベリー市は、昔は交易で栄えていた大都市だったらしいが、灰が降りだしてからはそれが災いして戦争や略奪や疫病やその他諸々でそれはもう酷いことになった。

住民の多くは毒の灰で死に、無意味な戦火で殺され、略奪された。何割かはフィンドになって隣人を殺したり殺されたりもした。生き残った住民もそんなところでは暮らせない。街を離れざるを得なくなつて、残った住民はさらに死に続け、それを繰り返した。

逃げられない者だけが残った。

それから十年かそこら経つ頃には毒の灰による絶滅の波のほうにさらに深刻になり、廃墟の街よりもっと行き場のない難民が集まってきた。

それで結局また同じように周辺地域の人やモノが流れる場所になったという。

そんな場所に何の用があるのか知らないし、聞きたいとも思わないが、俺は相変わらず荷台に乗っているルシウムを運んでいる。

別に休みなくぶつ通して馬車を走らせているわけじゃない。道中の宿場に停めて休みはとっている。

それも、俺の普通の暮らしよりずっとまともな休息だ。かなり安全性の高い料理を食って、蒸し風呂でないお湯を使った風呂にも久しぶりに入れた。

そんな贅沢は俺の財布の中身で気軽にできるものじゃない。

護法軍の後ろ盾を持つルシウムが気前よく払ってくれたからだ。

だからなんというか、情けないと思われるかも知れないが、結構悪くない気分ではある。

予定になかった旧アベリーまでの道を走らせることになったのは全く気に食わないし、ルシウムの態度はもっと気に食わない。だが腹がいつぱいになるとか体が清潔になるとか、そういう生理的な気持ちよさには抗えなかった。

なにセマスクをつけていないと外出できない環境で、俺は外に出ざるを得ない御者。おまけにこの世界はどこでも慢性的な水不足だ。わかるだろう？ そんな生活を余儀なくされる中で、冷たい水で心ゆくまで顔を洗えることの幸せが。

釈然としないような、役得のような、両方が入り混じった後ろめたさのようなものはあるものの、俺は断る機会を失って、命じられるまま目的地へと向かっている。

こつこつという時は、早めに諦めるに限る。

*

いつしか道は森の中へと差し掛かった。

森といっても、幹があつて、枝があつて、緑の葉を茂らせている、いわゆる想像通りの樹木は少ない。

多くが根から毒を吸い上げて幹の中が腐り、立枯している。その腐った木に寄生するように異様な蔦が絡みついているのが見える。有刺鉄線を束ねたようなそれは驚くほど鮮やかな血の色をしていて、葉も花もない。鋭く大きな刺を全身に生やし、宿主の木よりはるかに高く伸びる姿は　　ここが地球とは違う生態系だということを除いたとしても、あまりにも異質だ。

毒の灰をたつぷり含んだ土壤に生える悪魔の木。地獄の茨。

灰色で塗りつぶされた大地に広がる真っ赤な森は、空から撮影したら白黒写真に血を垂らしたような画になるだろう。俯瞰するだけならともかく、実際その中を進んでいると強力に不安を掻き立てられる。

包丁サイズの刺が無数に生えた木は、こちらから近づかなくても不意に襲い掛かってきそうな気がする。そんな例は今までにはないと言われている。だからといってそれで安心できるかというと、別問題だ。

この世のものではないとはいえ森の中だ。視界が悪い。刺は伸びてこなくても、どこかに灰賊が隠れているかもしれないという可能性もある。

こんな場所に身を潜めるなんて正気の沙汰じゃないことはわかっている。でも灰賊なんてそんな奴らだ。みんな頭が狂ってる。

やっぱりこんな道を使うべきじゃなかった。と俺は何度も御者台の上でそう思った。でもルシウムは時間をもつたいないからこちらのルートを使うように指示してきた。頼んできたんじゃないで、そうしろという有無を言わせない物言いだ。

俺は適当に了解して、ウロコ馬の進むに任せた。

神経が磨り減る。

*

クチバシ型の防毒マスクのフィルターを通してなおわかる悪臭。

御者台で熟睡していたところを、転落しそうなくらいビクリと体を震わせて俺は目を覚ました。

「……酷い臭いだ」

荷台から灰よけの覆い越しに女の声が聞こえた。どうやらルシウムもそれまで眠っていたらしく、気だるげに伸びをしている様子が背中に伝わってくる。

「そろそろ目的地に近い。気を抜かないでくれ」

言われてみれば、吹き上がる灰の向こうに建物の影が霞んでいた。俺は居眠りしていたこともあって、こんなに近い距離まで来ていることに気が付かなかった。

ルシウムは幌と灰よけで目張りされた荷台に乗っていて、外の様子は見えないはずだ。

俺はわずかながら尊敬の念を覚えた。安いものだと思っても思うが、護法軍の軍人としての実力のようなものを垣間見た気がしたからだ。

「いや、別にそういうものではないよ。単に悪臭で気がついたただだ」

「悪臭？」

「アベリーの西側……つまりこちら側には河が流れている」

そう言われて目を細めると、確かに濁った水面らしきものが前方に見えた。

そして死体の山に気付いた。

河を堰き止める量の死体。

どうみても悪臭の源だ。

「もう少し遠くに捨てればいいものを。道徳心は無理でも、せめて衛生観念くらいは身につけてほしいものだ」

ルシウムの忌々しげな物言いは蔑みに満ちていた。

馬車は走り、死体の山が近づいてくる。

その向こうに霞む街、旧アベリー市の姿。

俺は吐き気を我慢しながら、街の中はこの光景よりはマシであつてほしいと願った。

当然その願いは届かない。

09 行き先を告げず腐爛するサンドリヨン

嫌な予感がする。

よくある言い回しだ。

この世界に来てからというものの、嫌な予感がした時には必ず嫌なことが起こる。必ずだ。なぜかというところ、ここはありとあらゆる嫌なものをかき集めてできたような世界だからだ。どう転んでもろくなことにはならない。

俺の鼻はとうに利かなくなっていて、何が本当に嫌な予感なのか嗅ぎ分けられなくなっている。だったらいちいち危険を避けようと神経をとがらせるより、投げやりな諦めを抱いている方が精神的にはマシなのかもしれない。

そんな風に思っていた。

そんな風に思うことにしていた。

そこに現れた、旧アベリー市の手前に流れる河を堰き止めるほどの死体の山。

世界は着実な滅びへと一直線に転がっていく。その中にはこんな光景もあるだろう。やむを得ないことだ。

俺は体の芯をねじられるような悪寒から気をそらし、『よくあること』だと自分を騙した。

やがて河を渡る橋まで馬車は進んだ。悪臭を吸い込んだウロコ馬が、勘弁してくれと言わんばかりの鳴き声を上げる。そりゃあウロコ馬だつてこんな場所を渡るの嫌だろう。迂回することも考えたが、渡河できる場所を探すのも一苦労だ

まっすぐ突っ切った方が早く抜けられるんだから我慢しろ、と慰めてそのまま橋を渡った。

腐敗の進む死体の山はさすがにキツイ。人間の死体は見慣れたつもりだったが、それでも直視したら吐いてしまつかもしれない。

橋の両側にはいくつかの小山に分割されて積み上がる死体があり、その周辺で何かがうごめいている。幸い化け物ではなく生きた人間だった。たぶん街の住民なのだろう。マスクと灰合羽を着込んだその姿は遠目にも酷く汚れていて、どう見ても近寄りたくない感じがする。

彼らは 男だか女だかわからないが、どうやら周りの灰をかき集め、死体にかぶせているようだった。臭い消しのためだろうか？

よせばいいのに好奇心を引かれ、俺はその様子を少し詳しく見た。

死体の周りには、面白いほどの量のネズミが死んでいた。

まるで死体をキャンプファイヤーに見立てた死んだネズミのフォークダンスだ。

理にかなっている と言えはかなっている。灰をかぶせておけば、死体をかじりに来たネズミの群れを毒で一網打尽にできる。

生理的嫌悪感を少しの間だけ忘れ、俺はその様子に見入った。

感心した、とは言わない。灰をかぶせて回る連中は、公衆衛生を守るための仕事とか、あるいは死者を弔おうとする行いとか、そうした理由で死者と毒の灰を混ぜあわせているのではないからだ。

死体の服や持ち物を剥ぎとっている。

積み重なった死体の間を縫って金目の物を探し、また次の死体へ。

俺は再び悪寒に襲われた。

だが、それでも 世界の終末にはこんなこともあるのだと自分を納得させた。地球の歴史にだって終末思想はあるし、自然災害や戦争が起きれば似たような光景も現れるはずだ。俺が知らないだけで、ここ以外の地域でも似たようなことはあってもおかしくない。もっと酷いこともあるかも知れない。世界が滅ぶしかないのなら、人間の心がおかしくなるのも当然なんだ……。

そう言い聞かせていれば、俺は自分を騙し通せたかもしれない。

あの靴を見るまでは。

*

諦め。

見て見ぬふり。

このふたつで地獄の灰に沈んでいく世界に順応できた。俺はそう思っているし、実際間違っていないはずだ。

この世界は滅びる。日本には帰れない。異世界で細々と生きて、それ以上のことには関わらない。

抗わず、詮索せず、望まない。そうやって過ごした結果、俺は御者の仕事にありついて、少なくとも餓死や野垂れ死にすることを避けてきた。処世術というのか？ そんなところだろう。

諦めて、見て見ぬふりをする。

その最たるものが……。

気がつく俺は馬車を飛び降りて、死体を漁る羅生門ババアを突き飛ばし、その『収穫物』の中から靴の片方をもぎ取っていた。

遠目にもそれと分かった。傷つき汚れがこびりついていてもひと目で分かった。直に手で持って感触を確かめ、裏返し、確信した。

茶色い革靴。

女物

右足。

MADE IN CHINAの文字。

間違えようもない。

これは学校指定の革靴だ。

あの日、地球の、日本の、あの教室から転移した、クラスの女子の誰かの靴だ。

意識が頭半分ほど体の外に飛び出しているような気分だった。死体だらけの周囲の様子も、音も、腐臭も、降ってくる灰のことも全部吹っ飛んだ。

とつくに諦めて振り返っても無駄だと思っていた三年前の出来事。それ以前の普通の生活。泥だらけの革靴は、片足だけでそれらの記憶を揺さぶった。

「ああああーッ！！」

発情期の黒ゴケザルのような唸り声を上げて、羅生門ババアが俺に飛びかかってきた。いくら死体から金目の物を剥ぐようなババアでも、いきなり突き飛ばされて泥と灰の混じった地面に倒されれば怒り出すのも無理はない。

完全に動揺しきっていた俺はそのタツクルをまともに受けた。

転んで尻餅をついたところに羅生門ババアはさらに追い打ちをかけ、両手を振り上げてメチャクチャに殴りかかってきた。体重も腕力もなくて痛みはほとんどなかったけど、ババアの叫びと手にした革靴と、三年間の暮らしと、いろいろのものが頭をぐるぐる回って抵抗することもできなかった。

何がなんだかわからなくなって わからないままババアは俺から3メートルほど離れたところで泥まみれになって呻いていた。

「イリエ。どういっつもりか知らないが、御者が荷物を捨てて何をやってるんだ？」

いつのまにか横にはルシウムが立っていた。

マスク越しに俺を見下ろす視線には、死体だらけの風景に対するはつきりとした嫌悪感と、何かそれとは違うものが含まれていた。

何と言っているのかわからないがそれは他の何かではなく俺に向けられてるような気がした。

軽蔑ではなく、哀れみ だろうか？ よくわからない。俺が哀れんで欲しいという願望を抱いていたからそう見えたのかもしれない。

「見る」

ルシウムは、手に持っていた刃物を投げ、地面に突き刺した。

「気をつけてくれ。いまさら治安の悪化について講釈する気はない」

ババアが錆びた大ぶりの包丁を懐から出して、俺に振り下ろそうとしてきたところを彼女に救われたらしい。

殴ったのか投げ飛ばしたのか、ババアは薄汚い地面に突っ伏したまま動かない。一応、まだ生きてるように見えた。死んでいるのかもしれない。どうせ死んでも誰からも文句の出ない人間だろう。そういう手合は多い。

「……その靴は？」

手に握りしめていた革靴をルシウムに見られた。

自分で思ったよりも大きく体が跳ね上がり、俺は慌てて灰合羽の中にしまいこもるとした。それはいまさら遅い。

護法軍の軍人女の目からは、羅生門ババアからさらに上前をはねるような行動に見えたかもしれない。俺自身、同じシーンを目にしたらそういう感想を持つだろう。

うまい言い訳は何も思いつかなかった。

卑屈なゲス野郎を演じて少しでも金目の物が欲しかったとか何とか、そういう方向に持って行ってもよかったが、相手は治安を維持する立場の人間で、何をやってもうまくいきそうにない。

俺は異世界から来た人間であることを誰にも打ち明けてはいない。

面倒なことにはかならないからだ。

誰かから指摘されたこともない。

前にも言ったけどここは神の祝福で誰でも意志が通じ合う世界なので、言葉にも不自由しない。骨格や肌や髪の色も特別違和感のあるものではなく、要するに黙っていれば気づかれることはないのだ。

でも、この状況を説明するのは難しい。靴一足の何に興奮したのか。客観的にもわけのわからない行動だ。

「まあいい。こんな酷いところで立ち止まっていけないでは早く街に運んでくれないか？ 君の仕事はまだ終わっていないぞ」

ルシウムは興味なさげに後ろを振り返り、橋の上に停まった馬車と、愚痴を言うように鳴くウロコ馬の様子を見た。

本当に興味が無いのか、そういうふりをしているのか。

どうせ俺なんかにはわからない。

汚れと悪臭をなるべく払い落とし、御者台に登った。マスクの中に溜まるほど汗をかいていたことにその時ようやく気付いた。

何であんな靴なんて拾いに行ったんだろう？ 酷い気分がますます酷くなるだけだ。今さらどうにもならないのに……。

結局、靴は馬車まで持ち帰ってきてしまった。

持ち主はどこかで河を堰き止めているのだろうか。

10 出口が入り口に繋がる迷路

もし防毒隔壁がなかったら、この世界の人間は屋内か地下の坑道にでも籠って、毒の灰の降ってこない場所に一生居続けるしかない。

目に見えない魔法のドームで人間の住む地域全体を覆って、灰そのものをシャットアウトするか、毒だけでも除去する。そういう仕組みが人の住む場所には集落レベルから大都市まで設置されている。逆に言えば隔壁のない場所に人は住めない。

魔法のドームを張り巡らせるには魔法使いによる魔力の供給が欠かせない。

しかしあらゆる面で生活の基礎を支える魔法使いへの負担を増やすことは、いわば貴重な資源を無駄遣いするのと同じことだ。魔法使いも人間だから、体力や精神力を失えば疲弊し、崩れ落ちてしまう。最悪の場合は過労死だ。

何かひとつにかかりきりにさせて使い潰すようなことは厳禁だ。肝心なとき 例えば地獄の噴火が悪化して降灰が増えたり、フィードの大軍勢が襲ってくるとか、そういうときに 魔法の力を結集できなければ、もっと酷い絶滅の波を引き起こす原因になる。だから必要な魔力をなるべく軽減するために、魔法のドームだけでなく実際には物理的な壁や屋根なんかを組み合わせて、騙し騙し維持しているってわけだ。

そういう大規模な防毒構造のことをまとめて隔壁と呼んでいる。簡単にいえば防毒マスクの拡大版だ。

旧アベリー市は人口密集地であり当然防毒隔壁は設置されている。それを信用するならば、表通りを歩いていてもマスクをする必要はない。

市内全体を高い壁で取り囲み、おそらく帆船の帆布を利用した大きな布をあちこちに張り巡らせ、大都市を灰からカバーするためにいろいろと考えられているようだった。

壁の外にはそんな庇護下にも入れない貧民が、ボロ布とゴミを組み合わせたテントで寝起きをしていた。灰の中で顔だけ隠して仰向けになっている奴もいる。そんな気軽な感じで生き残れるのか、と感心すればいいのだろうか。それともすでに死体なのかもしれない。

俺が仕事を手に入れて暮らしていた街は、最後の魔法の塔に一番近いという地理上の理由で防毒管理が行き届いていて治安もよく、そんな灰晒しのホームレスなんていなかった。まともに家を持ってない貧民も少なくはなかったが、少なくとも隔壁の外に追いやられるところまではいかなかった。

ここは違う。近くの河に死体が積み上がっているような街だ。そんなこともありうるくらい荒んだ場所なのだろう。

護法軍所属のルシウムの口利きですんなり隔壁に入る頃には、俺の顔はすっかり青黒くなっていた。灰の除去が確認された瞬間にマスクを外し、初めて来る街への挨拶代わりに胃の内容物を全部献上した。

マスクの中で吐くのをぎりぎり我慢できたのは幸運だった。

十分すぎるくらい幸運だ。

*

アベリー市は一度廃墟になって、死んだり逃げたりしてほとんど無人になって、そこに難民が押し寄せたって話はしたよな？

空から毒の灰が降ってくるご時世だ。絶滅の波が広がり、予想もできないほどの大量死がおきて、それと同じくらい多くの人たちがまともに暮らせる家を失った。せめてマスクを外して息ができる場所を求めるのは当然で、だから廃墟にやって来た人たちは誰の管理下に置かれることなく街を再建していった。

護法軍も魔法使いたちも最低限の協力をするとどめた。他にやらなければいけないことが余りにも多かったし、もともとアベリー市が属していた国の政府は消滅していて、文句を言える余裕もなかった。

そういういきさつで自然発生した共同体を、諸々ひっくるめて『旧アベリー市』と呼ぶようになった。誰かがそう言い出したわけではなく、なし崩しのだ。

烏合の衆もいとところの難民集団がどうやって生活の基盤を築いたのか、それを指揮したリーダーはいたのか、街の再建にどのくらいの間が関わり、どのくらいの間が死んだのか 誰も知らないことだし、誰も調べようとはしないだろう。そんなことに興味を持つても、毒の灰が世界を埋め尽くすのを防ぐには何の役にはたたない。

だったら何が役に立つんだ？

そこから先を考えることを、俺はとっくに放棄している。

この世界を生きる大半の人間と同じように。

*

防毒隔壁の外は死体と死体泥棒たちの、目を背けたくなくなるような地獄絵図が広がっていた。漂う死の臭いとおぞましすぎる光景が、容赦なく世界の終りを訴えているようだった。

では街の内側は？

こつちもひどい有様だ。

外とは別の種類のインパクトがあって、ついさつき嘔吐しまくって腹の中には何も入っていないのに、また何かがせり上がってきそうだった。

旧アベリー市は難民が押し寄せて再建された街。

その言葉通り、いやそれ以上に街には難民と元難民とそれ以外の人間が押し寄せて、押し寄せすぎて人口密度がわけのわからないことになっている。どこもかしこも、人、人、人。

廃墟は再建され、やり過ぎなくらい再建されている。破壊されずに残されていた建物に瓦礫や端材が際限なく継ぎたされて、まるで立体的な迷路のようだ。

建築法があればどうみても違反している建物ばかりで、道は入り

組み、ゴミと排泄物が吹き溜まって、そこを行き交う人々の多くは、何と言えはいいのか　ギトギトに汚れていて、ホームレスとあまり変わらない。

まともな身なりの通行人も混じっているようだけど数は少ない。たぶんニセモノの護法軍の紋章を付けた自警団気取りのチンピラ集団と、これ見よがしに武器を見せつける傭兵だか用心棒だかが口論をし始めたり、そうかと思うと両手いっぱい代用パンを抱えた浮浪児たちが棒を振りかざす店のオヤジに鬼の形相で追いかけられていたり。カオスもいいところだ。戦後の闇市ってこんな感じだったんだろうか？

それに、臭い。

空気全体に運動部の部室を油粘土と一緒に煮詰めたような汚臭がうつすら漂っていて、少し場所を変えたら小便のアンモニア臭とドブ川のメタンの臭いがする。深呼吸するには向いていない場所だ。

街の外とはまた別の、生々しい生活臭。清潔にする意志を誰ひとり持っていない、人間の墮落しまくった不潔さとも言えはいいのか。とにかくそういうものだ。

「聞いていいスカ」

俺は珍しく自分からルシウムに尋ねた。今は防毒隔壁の中だからお互いマスクを外している。

「世界中で人が死にまくってるんでしょ？　何でこの街、こんなに人がいるんです？」

ルシウムはあからさまに眉根にシワをよせて、口元にハンカチを当てていた。消臭効果のある霊薬を染み込ませている。

何度かうなずいてから、見たままの理由だ　と、溢れかえる雑音に負けないよう少し大きめの声でルシウムは答えた。短く刈り込んだ金髪は、忘れかけている地球のファッション用語で言うベリーショートかベイビーショートに近い。

「他に行き場がないからだ。どうにもならなくなった難民が押し寄せて、とはいえ防毒隔壁の範囲にも限りがあつて、自然と人口密度は高くなる。さっき壁の外でテントぐらしをしている貧民を見ただろう？　せめて壁の近くへ、寄り添うだけでも生きられる場所へ。おこぼれをもらつて、死体の処理を請け負つて、その身ぐるみを剥ぐような生活だつたとしてもだ」

ルシウムの言うことはもつともだと思つた。難民たちの元いた故郷は人によって違うんだろうけど、おそらくそこはもう灰に埋もれているはずだ。戻ろうにも戻れない。

戻れない、か。

それは俺も同じだ。

この世界の全人口は少なくなる一方で、同時に生物が生活可能な土地自体も減っている。生き残れたとしても住める場所がなくなっていく。身分もカネも後ろ盾も何も持たない難民は、それがゲットーみたいな場所でも行くしかない。

まだ生き残ろうとする意志があるなら。

不意に、クラスの誰かの革靴の、合成皮革の感触が指先に蘇った。

誰のものかなんてわからない。特定したいという気持ちはないし、するつもりもない。わかるだろう？ もし『誰かのもの』だってわかってしまったら、あれはもう名前のない死人の持ち物ではなくなる。

絶望と苦しみしかなかったのか。それとも最後まで生きようとしていたのか。

そいつの感情が指先に染みついているような気がして、俺はほとんど無意識にズボンで手を拭った。

俺は誰かの形見を引き受けるつもりなんてないんだ。

それなのに、なんで死体の山の中に靴を投げ捨ててこなかったんだろう？

こんな場所、来るんじゃないかった。

11 後嗣なき遺産は静脈瘤の如く

薄汚い街並みだ。いや、『薄い』を付ける必要はない。

旧アベリー市には人間が集まりすぎている。

この世界に来てからというものの、これほど多くの群衆は見たことがなかった。あちこちに飛び交う話し声をつるさく感じるのも初めてだ。日本の大都市の繁華街をぎゅっと絞って、その半分以上をホームレスに置き換えたような光景。そんな息苦しさを想像して欲しい。

この世界はどこに行っても死と隣り合わせで、生きているだけで死ぬ。だから何よりも生存を支えるものが優先される。灰よけ、防毒、まともな水や食料。

そんな世の中なのに、この街には明らかに嗜好品らしき売り物だとか、毒の灰なんてお構いなしといったデザインの服装、盗品らしきアクセサリや工芸品があちこちの露店に並んでいる。

繰り返しになるけど、俺が転移してきた時にはすでに灰に埋もれた手の施しようのない環境だった。だからこの世界に灰以外のものたとえば絵画とか彫刻だとか、歌とか祭とか、栄華を誇った魔法文明の遺産とか、要するにこの世界に昔あったはずの伝統的な文化にはほとんどお目にかかったことがない。

この旧アベリー市は不潔で息が詰まるような酷い場所なのに、全てが変わってしまう以前の名残りみたいなものを一番色濃く保って

いるように思えた。

興味がないと言ったら嘘になる。

同時に、わざわざそんな場所に出向かなくていいという気持ちもある。

住民には独特の沸点の低そうな雰囲気があって、ちょっとしたことですぐ暴力沙汰になりそうな近寄りかたさが充満している。スラムとか暗黒街とか、そんな言葉を思い浮かべずにはられない。身の危険を感じながらうろつくくらいなら、馬屋でひとりウロコ馬の世話でもしていた方がマシだ……。

だが俺は結局ルシウムの後について大通りを歩いている。

大通りと言っても、人がすれ違うのがやっとの裏道に比べての話だ。ひっきりなしに汚れた住民が行き交うには道幅が足りていない。

住民とひと口にいてもいろいろだ。

怒鳴りながら人垣をかき分け手押し車で何かの商品を運ぶ使い走りとか、空中に向かってそいつにしか見えない誰かと口論する中年女とか、生きているのか死んでいるのかわからない道端に横たわるピクリとも動かない爺さんとか、霊薬を混ぜた染料で全身にくまなく入れ墨を入れた修行僧とか、スリを企てるガキとか、それを捕まえて殺すつもりとしか思えない勢いで暴力をふるう片目の潰れた男とか。

とにかくいろいろだ。

極まったカオスを物ともしないルシウムが先導していなければ、こんな場所をひとりで出歩く気にはなれない。

ルシウムの背中を見失わないよう付いていくのに俺は必死だった。はぐれば絶対道に迷う。自力で馬屋まで戻れる自信はすでに失っている。

一方、俺の前を進む護法軍の女の足取りには躊躇がない。

この街の不潔さや、裏道や物陰から漂う不穏な雰囲気にはあからさまに嫌悪感を示している。そのくせ自分の庭みたいになんか平気な顔で背中しか見えていないけどたぶん平気な顔のはずだ。歩きまわり、堂々としているというか、迷いがないというか……。

なんだかんだでこの女とは数日を共にしている。御者と客というよりは一方的に従者にでもされたような関係になって、以来俺は腰の引けた接し方しかできない。相手が軍人の立場だということを差し引いてもだ。

自分の都合だけで話を進めて、こっちには同意を求めることもしない。いけ好かないけど言うことは正解なので、特に反論する必要もない。そうやって過ごす内にすっかり上下関係ができあがって、もう絶対覆りそうにない。わかるだろう？ 偉そうでムカつくけど実際向こうのほうが偉くて逆らえない、そういう空気。

前に俺は、この女が誰かに似ていると感じた。

相変わらずその印象は残っているけど、結局それが誰なのか思い出せないでいる。

すつきりしない。すつきりしないことばかりだ

*

一応言っておいた方がいいかもしれないが、マスクを外したルシウムは美少女ではないし少女でもない。

直に年齢を聞いたりはしないが、たぶん俺より五歳かそれ以上年上だと思う。だと思っただけで俺いま何歳だったっけ？ まあ俺のことはどうでもいい。

とにかく地球でいう二十代半ばから後半というところだろう。

顔立ちそのものは白人と日本人のハーフっぽい造りで、まあ整っている部類だとは思う。別に不細工というつもりはない。

ただ、俺の覚えている日本人の感性から言うと地味で血色が悪すぎる。単純な話でノーメイクだからだ。

これは彼女に限った話じゃない。

この世界の人間に、のんきに化粧をしている余裕はもつない。化粧品化粧品の流通なんてとっくに途絶えている。

唯一の例外は大金持ち ではなく、化粧するのが仕事の内になる連中だ。わかるだろう？ 売春婦だ。

どこの世界でも、どこの街でも、それはそういうものなんだろう。

それに、メイクしていてもどうせ防毒マスクで隠れることになる。

灰の降り方は日によって違う。

大雪みたいな降灰がいきなり来ることもある。

防毒隔壁にも限界があつて、大量すぎると毒が残つたまま灰が降り積もる。住民総出で灰を払わないと、生活どころか生存すらできなくなる。この世界の多くの土地がそうだった。

マスクは必ず必要なんだ。

マスクの必要がなくなるか、マスクを付ける人間がいなくなるまで。

*

「それでいったいどこに行くんスか？」

俺は人混みを正面からかき分けて進むルシウムに尋ねた。ついてきてくれと言ったきりで、どこに行くのかさえ聞いていない。

「君に払う手間賃だ。私の手元のカネでは少々足りなくてね。だからこの街の護法軍に融通してもらおう。私も報告をしなくてはならないし、どうせなら一度に済ませた方がいい」

ルシウムは足を止めずに言った。淀みのない答えだ。一方的な説明ではあるけど、特に文句を付けるような話ではない。

「ところでイリエ、君は御者の仕事をこの先も続ける気か？」

急にそう言われて、俺はまあそうですね、と適当に返した。続ける気があるかどうかなんて自分でもわからない。続ける気があったとして、『この先』があるとは限らない。それに、どう答えたところでどうせもう彼女とは二度と会わないだろう。まじめに考えても無駄だ。

「毎日馬車を走らせているんだろう？ 灰を直に浴びる時間も量も多い。体に影響はないのか」

「……今のところは」

灰の毒を100%防ぐ方法は存在しない。影響？ そんなものあるに決まっている。早いか遅いかだけだ。聞くまでもない。

俺は少しずつ苛ついてきた。

荷物は目的地のこの街まで運んできたし、特別料金の後金を受け取れば仕事は終わりだ。できるだけ早く自分の住まいに帰って、また最後の魔法の塔と荷物のやりとりをする生活に戻る。それでこの話はおしまい。この期に及んで俺に質問して何になるんだ？

気をそらしたのはわずかな間だった。

そのわずかな間に、俺はルシウムの姿を見失った。

周囲には垢と脂がこびりついた群衆。

俺はただ独りで……。

12 アッシュ・ラッシュ

何をどう間違ったのか。

表通りでさえ狭苦しい旧アベリー市の、さらに裏道の奥で俺は迷子になっていた。

ねじくれた坂道が上下に続き、灰曇りの日差しは建物の陰に遮られて暗く、湿っている。アルコールとアンモニアの臭いが漂うそこはいわゆる悪所というか、ストリートに言つと売春街だ。

水たまりに足を取られ転びそうになりながら、俺はそこから抜けだそうとして、全然抜け出せずにいる。

道が入り組んでいる上に、どこに出たら元の場所に出られるかわからない。入ってきた場所と違う道に出てしまったら、ますますどこにいいのかわからなくなってしまう。

道の先が少し明るくなっているのを見つけて小走りに坂を上がると、そこはもう五回くらい通った十字路で、俺は頭を抱えるしかない。

まだ昼なのにあちこちに娼婦が立っている。道に迷ったまま同じ娼婦の脇を何度も通り過ぎたりしていると、まるで誰を買いたいのにどう切り出せばいいのかわからないガキのようだ。

灰を防ぐには向かない露出の多い服を着て、濃い目の化粧をした女達。世界最初の職業は世界最後の職業でもあるのか？ そんなつ

まらない考えさえ頭に浮かぶ。

売春婦にもいろいろだが、遠目には美しく見える女もいる。近づいてみると、たいがいキツイ。息が詰まるような街のどん詰まりだ。何であれ、美しさを求めるのは間違っているんだろう。

それはともかく、俺はもう自力で売春街から逃げ去るのを諦めて、誰かに道を聞くことにした。

売春婦たちに尋ねるのは少し気が引けるので、さっきの十字路の端っこでずっと座り続けている爺さんに話しかけた。

五回も通りすぎてその間ずっと動いていないので酔っぱらいが寝ているのかもしれないと思ったが、目は開いている。ときおり手元の防毒マスクをいじっているようだった。

爺さんではなかった。

そいつはまだ若くて、なのに髪の毛は全部抜け落ち、病的に色の抜けた肌に奇妙なほど太い静脈が浮かび　鼻や耳の先が濃い灰色に硬化していた。

化石病の初期症状だ。

毒の灰を吸い込むと、体組織が内側から崩れて死ぬか、体組織が作り替えられてフィードに成り下がるか、もしくは体組織が固まって石になる。

化石病は、文字通り末端部から少しずつ石に変わっていく病気だ。毒にやられた症状としては比較的楽な方　と言われている。少な

くとも即死するわけではない。その代わりに、石化の恐怖がずっと続く。たいていの場合には内臓にまで石化が達した時に死ぬ。死んだ後も放置しておくとも髪の毛から爪先まで全身が石になって、石像が残される。

男が手元で弄んでいた防毒マスクを見て、俺は反射的に口元を抑えて三步ほど後ずさった。

アツシュ・ラツシュだ。

防毒マスクの浄化フィルターをほぐし、そこから特定の霊薬だけを取り出す。それを酒で溶いた灰に混ぜ、ほどよく温めると微量の揮発成分が立ち昇る。アツシュ・ラツシュと呼ばれている安価なドラッグだ。

薄めた毒蒸気を吸い込むとすると神経系に作用して一時的な鎮痛、リラククス効果が得られる。使用者は口をそろえて『恐怖が消える』と言う。人類の生存領域が塗りつぶされていく時代にはそういうものも必要だろう。

代わりに使用者は死ぬ。

いくらか薄めたところで毒は毒。体内に蓄積されれば結局は同じことだ。脳から崩れるか、体内の一部だけがフィード化するか、もしくは目の前の座り込み続ける男みたいに化石病になってじわじわ石になる。

ほんの一時の安らぎが得られる代わりに灰の毒が蓄積し、やがて死ぬ。例外はない。

中毒者に近寄ると蒸気を吸い込みかねない。俺は男から離れ、仕方なく売春婦に話を聞こうとした。

「あっち」

不意に中毒者の男が子供みたいな声で、俺から見て左側の道を指差した。まさか道案内でもしようっていつのか？

爪のあたりがすでに石になりつつある指先は、少し奥まったところにある建物の隙間を示していた。記憶があやふやだけど、そこを通ったことはないはずだ。

少し顔を上げて俺を見る男の目は、恐ろしいほど澄んでいた。何かを悟ったような目。それとも恐怖と一緒に何か欠落してしまった目か。

俺はどういうわけか男の指示にしたがって、裏道のそのまた枝道の奥へと入っていった。

*

気配というか、雰囲気というか、その坂道はさっきまでの売春街とはまた違う空気が流れていた。

別に売春街とは違う区画に出たわけじゃなく、薄暗くて不潔なところには変わらないのに何かが違う。

それが何なのかうまく言葉に出来ないままゆるい坂道を上り、誰か話の通じそうな人を探そうとした。

ひらひらした薄衣を重ね着し、きちんと髪を櫛づけた比較的身なりの良い娼婦を見つけ、少しためらって　かなりためらってから、俺は意を決して道を尋ねた。

化粧をした女の顔が振り向いた。

俺は坂道の段差に足を取られそうになった。

女じゃない。男だ。

そりゃあ空気も違うわけだ。この通りは、売春街は売春街でも男色専門の方だったんだ。

後ろ姿はどう見ても女だったので全くそうは見えなかったのだが、間近に寄るといかにもな化粧をしたオカマという感じだった。

俺は異世界でもオネエ言葉が存在することを初めて知った。

こんな場所で声をかけて、カネも払わず抜け道を聞くのは、向こうからすれば気分を害することかもしれない。突っかかってくるオカマの人を俺はなんとか謝り倒して解放してもらった。

結局道を教えてもらえず、脱力しながら坂を上がっていく。

「やめろ！　離せ！」

急に大声が聞こえ、顔を上げると坂道の上からポロポロの服をまとった男がものすごい勢いで駆け下りて来るところだった。どう見ても、客をとれる身なりじゃない。手には小さなバッグを持っていて、叫び声からしてひったくり犯らしい。

関わりたくねえなあ……。

最初に思ったのはそれだ。無意味な関わりは勘弁して欲しい。でも坂道は道幅が狭く、止めようと思えば止められる状況なのがうらめしい。

「アンタ、そいつ捕まえて！」

背後からさっきのオカマの人の声がして、俺は1秒考えてから諦めた。

ひったくりはもじゃもじゃのホームレス髪を振り乱し、全く意味の分からない言葉をわめきながら俺の目の前まで駆け下りてきた。

俺は脇をすり抜ける瞬間に灰合羽を広げ、顔にかぶせて転倒させる。つもりだった。

その男は俺の予想に反し、すり抜けるどころかまっすぐ俺の方に向かってタツクルしてきた。

まさか逃げるより俺に襲い掛かってくることを優先するなんて思ってもみない。

もつれ合い、背中から転んでわけがわからなくなった。

結局、ひったくりはぞろぞろと建物の陰や売春宿から出てきたソッチの人たちに捕まり、軽めの私刑を受けてどこかに捨てられた。駐留している護法軍もこんな場末の底にまで手は回らない。警察に相当するものに任せるよりも、自分たちのテリトリーは自分たちで

守ったほうが手っ取り早いというわけだ。

「大丈夫か？ すまない、ありがとう」

誰かが俺に声をかけた。さっきバッグをひったくられた被害者らしい。

ふと、妙な感じがした。

男の声は なよなよした感じがなく、普通の若い男のしゃべり方だ。でも、それは二の次だ。

首の後ろを抑えながら俺は起き上がり、何度か目をしばたかせた。いつの間にか俺の周りには男娼たちが輪になっている。

「お前……！」

さっきの男が半音上がった声を噛み殺すのを聞いて、俺は妙な感じの正体がわかってしまった。

「入江……なのか？」

ああ、最悪だ。

神様の祝福で、誰もが意思疎通できる異世界。なのにそいつの声は、魔法の力で意思疎通ができるのではなく、耳で聞き分けられた。

日本語だからだ。

何も見ずに走って逃げればよかったんだ。そうすべきだった。

でも、俺は声のした方向を見てしまった。

「やっぱりそうだ……入江、入江だろお前！ 入江一貴！ そうだろ！？」

「ああ、そうだよ……」

そう答えるしかなかった。

そいつは明らかに浮足立って、濃いメイクをした顔を泣きそうなくらいクシャクシャにしていた。呼びかけに反応してしまった以上、そうだと答えるしかなかった。

「その……生きててよかったな、佐久間」

俺は無理に笑いながらそれだけ言った。

それ以上は何を言えばいいのか全く分からなかった。

佐久間。佐久間海人。

元いた地球の、学校のことを思い出す。

同じクラスで、生徒会長で、一緒にこの世界に転移してきた俺たちをひとりでも生き残らせようとしたリーダーで、混乱の中ではぐれてしまった男。

三年ぶりに再開したそいつは、異世界の暗がりで男娼になっていた。

13 末路

ようやくわかったことがひとつ。

ルシウムの押し付けがましい態度が誰かに似ているって、こいつに似ていたんだ。佐久間海人。

こつちに来る前の佐久間のことを思い出す。いつも正しくて、正しすぎて正しさの押し売りというタイプの人間だった。

俺は佐久間のことは多少昔から知っている。広く考えれば幼なじみと言ってもいい。

幼なじみといっても、単に同じ学区の小学校に通っていてその頃から顔を合わせているだけで、別に友達というほどの仲ではない。

佐久間は小学生のころからきっぱりと自分の意志を持っていて、本人は『仲間と協力して』と口にしておそらくその通りに考えていたと思う。でも佐久間の言う仲間とは自分の『下部』であって、協力とはそれを『従える』という意味だった。

それが悪いことだと単純には言えない。佐久間は責任感もあつたし、実際リーダーとしての素質は持っていたと思う。他の人間を無意識に下に見ていたとしても、そうするだけの行動力があつた。

俺自身、佐久間のことは優れた奴だと思っていた。嘘じゃない。口だけ野郎とか上っ面だけで中身が無いとか、佐久間はそういうタイプではなかった。そのままの人生を歩んでいたら、たぶん時代を

動かす新しい起業家とか、そんな形で名を成していたんじゃないだろうか。

でもいけ好かない。

佐久間に従うことは、次第に舌打ちと引き換えになっていった。わかるだろう？ 俺みたいな凡庸な奴は、佐久間の元では名前のある人間じゃなくて、『頭数』になっていたんだ。下部組織の構成員と言い換えてもいい。

ルシウムの態度とそれは同じものだと言っていたらしい。

今のいままで佐久間と結びつかなかったのは、ルシウムと似ている誰かというのはつきり女だと思っていたからだろう。

とにかく、そういうことだ。

それと、知りたくなかったことがもうひとつ。

異世界で再会を果たした佐久間からは、決定的な何かが失われていた。

*

この世界の人間から名前を呼ばれるときと、佐久間から日本語で呼ばれるときでは聞こえ方が異なる。

俺は三年ぶりにイリエではなく、入江一貴いりえかずたかという日本人になった。

「それで、どうなったんだ？ 他のみんなはまだ生きてるのか？」

教えてくれ、何か知っているんだろう？」

佐久間は椅子から身を乗り出し、熱のこもった目で俺を質問攻めにした。

ひったくり騒動のあと、佐久間と俺は売春宿よりは少しマシな酒場に入って再会を喜び合った。

勘違いされると困るので一応断っておくが、佐久間に会えたのは嬉しいことなんだ。生き残りは俺ひとりじゃなかったんだから。

あの日、俺たちは暗くて足元も見えない山の中にいた。昼の教室からいきなり夜中の異世界だ。

スマホのライトだけが頼りだった。

その日の内に何もわからないまま何人も死んだ。内臓が内側から崩れて血を吐いた奴。化け物になって、さっきまでの隣にいたクラスメイトを襲う奴。その時は灰の毒が原因だなんてわかるわけがない。

何とか口を布で覆った人間だけ生き残った。

本来なら生徒をまとめる立場の教師は一番最初にフィードになって、男女の生徒をひとりずつ食い殺して泣き叫びながらどこかに逃げていった。

そんな状況なのでパニックが起きるのも当たり前だ。

佐久間はそこでも何とか生き残りを集め、力を合わせて脱出しよ

うとしていた。

一方の俺は山の斜面で足を滑らせてしまい、佐久間たちとはぐれてしまった。クラスメイトの死体が転がる中、俺は他にも残っていた少人数のグループに混じって山を降りた。

それ以来、佐久間たちのグループには誰ひとり会っていない。

「……俺は俺含めて五人グループで逃げてて、そいつらは結局全員死んだ。他の連中がどこに行ったのかは知らない。生きてる日本人に会えたのはお前が初めてだよ、佐久間」

「そうか……そう、か……」

佐久間の化粧の残る顔は複雑な表情に歪んだ。強い落胆と悲劇を嘆く感情とともに、安否を気遣う必要のある人数が減ったという肩の荷の降りた様子が含まれていた。俺にはわかる。一緒に逃げていたグループの最後のひとりが死んだ時に、俺は同じ表情をしていたはずだから。

「俺も……俺の方は最初は14人いた。クラスの半分は生きて山を降りたことになるな」

椅子からずり落ちるほど力が抜けた佐久間は、うつろな目でそう言った。どこを見ているかわからない。たぶんここじゃなく過去を見ている。

「じゃあ、半分はあそこで……」

俺がそう言うと、佐久間は唇をひきつらせた。笑っているつもり

らしい。

「ははっ、それはそうだろうな、入江。生き残った俺のグループもお前と大して変わらないよ」

「みんな死んだのか」

「ああ。少し前に最後のひとりも死んで、とうとう俺ひとりだ」

最後のひとり？

俺は戸惑った。あの靴。川の流れを堰き止めるほど死体のゴロゴロ転がる場所で拾った、誰のものかわからない靴。

「はぐれた連中もいる。いや、はぐれたんじゃない。逃げ出したんだ。なあ、信じられるか？ あいつら……バカみたいに、俺のところに一緒にいて、力を合わせればよかったのに……バカげてる。相原が死んだのは俺のせいだって言うんだ。信じられる……か……あいつら……洞窟から三人だけで逃げて……日本に帰る？ あいつら……あいつら……結局三人とも……バカげてるよ……何で逃げた……」

「おい、大丈夫か佐久間……？」

佐久間の声は、言葉の途中から次第にうわ言になっていった。こういうしゃべり方をする人間を、この世界では何度か見かけた。毒よりも先に、灰への恐怖が心に回っ人間がこんな感じになる。

一応は生き残ったはずの佐久間たちのグループに何が起きたかも想像はつく。

佐久間は頑張ったんだろう。そうに違いない。でも無理だった。無理なんだ。元いた世界の常識を通そうとしたらダメなんだ。

想像して欲しい。

生き残りを何とか率いて日本に帰る方法を探そうとする佐久間と、その一方で死んでいくメンバーがいる。不満を持つ奴が出てきて、反乱する。昔の航海で、食料不足になって水夫が船長に反乱起こすとか、そういうよくある話だ。

「それから、どうなったんだ？」

「お前の方こそどうなったんだ入江。何でお前だけ生きている」

佐久間は俺の問いを押しつけるように言った。質問するのは当然こっちが先だ、と言わんばかりの佐久間の態度。俺は少し反感を覚えるが、焦点の合わない目で半分壊れたうわ言をぶつぶつ呟くよりはよっぽど彼らしい。ねじくれた安堵感があつて、俺は心のなかで苦笑する。まだいけ好かないことを言えるだけマシだろう。

「ひとりだけになって、どうしようもなくなった時に偶然通りかかった馬車に拾われたんだ。それから馬車の持ち主のところまで下働きして。まあ、それからなんだかんだで御者に……」

「おいどういことだ！ 他のみんなを探そうとは思わなかったのか！？」

突然、酒場に佐久間の大声が響き渡った。

そこからの佐久間の言動は、ちよつとつらいものがあつた。わか
るだろう？ 佐久間は俺とは違うタイプの人間だ。まっとうなんだ。
みんなで協力して日本に帰る方法を探すこと。諦めずにそれを求め
ていた。

生き残つて、仕事を得て、自由の効く身分になつてゐるのに三年
間ひとりで暮らしていた俺のことをなじるのも、当然の権利だと佐
久間は思つてゐるに違いない。

勘弁してくれ。

無理なんだよ。

帰る方法なんてないんだ。

『みんな』なんて、もういないんだ。

*

佐久間はひとしきり俺を罵つたあと急激に落ち込んで、自分と自
分の境遇とを呪う言葉を並べた。

聞くに堪えない。

灰から身を隠せる洞窟　と佐久間は言つてゐるがおそらく廃棄
された秘石鉱山のことだろう　に隠れ、佐久間は何とか口に入れ
られそうな食料を公平に分けあい、どうにかして人間が住んでゐる
場所を探し当てるところまでは行つたらしい。

でもその時は、世界中に魔法の力がかかつていて、誰でも意思疎

通ができる世界だなんて思いもしなかった。常識で考えれば、外国ですらない異世界で日本語が通じるはずがない。俺も最初はそう思っていた。人間っぽいのは外見だけかもしれないとか、疑い出すときりがない。

佐久間は俺よりもずっと慎重で　その辺りが時間切れだったらしい。

生き残りのひとりがフィードになった。

重傷者が出て、佐久間自身も怪我を負った。

何とか命を助けようと洞窟をでて、死にかけて、毒の灰で霞む世界をさまよい歩いて、通りかかった異世界人に拾われた。

でも文字通り話のわかる相手に助けられた俺とは違っていた。わかるだろう？　死と隣り合わせの時代が半世紀続いているんだ。毒されるのは自然環境だけじゃない。

佐久間たちは手当を受けたあと、人買いに売り飛ばされた。

この世界の暦で半年以上、勝手に死ぬ権利さえ奪われた。苦痛の中から隙を見て命からがら逃げ出して、最終的に旧アベリー市に落ち着いた。残っていたのは三人だけ。

旧アベリー市に着いても何のつてもなく、どうにもならなくなつて、佐久間を除くふたりの女は客を取らざるをえなくなった。

やがてひとりがアッシュ・ラッシュに頼り始めた。一応、半年は生きていたらしい。脳細胞が半分崩れて、動作も知能も爬虫類並に

なつた期間を含めての話だが。

結局、佐久間ともうひとりだけになった。

佐久間海人と、三原沙耶。

「沙耶は二週間前に、その……死んだよ。化石病で脚が動かなくなつて、その……もう客が取れなくなつて、それから……」

佐久間の態度が妙によそよそしくなつた。

俺は いや、俺のことは……どうでもいい。

佐久間は男も女も名字で呼ぶ。下の名前で呼ぶのは付き合つてる相手だけだ。

三年前、普通に高校に通っていた時に名前で呼んでいたのは青野あおの結愛ゆっあだけだつた。

三原沙耶は、治る見込みのない化石病に罹りながら本当にいよいよという所まで体で稼ぎ続けたそうだ。

生き残つたふたりの女達に売りをさせ、佐久間自身はどうしても諦めきれずに日本に帰る方法を求め続けた。

俺ははつきりと目に浮かぶようだった。あてのない調査の日々が結果として徒労に終わることを、佐久間も含めた三人とも薄々予想していたことを。

その間、生活を支えたのはふたりの女で ああ、参つたな。こ

んなの細かく説明しなくてもいいだろう？ 俺はちょっと、すでにこれ以上はキツいんだ。

でも、そうだな。逆に言えば、俺ひとりで抱えるほうがもっとキツいかもしれない。だから、佐久間の話してくれたことと、俺の想像を合わせて確かなことだけを言おう。

佐久間は三原沙耶のヒモ同然になり、下の名前で呼ぶ関係になっていた。

どうしても諦められない佐久間。それを支え続けた治る見込みのない三原。

結局生活を維持できなくなり、借金がかさんだ。

限界を超え、返済のために佐久間は男娼になった。

一年。

三原沙耶は下腹部までが石化して死んだ。

制服や他の所持品はとうにカネに変えたいが、三原沙耶は学校指定の革靴だけは履き続けた。

他の住民と同じく佐久間には死者を吊う余裕などない。

だから、他の死体と同じように河に投げ入れた。

運ぶ途中、完全に石化した脚から靴が片方脱げていたことに佐久間は気づいていなかったらしい。

俺は灰合羽の懐から、いつ取り出そうか迷っていたくしゃくしゃの紙切れを佐久間に渡した。

その表情が凍りつき、大粒の涙がこぼれ落ち、化粧が崩れていった。

結愛、と佐久間は一言だけ口にした。

俺はそこに書かれているものが佐久間への遺言であることを知っている。青野結愛はそれを託して俺の目の前で死んだ。

ああ……参ったな。

どう思う？

もうこんなところでいいだろうか？

こうして生き残った最後のふたりが再会して、起きたのはこんなことだ。俺にとっては、佐久間に出会いさえしなければとうに割り切ったことをほじくり返され、佐久間の精神の均衡はわずかの時間で目に見えて崩れていった。

会わなきゃよかったんだ。

あと付け加えるとしたら　まあ、これはどうでもいいことなんだけど、俺は三原沙耶のことが少しだけ好きだった。

だから俺は……。

過ぎた話だ。

もう、何も戻ってはいかない。

14 罪咎に非ず、故に罰に非ず

人や物の出入りが多い都市は、完全に払い落とされない灰が防毒隔壁の中に持ち込まれやすい。

旧アベリー市はまさにそれだ。

大量の降灰があつて無毒化しきれない灰が街中に積もつた場合にも、でたらめに入り組んだ構造が災いして、灰が払いきれずに建物の際間や物陰に溜まつてしまう。

そこに加えて灰の毒を利用した薬物アッシュ・ラッシュの蔓延だ。

灰から逃れるための街、そして魔法の力で人間は生きながらえていても、生存圏そのものは少しずつ灰に埋もれ、心は恐怖に抗えず、守り切ることはできない。

じゃあ、どうすれば守ることができるんだ？

もうこの世界が持ち直すか、そこまでいかなくても今のままですどめておくことはできないんだろうか？

地獄が噴火してから半世紀が経つという。

そんな方法があるなら、俺が問う必要もなく実行されているに決まってる。

今日もどこかで人の居場所が灰色に塗りつぶされていって、俺は

どうすることもできない。同じ異世界から転移した佐久間と再会しても何も変わらない。

傍観者か被害者か。

この世界に放り込まれてから俺はふたつの内のどちらかではなかった。

その日の俺は被害者だった。

つまり、そういうことだ。

*

においが漂ってきた。アンモニアとアルコール、それに焦げ臭い煙がまじっていて、俺と佐久間はどこかで火事が起きたことを知った。

売春街の暗い通りからでも炎と煙が見えて、思ったよりも近い。勢いも強いようだった。火の手がこの区画にまで広がるかもしれない。

その時になって俺はルシウムからはぐれてずいぶん時間が経っていることに気づいた。道に迷って偶然この場に来て、本当に偶然に佐久間に出会った。

佐久間が生きていた事自体はいい。会って話を何も得るものが無いのを再確認しただけで、そんなことは前からわかりきっている。

俺は元々何をするつもりだったかというルシウムの後に付いて

行って彼女と護法軍に依頼された大荷物を運んだ特別料金を受け取って、それからこんな街からは引き返すはずで……。

なんでこうなるんだ。

道に迷いつぱなしの俺はルシウムの居場所も、避難すればいいのかもわからない。

そして、佐久間だ。

佐久間に対して俺はどういう態度を取ればいいのか。

それが一番わからない。

やっぱり顔を合わせるべきじゃなかった。結局話し込んでしまったけど、三年前とは何もかもが違う。後戻りなんて不可能だ。

佐久間を見捨てて逃げたとしても、一緒に逃げたとしても、その先の展開は予想できる。どっちに向かっても共倒れになるだけだ。

だから俺は男色専門の売春街の只中で立ちすくんだ。

どうにもならない選択の積み重ねで佐久間は男娼になった。

ほんのわずかの違いで俺は雇い主に言われた場所に向かって馬車を走らせる御者として生きている。

積み荷を運んでどこかどこかを往復するのが俺の仕事で、だから だからやめてくれ。

どこに行けばいいのか、そんなこと俺に聞かないでくれ。

わからないんだよそんなもの。俺はたまたま流されて死ななかつただけだ。最後の生き残りである佐久間ともう一度別れるか、行動を共にするか。他に選べる道はないのか？

どうすればいい？

俺は、火事が、火の手が、佐久間が、俺のこっちでの暮らしが…。

*

アツシュ・ラツシュで一時的な安らぎを得るために集まった六人の浮浪児がいて、その全員がフィードになった。

全員が一度にというのは珍しいといえば珍しいが、灰の毒が人体に対してどういう魔法的影響を与えているのかはつきりとしていないので、ありえないほど珍しいことではない。

一時的な安らぎどころか、灰に取り憑かれフィードに成り下がった浮浪児たちは、脳を灰の毒に乗っ取られた。周りの人間を食い殺すよう強要され、それを実行した。

フィードになっても元々の人格は維持されているという。良心に基いて命令を拒否すれば拷問に等しい苦しみを与えられ、フィードは泣き叫びながら人を殺す。

全身が異形に作り替えられ、浮浪児たちもそうやって人を殺した。

未来は灰に閉ざされ、人が簡単に死ぬのが当たり前の環境で、街のほど近くに死体が山積みになっている場所で暮らし、親もおらず、アツシュ・ラツシュにすぎるしかなかった子供たちが果たして『命令を拒否』していたかどうかなんて俺にはわからない。

していたかもしれないし、生まれてからずっと沈殿し続けた暗黒の魂を、化け物になることで解放できたのかもしれない。

そこから先は立ち入らないようにしておく。

旧アベリー市は人口密度が多く狭苦しい道が多いので、フィードたちは獲物を選び放題だったようだ。

街の外に積まれる死体の数が少し増え、パニックが起こり、建物の外に火がついて燃え広がった。

その六人のフィードが暴れていた事件を俺が知ったのは後になってからのことだ。

それとほぼ同時刻、俺と佐久間の目の前にも別のフィードが現れていたからだ。

叫ぶことはなく、静かに涙を流しながら俺を爪で引き裂こうとするフィードの目は悟ったように澄んでいて、そいつが道に迷っていた俺を佐久間のところに導いたアツシュ・ラツシュ中毒者だと理解した。

俺はこの時、このまま死んでも仕方ないという気持ちだった。

こいつは知っていたんだ。

毒だと知っていた。化け物になると知っていた。誰かを殺すことを知っていた。だから澄んだ目をして、苦痛に叫ぶこともなく……。

「こんなところで何をしているんだ、君は！」

切羽詰まった声に、俺は現実へ引き戻された。

俺の目の前には、フィードの爪を腕で受け止め、渾身の力で押し返そうとしているルシウムの姿があった。

俺はまた生き残ることになったようだ。

*

ルシウムの軍用大型拳銃はフィードの水死体みたいな体を撃ち抜き、3発目で頭部が完全に吹き飛んで死んだ。

この世界の銃は火薬ではなく銃身に組み込まれた念動魔法で弾丸を撃ちだす。

フィードや灰賊は生かしておく必要がないので、護法軍の銃は基本的にとても強力だ。弾頭にも霊薬を使っけていて、命中と同時に体内で膨張するようになってる。

「まったく、勝手にどこかへ消えたと思ったら何でこんなところに……君はその、こっぴつ趣味なのかイリエ？」

ルシウムは戸惑いながら周りの売春宿と男娼たちを見渡した。ロシアの女軍人という感じの短い金髪頭を上下左右に動かす様は、俺

が初めて見る彼女の動揺した姿だった。

彼女は今度こそちゃんとしてくれるようにきっぱりと言いつつ、俺に同意を求めてはいない。

俺は彼女を追って売春街を後にした。ここにはもう用はない。

佐久間が俺の背中に何かを叫んでいた。

たぶん待つてくれとか、俺を置いて行かないでくれとか、そういうことだったと思う。

俺はそれを無視した。俺は佐久間を選ばなかった。

ルシウムの方を、こっちの世界で御者として生きる方を選んだ。

特に心は傷まなかった。

俺はもう多くのことを諦めてきた。日本に帰ることも、クラスメイトの安否も。みんな死んだものと思って、それもしようがないと受け入れていた。

佐久間が生きていたこと、それ自体に何の文句もない。嬉しいし、喜ばしいと感じたのも本当だ。

でも、俺の中で佐久間はもう存在しない人間だった。

俺には佐久間を背負えない。

だから 俺は佐久間を見捨てた。

ためらいはそれほど感じなかった。

*

翌朝、売春街で男娼がひとり首を吊って死んでいるのを発見された。

それが誰だったのか、俺は確かめていない。

15 オリジナルの消失

フィードと化した者の腕力はほとんどの場合人間を上回る。

力強く、鋭い爪の生えたフィードのひと振りを、ルシウムは左腕一本で止めた。普通なら腕が引きちぎれていてもおかしくないのだが、痛む様子もなく、出血もしていない。

服の切り裂かれたところから覗いていたのは義手だった。

「化石病のせいだ」

俺から尋ねたわけではないのにルシウムはわざわざ袖をまくって象牙色の腕を見せた。見た目は人工的なのに、その動きに不自然さはない。

「石化が左手一本に集中していてね。肘から下を切断することでそれ以上は進行せずに済んだ」

ルシウムは口元にしわを寄せかすかに笑った。

最終的に全身が石化することにならないものの、化石病にはふたつのタイプがある。

ひとつは体のあちこちに斑点のような石化が起こり、ゆっくりと広がるもの。

もうひとつは手足の先など一箇所に集中して石化し、そこから一

気に進行するもの。

後者の症状は、体幹部まで石化が及ばない内に患部を切り離せば助かる場合がある。

幸いこの世界の義肢は魔法によってかなり自由に動かせる。比較してもあんまり意味は無いけど、コンピュータ制御の地球製よりも上かもしれない。

そんな魔法式義肢にもピンからキリまで、ってやつだが、ルシウムのものはおそらく最高級品に近い。

循環霊薬液と心話魔法を組み合わせた思念駆動式、それも戦闘仕様　テレパシーで意のままに動き、精巧なものにもすぐ頑丈で、生身よりも強い力が出せるという代物だ。フィードの爪では表面のつや消し加工にさえ傷を付けられないし、殴りつければ一発で人間の下あごを吹き飛ばす。

後から知った話だが、魔法文明の勢いがまだ続いていた時代の軍用重甲冑　鎧というよりは魔法を動力にしたパワードスーツに近いものらしい　を参考にして作られたという。すでに魔法が衰退してしまつてからはその機能の一部しか再現できず、ましてや灰が降りだしてからは材料を揃えること自体が難しい。

「修行僧にこそならなかったが、私には心話魔法の素養があった。腕を失つたあと、こういう義手を操作するには最適な人材と判断され　以来、私は義手の対価に生涯を護法軍の旗に捧げている」

ルシウムはよく通る声でそう言った。誇りとか決意とか、彼女の言葉にはそういう固い芯のようなものが感じられた。

俺には何とも答えようがなかった。俺が立ち入ることのない領分の話だ。

別にケチをつける気もないし、ご立派なことだと思う。かといって敬意を表するほど関心はない。今日はとにかく　いろいろあつて疲れている。

旅の疲れと、死体の山とその臭いと、そこで拾った靴と、佐久間との思いもよらない再会と、完全に終わってしまった過去と、それから……。

これ以上はもういい。

とにかく俺はへとへとで、何も考えず休める場所が欲しかった。

できれば今すぐ自分の住まいに帰りたいが、馬車を引くウロコ馬も休ませないといけない。

不本意だが何日かこの街に逗留することになるだろう。

とにかく俺は疲れていた。

カネさえ払えばこの街でもまともな宿を借りられるだろう。

とにかく俺は　少しでも早くひとりになりたかった。

*

旧アベリー市護法軍駐留本部　と銘打たれた場所に連れて来ら

れたはずだが、そこは商家か何かを買い上げたか、あるいは借りたかしたもので、軍事組織専用で作られた建物ではない。幕末の京都で志士が集まっている藩邸　　のようなものを想像して欲しい。たぶんそんな感じだ。

難民たちが自分の力で造り上げた街　　という自負からか、旧アベリー市は独自の自警団や取り締まり組織の権限が強い。だから護法軍はそれに必要な協力を行うという体制になっているらしい。

慢性的な人員不足が悪化する一方の護法軍にとっては、むしろ歓迎すべきことなのだという。

「心配はしなくていい。ここは小さいが、君に特別料金を支払うことぐらいはできる」

聞いてもいないのにルシウムはそう言って、俺を建物に招いた。

手間賃の受け渡しぐらいで護法軍の本部に入るのは多少気が引ける。別に罪を犯したわけじゃないのに警察署に入ると緊張するのと同じようなものだ。

面倒だが、中に入れば浄化された水の一杯も出るだろう。

何となくそんなことを考えて俺はルシウムの後に続いた。

眠気で少し足取りが怪しくなっている。

*

手続きそのものはあっさりしたものだった。

役所仕事のようなものだ。一応確認のために掌紋を取られて魔法による個人認証のようなものだ。約束の額がトレイに入れて持って来られた。内心、少しくらい色を付けられているのを期待していたのだがそんなことはなかった。

それでも大きいカネであることには変わりない。今は使い道を考えるほど頭がまわらないが……。

「気をつけた方がいい。無防備にしていると路地裏に引きこまれて身ぐるみを剥がされかねないぞ」

ルシウムは腕組みして俺に笑いかけた。皮肉か本気かわからない。言っていること自体はもつともだ。確かに警戒しないと危険な街であることは間違いない。

「では縁があればまた仕事を頼もう。信頼できる取引相手は少ないからね」

信頼？ 俺は面食らった。信頼に足るほどの仕事ぶりだったという自覚はない。言われるまま、言われたことをやったまでの話だ。

俺の方から正直はもう関わりあいになりたくない。この旧アベリ―市は いろいろな意味でちょっと近寄りがたい。

とはいえ護法軍からの仕事は払いがいいし、鼻屑にしてくれれば助かることは確かなので、何とも対応に困る。

そりゃどうも、と曖昧な作り笑いでその場をごまかした。

結局水は出なかった。

駐留本部から外にでると、空からちらちらと灰が降り始めたところだった。

勢いは弱い。この程度なら、上空を屋根のように覆っている防毒隔壁を通過する時に無毒化され、落ちてくる頃にはただのチリになる。

それでも俺は、すっかり習慣になっっている防毒マスクを装着し、薄汚れたカラス人間のような出で立ちで人混みの中へと紛れ込んだ。

*

死体が捨てられているような西側は治安が悪いのは当然で、旧アベリー市の東側、それも港町に通じる南寄りの地区はかなりまとまな場所だった。

交易の要所という雰囲気があり、衛生的にもこちらの方がずっとマシだ。もし東側からこの街に入っていれば、印象は全く違っていただろう。まあ、それを言っても仕方ない。最後の魔法の塔はこの街から見て北西あたりに位置しているし、直に目にしなかったとしても街の西側には死体が折り重なっている事実は変わらない。そういうことは思い通りにはならないものだ。

比較的まともで安全な宿を見つけた。

俺はもう限界で、金を払って部屋にはいるとベッドに倒れ込むようにして、そのまま眠り込んだ。

久しぶりに実家の夢を見た。

もう手の届かない世界の夢を。

16 レーテの彼岸に背を向けて

馬車を走らせること自体に死の危険が伴う。

依頼された荷物を届けたからといって、空荷で帰るのは往復の復路分損になる。

一晩前後不覚で眠りこけた翌朝、俺は街のマーケットに出向いていた。魔法の塔方面に戻るときに積み込んで、売れば力ネになりそうなものを物色するためだ。

旧アベリー市の交易所にはさまざまな商品が取引されている。半分が死とドブの底に沈んだような街だがもう半分はまともな商売が成り立っているわけだ。

確実な需要を見込めるのは酒、水、食料。あとは新品の防毒装備あたりだが、いわば製造元とも言える魔法の塔のお膝元に持つていてもさばくのは難しいだろう。

それにしても、灰に埋もれていく一方の世の中のどこにこれほどの人と物が残っていたのかというくらいいろいろなものが並んでいて、俺は案外この世界もそこそこやって行けているのではないかと思ってしまう。

錯覚だ。

人が多いのは、もう人間が　　というか生物が住めなくなっている地域が広がり続けて、どこか一か所に流れ込むしかないからで、

この街はそういう経緯でできた。人が多いというより、生存領域が狭まっている証拠なんだ。

それでも、マーケットに無造作に積み重ねられた商品の山を見ると興味をひかれる。

強力な秘石や防毒栽培された食料といった高級品、銃などの護身用品。代用食料、間に合わせの日用品、きちんと魔法のかけられた正規の日用品。

そうかと思えば、護法軍の手の回らない地域を守るための傭兵団や、いかにも修行僧が身分を偽っていそうな初級魔法使いが雇い主を探してアピールしている姿もある。

職探しではなく、人間そのものが堂々と売られているには多少驚いた。

要するに人身売買だ。

といっても、日本でいう人権を踏みにじる行為とかそういうことではなく、もうこの世には自分の身ひとつ以外売るもののない人がいて、人買いが仲介して安価な労働力として契約する　という、比較的フェアな商売だ。

とはいえ全部が全部というわけじゃなく、人間をオモチャ扱いるような奴隷売買も存在しているらしい。よくそんなことをしている余裕があるもんだと呆れてしまう。人口が激減しても、悪趣味な人間の割合というのは変わらないのか？

何かの拍子にあっさり死ぬ人間を商品にするというのは結構リス

クが高いな、と俺はぼんやり考えた。

御者として普段は客を運ぶこともある俺だが、もしそれが客ではなく売り物だったとしたら？ 人ひとりの重量は同じだからやっていることは同じようなものだ。

こっちの世界に来るまではそんな商売なんてありえないと否定していただろう。いまは、商売として成り立つのなら頭から完全に否定することはないかな という程度には見方が変わっている。

でもやっぱり元々生まれ育った頃からの人権意識が染み付いているから、実際に人身売買に関わることはないと思う。

まあ俺のことはどうでもいい。

懐には、護法軍から支払われた特別料金がある。これを元手にもう一稼ぎするというのも悪くない。

俺は道中の需要や儲けをざっと考えながら物色し、保存が効く食料品と、後回しにされがちな衣料品あたりに絞ることにした。運ぶ重さが同じなら、点数が多い方が利益が出るだろうという考えだ。

この世界は慢性的な水不足で、命にかかわる飲料水以外には灰混じりの水を使わざるを得ない場合がある。いちいち濾過している余裕のない地域とか、水の総量に対する人口の多さとか、理由はいろいろだ。

うっかり灰の毒の強い水で洗濯して、衣類に残っていて、それが粘膜に触れると腫れあがる なんてこともある。

安全な生活用水もやっぱり確保が難しい。

となると、風呂や洗濯はどうしても後回しになってしまふ。不衛生になるのは避けられない。

だから衣料品、特に下着の需要は必ずある。俺がそうなんだから間違いない。

日焼けならぬ灰焼けで顔にまだらの染みがある業者のオヤジに手付金を払い、商品を確保してもらった。

買う前に馬車の調子を確かめておかないといけない。頑強で灰に強いウロコ馬でもさすがに疲れが溜まっている。場合によってはもう一日か二日は休ませる必要があるかもしれない。

あのウロコ馬は俺が雇い主から借りている状態にある。一応、自分で買い上げるために少しずつカネを払ってきたので、今回の稼ぎがあれば正式に俺の持ち馬にできるだろう。

あともう少しというところで使い物にならなくしても困る。

いま使っているウロコ馬は、俺がこの世界に投げ捨てられて以来ずっとの付き合いになる。

商売道具であり、相棒といってもいい。もっと正直に言うと、俺が一番心を許している相手でもある。

俺はマーケットであらかた手配を済ませ、馬車を見に行くために馬屋へ向かった。

頭の整理がついたのか、それとも過去から目をそらす技術が完成したのか、俺はつい昨日の出来事をほとんど思い出さずにすんだ。

確かに衝撃的な会いだったが、いずれ彼や彼女や、それ以外の昔の記憶も整理されていくのだろう。

薄情？ そうかもしれない。でも、薄めたほうが楽なんだから仕方ない。わかるだろう？ どうにもならないことなんだ。もうどうにもならないと自分でも気づいているのに、気づかないフリをして取り繕っても何ひとつうまくいかないんだ。

そんな風に考えて、俺の意識はもう自分の住処のある街と、そこへの道中と、商売をどう持っていくかということに向けられていた。

早く帰りたいと、帰ってから何をするかと、そういうことばかりに頭を使っていた。

油断していたと言ってもいい。

この世界で生きていく決意のようなもの、自力でも生きていけるという実感が次第に高まっていたからだろうか。それとも、死んでいった過去を捨てたことで自分で思っているより神経が昂っていたのかもしれない。

俺は根本的なことを忘れていた。

問題はないと思っていた。このまま『日常』に帰れると思っていた。街と魔法の塔の往復で食い扶持を稼ぐ普段と同じ生活に戻れると思っていた。

ずいぶん楽観的な考え方だ。

生きているだけで人が死ぬ そんな世の中で、なんでいつもと同じ日々が当たり前のように続くと思ったんだ？

俺は何かを勘違いして、浮き足立っていたんだ。

だから忘れてしまっていた。

この世界は、もうすぐ終わるのだということ。

17 流されて尚、愛別離苦

思いもよらず、俺を足止めを食らって旧アベリー市から出発できないでいた。

ウロコ馬の調子が思わしくないのだ。

一週間ほど毎日重い荷物を引いて、疲れが溜まっているのはわかる。御者台で揺られていただけの俺だって尻から背中中の筋肉がガタガタになった。

それでも二日も休めばまた馬車を走らせるのには十分だろうと踏んでいた。

元々この世界では大馬オオウマと呼ばれる農耕馬みたいな体格のデカイ、地球の馬とほぼ同じ家畜が荷を引いていて、これが灰の毒の影響をモロに受けて死にまくった。っていうのは前にも言ったと思う。ウロコ馬はその代わりとして広く使われている。呼吸器官が灰を吸い込みにくい構造で、ウロコに覆われた体は人間よりもずっと毒の影響が出にくいというのがその理由だ。

いつもは力強く、タフなはずのそいつは、見るからに足取りが重くうなだれていている。

俺は家畜の飼育なんて全くの未経験だったが、三年近く世話をし一緒に働いていればそれなりに詳しくなる。向き不向きもあるだろうけど俺は向いていたらしく、見れば大体どこが悪いか程度はわかるようになった。

単なる疲労ではなく消化器系の不調だろうと俺は思った。灰にやられた可能性は捨てきれないが、道中で危険な量の灰を吸っていたとしたら、もつと呼吸が荒くなって、血が喉の奥に引っかかるような音がするはずだ。

俺は馬屋の管理人に繋がれていた間どんな状態だったかを尋ねた。

対応に出てきたのは俺と大して歳が変わらない若い男だった。馬車を停めた時は年季を重ねた渋い顔の初老の男だったはずだが……。

「なんかあのオッサンも体おかしくなっちゃって、昨日から病院いつてるらしいわ」

その若い男は目つきだけきよるぎよるとして、落ち着きなく説明した。外見も言動も、どうも信用できない感じがした。

「世話していて何か気付いたことありませんか？ 餌を食べないとか、鳴き声が変わったとか」

「そんなのわからんわ。いつもと一緒に思うけど……なんもしてないよ、俺。変な疑い掛けられても困るわ。俺なんもしてないし」

なんだこいつ？

俺はつい不快感を顔に出してしまった。管理人の見習いか何かだろうか？ 自分は何もしていないという点ばかり強調して話にならない。

あの渋いオヤジなら安心して任せられると思っていたのに、俺は

苛立つてきた。この世界で苛立たずに過ごすのは難しい。我慢できるだけだ。

念のため俺はウロコ馬を直に触れて調子を見た。外傷はない。でもウロコの間隙につままっている灰をちゃんと落とさない。ブラシもかけていないということは、本人が言うように本当に何もしていないということか？

餌と水は与えられているけど、それ以外のことはほとんど放って置かれているような気がする。

俺は少し嫌味なくらい馬体をきれいにしてやってから世話不足のことを問い詰めると、とにかく自分に責任がないということばかり繰り返すばかりだった。

こっちはカネを払って馬屋に駐車している。

その間の世話を含めた料金を出しているのに、適当な仕事をされたら商売に関わる。こっちは車やバイクじゃなく生き物を預けているんだ。

しかし実際に体調を悪くしている以上、無理に出発させるわけにもいかない。俺は思い切り怒鳴りつけてやりたいのを飲み込んで、若い世話係にちゃんと代金通り面倒を見てくれと念を押した。

自分でできる限りの世話とねぎらいをしてやってから、俺は自分のウロコ馬以外の馬の調子を覗き見た。

考え過ぎだろうか　どの馬もどこか拳動がおかしいように感じる。でも力なく項垂れているやつもいれば、むしろ元気すぎるくら

い体を動かそうとしているやつもいて、様子が一致しているわけもなかった。

どうも妙な感じがして、でもそれが何なのかはつきりしない。

「こつて、まともな馬医はいるの？ 紹介してくれないか」

「いや、わからんよ……俺、最近ここに雇われたばかりです。すんません、わからないです」

駄目だこいつ。

へらへらと首をすくめ、ごまかすように言うその男に俺はキレそうになって、もう一切信用しないことにした。つまり、目の前の男を頼らず自分の足で馬医を探すことにした。

大きな街だ。どこかに腕の良いプロくらいいるだろう。

馬屋を立ち去る俺の足取りは見るからに苛立っていたと思う。

もう三年こつちにいて大概のことに慣れたが、こつという時の不便さにはいまだにもどかしさを感じる。わかるだろう？ この世界には携帯どころか電話も電話帳もないんだ。

昔は魔法で遠隔通話も簡単だったらしい。

昔の話なんて知ったことか。

*

信用できそうな馬医を連れて馬屋に戻った俺を待っていたのは、横倒しになって動かないウロコ馬たちの死体だった。

俺のウロコ馬もその中の一頭だった。

*

あのヘラヘラした男は世話役の見習いですらなかった。

元々馬屋にいた管理人のオヤジは死んでいた。男が殺した。

灰を無理やり口の中に押し込まれ、内臓が崩れて即死しないのを見て刺殺したという。俺がウロコ馬の様子を見に行った時には、馬屋の管理小屋で死後丸一日が経っていた。

馬にはアツシュ・ラツシュと霊薬のカクテルを餌と水に流し込んでを与えていた。『症状』が違っていたのはこのせいだろう。

俺が馬屋を離れた直後、さらに濃度の高い毒性の霊薬を飲まされたらしく……。

種としてのウロコ馬はちょっとやさつとじゃ死なないイメージが強くて、実際丈夫なのは間違いない。だから俺は、自分の馬も大事に世話していれば動けなくなるのはずっと先のことだと思っていた。

ことの重大さが広まると、馬を停めていた運び屋たちが集まって騒然となった。商売道具を失った彼らは、俺と同じく呆然となって、次に一気に殺気立った。

運送業者がいきなりトラックを爆破されたような状況を想像して

欲しい。

いや、別に地球の出来事に例える必要もないか。とにかく、そういうことだ。

犯人の男は裏路地の隙間で膝を抱えて座っているところを発見された。

捜索にあたった自警団のひとつが俺達の前に引きずり出して、取り調べがその場で行われた。この街に公的な警察機関がないって話はしたかな？ 男は右の中指と薬指を反対に曲げられて、小指もそっさらされる前に自白した。

動機は よくわからなかった。

アッシュ・ラッシュとは違う覚醒剤的な働きをする霊薬を常習してイカれていた。

発症していた化石病のせいで自暴自棄になり誰かを巻き添えに自殺しようとした。

カネで雇われた。

灰の平原にいた誰かに命令された……。

そんなふうの話が二転三転して、おそらくその内のどれか、もしくはいくつかが原因だったと判断されて、その場で射殺された。

投獄やこれ以上の詳しい取り調べはしない。この街には時間も力ネも人員も、クソみたいな殺人犯相手に割いていられる暇はない。

俺は　その後どこをどう歩いたのかわからないが、気付いたら宿に戻っていた。

あのイカれた男は死体になって、どうせ引き取り手もないだろうから街の外の死体の山にワンポイントプラスされるだけだろう。

では、殺された馬はどうなるんだ？

人間の死体すら尊厳とコストを秤にかけてコストを取るほど余裕のない世の中になって、死んだ馬の扱いを人間様より上にしようという話はまずありえない。

だから、あの河原の死体の山に今度は数頭の馬が加わることになる。

俺はベッドの上で天井を見上げ、ただぼんやりと見上げ続けた。

どうやら俺の倫理観はとっくにおかしくなっているらしい。人間なんてもう、いくら死んでも死に飽きている。そんなものより人間のために働いてくれる荷駄をもっと手厚く葬ってやるべきだ。

本気でそんなことを考えていた。

俺にとっては一緒に働いてきた相棒で、あのウロコ馬を除けばこの世界に大事な人間なんてほんのわずかだ。死にかけていた俺を拾って、御者にまでしてくれた俺の雇い主と、最後の魔法の塔に駐留している輜重隊のおっさん。その関係者が何人か、それだけだ。

元の世界に帰ることはとうに諦めた。その代わり、こっちの世界

で生きるために必要な物があつて、それが相棒のウロコ馬だった。

怒りが体中の血管をめくり、しかしその怒りを晴らす相手はすでに銃弾を食らつて死体も捨てられている。男はまとまったカネも持っていないかつた。俺を含めた運び屋は賠償金を支払わせることもできず、荒れに荒れていた。

もうこれ以上、復讐する意味はない。相手もいないのに復讐のしようがない。

俺はもう一晩逗留することに決め、飲めもしない酒を無理やり押し込んで眠つた。

*

荷台だけあつてもそれを引く動物がいなければどうしようもない。

いくらなんでも自力で運べるものではないし、場合によってはこの街で馬を新調しないとイケないだろう。そうでなければ、魔法の塔方面に向かう馬車に乗せてもらつて帰るくらいしかない。

雇い主に直接聞けば話は通しやすいのだが、やっぱり電話がないと無理だ。手紙を送つても一緒。自分で運ぶほうが早い。

道理をわかってくれる相手だから、説明しさえすればウロコ馬の死については納得してもらえるだろうが　いずれにせよ移動手段を考える必要がある。

いま持っているカネでは、オオウマは論外としてもウロコ馬を買うには少したりない。レンタルならなんとかなるだろうか？

旧アベリー市にはみんな死滅してしまった馬屋の他にもう二ヶ所、馬を止められる場所があったはずだ。

俺はなるべく頭を働かせないようにして、まず北側の馬屋へ向かった。

涙なら昨日の夜に十分流した。

だから、今日はもう平気だ。

俺はこの三年間の過酷な暮らしてそういう人間になっている。

なっているはずなんだ。

18 予兆としての毒殺事件について

頭のイカれた男が馬屋の餌に毒を盛って、俺のウロコ馬を含めた多くの命が奪われた。

最悪の気分ならこれまでもいろんな種類を体験してきた。水や空気が人間を拒絶する世界ではそういうこともある。

でもこんな最低の気分になったのは久しぶりだ。

俺は三年近く御者をやってきた。要するにこの世界に来たのとは同じ期間ということになる。

成り行きとはいえ、その仕事が俺の生活、俺の命を支えてきた。

異世界から突然現れた人間を、何もせず生かしてくれるほどの余裕は残されていない世の中だ。ウロコ馬とたまたま相性が良くなければ、どこか全然知らない場所で死体の仲間入りをしていたかもしれない。

そのウロコ馬はもういない。

俺はいま御者ではなく、単なるむき出しの異世界人に逆戻りしていた。

気付いてみると、馬がいなければ俺はどうすればいいのか、穴が開いたようにわからなくなった。御者の仕事経験以外に積み上げたものは多くない。それさえも運任せで、自分から動いてそうなった

とは言えない。

相棒を失ってこれからどうすればいいのか。

虚無感を外に追いやって、いまは自分の頭で考えないといけない。

とは言うものの、結論はすでに出ている。魔法の塔、その麓の街まで戻るのだ。それ以外に俺が行く場所はないし、行きたいと思える場所もない。

俺は早く誰かに謝りたくて仕方なかった。

相棒のウロコ馬は看取ることもできず冗談みたいにあっさり死んでいたし、復讐しようにも犯人はもういない。射殺され、ゴミ以下の扱いを受けてどこかに捨てられた。

怒りや憎しみをぶつける先はもうない。やり場の無さが胸を締め付ける。でもどうにもならない。俺は到底飲み込めないものを飲み込んで、諦めた。何をやってももう遅い。どうにもならない。

それでもなお、この……言いようのない感情は我慢できなくて、俺の中の特別な喪失を誰かに打ち明け、詫びないとおかしくなりそうだった。

俺はいろいろな考えを巡らせ、我慢して、諦めて、ようやく平静を保てるようになった。

こんな時、人は何で『自分は平気だ』って顔を装うとするんだろうな？

そんなこと誰にも強要されてなんかいないのに。

*

事件は終わりではなかった。

旧アベリー市内には、普段のざわめきとは違う何かが渦巻いていた。

目を血走らせ、何かに急かされるようにして淀んだ熱をかき混ぜている住民たちが噂している。

馬屋に繋がれていたウロコ馬たちが毒殺されたこと。

そして その毒殺事件は、街に三ヶ所ある馬屋の『全て』で起こったというのだ。

なんだそれは？

俺は背骨を引っこ抜かれたみたいなきな気分になった。

他の馬も毒殺された？

意味がわからない。自分の目で見るまでは信じられるか。俺は北側の馬屋まで急いだ。

実際に自分の目で見た。

信じられなかった。

俺の馬が死んでいたのと同じように、そこでも繋がれていた馬が横倒しになったり伏せつたままの状態で動かなくなっていて、生きているやつも口から血の泡を吹いて余命わずかという状況だった。

何頭のウロコ馬がいたんだろう。帳簿でも見ればわかるだろうけど、そうする意味があるとは思えない。

湿った毛布みたいに絶望感が体にまきついて、俺はさらに絶望するのを承知のうえで、もう一か所の東側の馬屋へ向かった。

噂は正しかった。

本当に三ヶ所の馬屋全部で大量死が起こっていた。

全部の場所で、毒を盛られて殺されていた。

*

俺が馬車を停めていた西側の馬屋で事件を起こした男と同じように、犯人は意外なほどあっさりと捕まった。

そのふたりも、俺のウロコ馬を毒殺したクソ野郎とだいたい同じような人間だった。

幻覚系霊薬の売人兼常習者、街の浮浪児に死体剥ぎをさせていた元締め気取りの女、化石病で片目を閉じられなくなった強盗殺人の前科のある男……。

共通点は、完全にどうにもならないどん詰まりのクズで、どちらかと言えば死んでいた方が世の中にとってはプラスになるような人

間だということくらいだ。

三人が顔見知りであるという可能性は早々に否定された。

旧アベリー市は完全に真っ黒な暗黒街か、それよりは多少マシな暗黒街か、治安が良くない程度のグレーゾーンか、だいたいこの三種で半分近くが占められている。

おおまかに人口の半分が犯罪者か、何らかの形で犯罪行為に関わっていることになる。そういう環境では犯罪者やクス同士のネットワークがあり、行き過ぎた抗争で街が火の海にならないようマフィアとかヤクザみたいな縦社会の組織もあるらしい。

そういう連中は、割ってはいけないラインを下回ったクソ以下のクスへの制裁を躊躇しない。

いくら殺人や強盗がはびこっていたとしても、数少ない移動手段を片っ端から潰されることは全く誰の得にもならない。犯罪グループも交易は格好の儲けにつながるからだ。

だから毒殺実行犯の人物像や背後関係は誰の擁護も受けず、裏のネットワークで調べ上げられ、それほど時間を置かずに束になるほどのタレコミがあった。

三人のつながりは全く浮かんでこなかったらしい。

顔見知りですらなかったという。

「どついうことなんだ、じゃあいったい何で三ヶ所同じように毒を入れる？ しかも馬相手に？」

「魔法使いを連れてきて成分を調査させましょう。これじゃ埒が明かない」

犯人の即時死刑執行も辞さない自警団の男たちが怒鳴り合う声が響いて、俺は少し離れた石段に腰掛けたまま何も考えられずぼんやりするしかない。

おそらく　　というか、ほぼ確実に使えるウロコ馬はなくなった。

無事な個体も完全にゼロではないだろうけど、カネのある交易商あたりが何としてでも抑えようとするだろう。街道を比較的安全に行き来できるのはウロコ馬の引く馬車くらいしかないのだから、商品の行き来が滞るのは避けたいはずだ。

では、俺はどうすればいいのかというと……。

全く見当がつかない。

馬車を引く動物がいきなり死んで呆然としている俺以外の御者連中と同じく、皆目見当がつかなかった。

どうすることもできない俺の目の前を、細かいチリが横切っていた。

降灰が始まったらしい。

街の上空にはドーム状の見えない防毒隔壁が広がっていて、そこを通り過ぎて降ってくる灰は無毒化されている。

見上げると、降り注ぐ灰は粉雪のようで、何も知らなければ綺麗な光景に思える。

もし防毒隔壁が今この瞬間消えてしまったら、俺はたぶん10分ほどで死ぬだろう。マスクを付けずにいたら、まあだいたいそのくらいが限界だ。

灰を吸い込むだけで人は死ぬ。動物も死ぬ。草木も根から腐る。

なのにどうして毒を盛ってまで家畜を殺す必要がある？俺がこの世界に来る以前に、もう十分に死んだはずじゃないのか。

人間同士なら、追い詰められて略奪や強盗殺人で死人が出るのはわかる。自分だけは生き残ろうという生存本能とか利己心とか、そういうものが引き金になって。珍しいことではない。旧アベリー市ではもっと頻繁だろう。それこそ、埋葬も火葬もせずに死体を野ざらしにしているくらいに。

でも家畜を殺す意味はそれとはぜんぜん違う。

トゥルーメイジに近いほんの一部のVIPは純粹馬車とか断続的瞬間移動駕籠ツシユカーゴみたいな魔法文明の遺産を使っても、生き残りの人類のうち9割は長距離の移動には徒歩か馬車を使うしかない。

馬泥棒して食料にするとかならまだ理解できる。

そうではなく毒殺、しかも大量殺害だ。

そして三ヶ所の馬屋の全てで同じような手口。これはただの頭のイカれた奴のイカれた行動じゃない。言ってみれば公共交通手段に

対するテロみたいなものだ。わかるだろう？　こんな誰かが意図的にやらせたに決まっている。

「誰かって、誰だよ……」

俺は思わず口に出して言った。

何で殺す。どうせ放っておいてもみんな死ぬんだ。何でわざわざ殺す。何でわざわざ動物を殺す。

懐にあるカネと護身用の銃のことがふとよぎった。

なあ、護身用の拳銃っていうけど、本当にこれで身が守れるのか？

こんな安物じゃなくて、もっといいものを買ったほうがいいんじゃないか？

本当に相手を殺せるものを手に入れるべきじゃないのか？

手に入れて　殺すべきじゃないのか？

*

後から思えば、さすがにこの時の俺はちょっとどうかしていたと思う。

でも、本心だった。

正体の分からない、いるかどうかもわからない『黒幕』への殺意と、そのための具体的な手段のことで頭がいっぱいになってた。

そんな時だけ俺は積極的になる。

実行犯を処刑するだけじゃだめだ　そう思って俺は自警団の連中の輪に加わり、捜査に口を出そうとした。

同時に、怒りの矛先を向けるべき相手がわかった時に何が必要かを考えた。確実に殺せる手段のことだ。

プロに頼るのがいい。銃器のプロといえばこの世界では護法軍だ。軍隊と呼べるのもう護法軍しか存在しない。

すでに人殺しみたいな顔色になっていた俺が思い浮かべたのは、自然の成り行きとしてルシウムのいかにも女軍人といった姿だった。

もう縁が切れて二度と顔を合わせることもないと思っていたし、会う気もなかったけど、こうなったら仕方がない。あとで護法軍の詰所に出向いて、何か力を貸してもらおう……。

その前に、犯人の取り調べに参加しなければいけない。何だったら積極的な取り調べ方法を買って出てもいい。

そう思って、俺は人垣をかき分けて馬屋の敷地に入った。ウロコ馬の死体が転がり、自警団によって取り押さえられた犯人の姿があり、そして悲鳴が上がった。

悲鳴を上げたのは、犯人の汚らしい中年女だった。街の外にある死体の山から、子供に金目の物をはぎ取らせて上前をはねていたという女。俺が学校指定の革靴を奪って突き飛ばした羅生門ババアと似たようなものだろう。

その醜い顔は、さらに化け物じみた形相になっていた。

無理もない。

汚いババアは前腕を掴まれて、完全に握りつぶされていた。肘と手首の中間で骨が粉碎されて、ぶらぶらとありえない方向に揺れている。

ああ、そういうことか。

エスカレートする一方だった怒りが三步ほど身を引いて、俺はむしろ汚いババアを気の毒にさえ思った。

泣き喚くババアの腕を潰したのは戦闘仕様の義手だ。会いに行く手間が省けたというかなんというか、とにかくそういうことだ。

ババアを『尋問』していたのはルシウムだった。

冷たいナイフみたいな表情だ。いけ好かない女だと思って見ていた時の顔がチャーミングに思える。訓練したことを訓練したままに実行する機械。

想像はつく。おそらく護法軍に関わる馬に手を出したのだろう。その原因を突き止めるために彼女が直接やってきたというところか。

俺みたいな安い運び屋まで使って物資を運んでいるくらい護法軍の補給線は弱り切っていて、そこに輸送の要である馬の大量死だ。

何かが起ころうとしている。

何かはわからないがもちろん悪いことだ。

俺はどうやらそれに巻き込まれていくらしい。

19 親切なおばさんはもういない

ウロコ馬の鳴き声はウシガエルとヤギを混ぜたような音で、鼻屑目にしても綺麗なものではない。

夜の馬屋なんかはド田舎の田んぼでカエルが合唱しているみたいな音がくぐもっていて、扱われ方がウマっぽいだけでやっぱりぜんぜん違う生き物なんだと思い知らされる。

俺が今いる場所も馬屋だが、鳴き声は聞こえない。

毒殺されほとんど全頭が死んでいるからだ。

代わりに聞こえるのは、口から泡を垂らしながら絶叫する汚いバアの声だけだ。それ以外は聞こえない。

毒殺現場の只中で、事件を取り締まる自警団たちの人垣に俺もそこに混じっている。囲まれたその中央には、毒殺の犯人である酷い身なりの女と、女の片腕を文字通り握りつぶしている護衛軍女士官・ルシウムの姿があつて、俺も自警団の強面も押し黙っている。

「答えなさい。誰に頼まれたのか」

冷酷な声が、響き渡る悲鳴の中でもよく聞こえた。

ルシウムの左肘から先は魔法で作られた義肢で、しかも戦闘仕様で、だから薄汚い中年女の前腕を完全に握りつぶすことくらいは造

作も無い。

とはいえ 造作も無いからといって本当に造作もなく実行できるのは、ルシウムという人間の意志の問題だろう。

ほんの数分前には大量毒殺犯の黒幕への殺意に燃えていたはずの俺は、彼女の振る舞いを見て急激に縮こまった。

プロと素人の差というやつか？ 実行できるタイプとそうでないタイプがいて、彼女は躊躇がなく。俺は結局そうではないということだろうか。どちらがいいのか悪いのかわからないが、疎外感のよくなものを感じた。

「答える気があるなら早めに答えなさい。答えないのなら次はこちらの腕。それでも言わないのなら両足」

ルシウムはそう宣告した。

宣告通り毒殺犯の女は両腕を握りつぶされた。

苦悶の表情と絶叫と、体中の穴から液体を垂れ流す中年女の姿はもう人間の尊厳も何もない。街の外で積み重なって腐っていく死体よりいくらかマシというくらいの汚物のかたまりに見えた。

ひでえな、と俺の隣に立っていた自警団の男がつぶやくのが聞こえた。どっちのことを言っているんだ？

それから何度か詰問と悲鳴が交互に上がって、ようやく自白らしきものを歯抜けだらけの口から漏らしたときには、ババアの失禁で地面に水たまりができていた。

一応忠告しておく。

公開拷問ショーを見る機会があったら、できれば舞台から離れた席にしておいた方がいい。

五感全部で受け止めるのはキツすぎる。

*

丸一日が経った。

ルシウム初めとする護法軍、自警団、魔法使い、一部犯罪組織までもが加わった捜査は、おおむね結論が出た。

実行犯の使った毒はどれも同じもので、毒を渡した人間は少なくともふたり以上いる。

まあ、予想通りというところだ。

実行犯と黒幕がいて、クズみたいな実行犯は使い捨てにされたとでは毒を渡したのは何者なのか。

この世界は街中で灰合羽とマスクをつけていても不自然じゃないから、外見的特徴で調べを進めるのは難しい。

ほぼ確実にされたのは、毒を実行犯に手渡した人物は複数いるということだった。

協力を要請された辻魔法使い　修行僧上がりのフリーランスの
ようなものだ　の鑑定魔法によれば、毒の成分は灰を混ぜた霊薬
で、それ自体は最近になって作られたものだという。

つまりどうということかというのと、毒の灰が降ってきて世界中で絶
滅の波が広がって、まだまだ死体が増えていくことが明らかになて
いる状況下だというのに、わざわざ進んで死体を増やす『毒』を作
った、もしくはは作らせた奴がいるってことだ。

そんなことをして何になる？

例えば　『敵』に使うための毒だとしたら、考えられるのは灰
賊を確実に殺すときくらいだろう。

人類同士の戦争は、もう奪うだけの領土も軍備を整える余裕もな
くなって誰もやりたがらない。勝ってもその先がないというのは、
灰が降りだしてから10年を超えたあたりでみんな気付いてしまっ
た。

となると、わざわざ毒を作って使う相手は社会全体に対する敵で
ある灰賊くらいしかないってわけだ。

共通の敵ということであれば他にもフィードがいるが、俺の知
っている限り、対フィード専用の霊薬ならすでに開発され、実際
に使われていた時期もあったという。

でもコストに効果が追いつかなくなって、量産体制も維持できな
くなって、そのまま使われなくなった。

鑑定魔法で調べても、対フィード毒という線はないという結果

だった。

こうなると、あとは人や動物を毒殺するための、いわゆる毒薬として作られたくらいしか考えられない。

でも、なんのために？

毒なんか使わなくても人は死ぬ。

何でわざわざ死因を増やす必要があるんだ？

20 赤く腫れた目が灰の中で独り

「目的がないわけでもない。治る見込みのない化石病や、フィーン
ド化する前に使う 要するに自殺用だ」

錆びついた橋の欄干に腰掛けながらルシウムが言った。

橋の下には水ではなく、入り組んだ構造の下層にあるレンガ造りの歩道が通っている。言ってみれば高架橋のようなものだ。

どういうわけか俺はまたルシウムと行動を共にしている。そう望んだわけじゃないが、どうすればいいのかわからなくなると知っている人間の後についていくのはよくも悪くも俺の習性だ。

「でも自殺なら他にも方法はあるんじゃないスか。それに自殺用だとしても、効果を馬で試すっておかしいでしょ。しかもあんなに沢
山」

「もちろん。黒幕は効果を知った上で使っている。問題なのは手段ではなく目的だ」

「目的？」

「馬を皆殺しにするためだ」

全身の筋肉に緊張が走った。『馬を皆殺し』という言葉は俺にとっては強い意味を持つ。なにしろウロコ馬の世話は俺の命を支えるものだったんだ。ペットロスどころの話じゃない。

「……君の馬も？」

「決まってるでしょう、そんなこと。言わせないでくださいよ」

「そうか、すまない。護法軍も被害が甚大でね。隠しても仕方がないから言うが、今は移動手段が全くない」

知るかそんなこと、と俺は内心苛立った。護法軍の補給線なんて気にしている余裕はない。

そりゃあ俺だって、軍が戦力を維持できなくなればまわり回って自分の生活を脅かすことになることくらいわかる。灰賊やフィンドが退治されずに野放しになれば、一時間あたりの死傷者数は一段階上がるはずだ。

でも今は、護法軍の内情なんて聞きたくもなかった。

カネに釣られた俺が悪いとはいえ、護法軍の荷物を旧アベリー市にまで運ぶことになったのはルシウムのせいだ。当初依頼されていた宿場町で荷物を引き渡すだけだったら、少なくともウロコ馬を死なせずに済んだはずだ。

俺は押し黙って、橋の下を通る薄汚れた住民たちの姿を眺めた。

どこから来てどこに行くんだろうか。

みんな一様に顔色が悪く、目の下が落ち窪んでいて、重い足をむりやり急かして歩いているように見える。強制収容所に押し込まれた囚人の群れみたいだ。

この街は他に行き場のない難民が集まってできた場所だ。治安は最低だが、そこで生活する人たちからは、衰えた肉体に包まれた何としてでも生き残ろうとする意志がギラついて見える。

俺は早々にいろいろなものを諦めてしまったが、彼らはそうではないらしい。

どうしても生きようというならそうすればいい。非難する理由なんてどこにもない。その必要もないし、俺が口を挟むことじゃない。

その意志を、権利を毒殺なんていう方法で踏みにじる人間というのはいったい何者だ？

この街と他の場所を結ぶ交通手段を潰すことに何の意味がある？

虐殺で快楽を得るような真性の狂人でなければ、何かの企みがな
いとおかしい。それが何なのか俺には知りようもないが、意味も理
由もなく取る行動ではありえない。

ということは　クズを実行犯にしてウロコ馬たちを殺すことが、
何らかの利益になる人間がいる……？

何かが頭のなかで結びつきそうだった。

馬車は大事な交通手段だ。それを狙って殺すというのは、単なる
動物殺しというよりバスや電車を狙ったテロみたいなものだ。

テロ。テロリストか。

空から毒の降ってくる世界では、誰も彼もどこかしらおかしくなっても不思議じゃない。

その最たるものが灰賊で、奴らは自分が1分後に死んでいても構わないというくらい狂ってる破滅主義者だ。

そんな風にイカれた誰かが、とにかく他人に少しでも迷惑をかけて道連れにしようとする毒を使ったというのはどうだろう？

でもわざわざ毒薬を三ヶ所に渡して回って実行犯を仕立てているのだから、完全に支離滅裂な狂人の行動というのとは違う気がする。

正気があって、その上でテロを起こす理由があるとすれば？

この世界はもう国家という枠組みがなくなっている。名目が残っているだけだ。統治者が死滅したか、生き残った統治者に統治できる状況ではないか、どちらかだ。だからテロを起こして自分の要求を無理やり通す相手がいない。日本にいた頃は『反体制組織によるテロ』なんて言葉をニュースで聞いたが、反体制も何も楯突く体制がないんだ。

そう考えると、無茶な方法で何かを要求できる相手はふたつしかない。

護法軍と、トゥルーメイジを始めとした魔法使いたちだ。

実質的にはトゥルーメイジがその対象だろう。

護法軍に暴力で訴えても、彼らは秩序を乱す全てに容赦はしない。どうしても必要が有る場合を除き、逮捕もしない。犯罪者の社会復

帰をまっけていられないからだ。だから要求を飲むこともない。たとえ人質を取られてもだ。

だから必然的に魔法使いへ要求を飲ませるとというのが目的になるはずだ。

この世の中で力ネを要求したり政治的意図を主張したって意味はない。

一番価値のあるものが何かというと、安全だ。

生き残りたい、自分だけ、自分たちだけではどうしても生き残りたい。魔法使いの頂点に、自分たちの命と生活の保証を約束させる。この世界で最も死にくい場所は魔法の塔の中でトゥルーマイジの保護下に置かれることだからだ。

そんなやり口で快適に生きていけるかどうかは別として、動機としてはありえそうな気がした。

「なるほど。確かに筋は通っている。鈍いのか鋭いかわからない男だな君は」

ついつっかり自分の考えを喋ってしまい、俺は後悔した。こんな推理なんて俺の仕事じゃない。

「トゥルーマイジへの要求を通そうとする、というのも最終的な目的ではあるのかもしれない。だが今のところは、護法軍を標的にしたのか、この街そのものに対する破壊工作なのか。そのいずれかのために馬の毒殺を行ったのだらうと我々は見ている」

「軍が標的だったなんてことになったら、街の住人に襲撃されるんじゃないスか？ あの詰め所」

「笑い事ではないだろう」

俺が皮肉っぽく言うと、ルシウムは珍しくむっとして俺の方を睨んだ。本気で睨まれたらたぶんその場で動けなくなるだろうが、まだ人間の女がする表情の範疇だった。

「それはさておき、1週間もあれば他の駐屯地から物資が届く予定になっている。一部の輸送隊はそのまま魔法の塔まで向かうから、そのつもりがあれば君も同乗して構わない」

一瞬あつけにとられ、俺は断ろうとした。負い目を作りたくないが、すぐに引っ込めた。

冷静に考えればルシウムの話に従うのが一番安全で確実だ。俺は別に自殺志願者じゃない。なるべく死なないで済む楽な道があるならそちらを選ぶ。

「でも、なんでそこまで……」

「責任は感じているんだよ、イリエ。私自身の行動に間違いがあったとは思っていないが、めぐり合わせはよくなかった。埋め合わせはさせてもらおうよ」

ずいぶん上から目線のお詫びだけど背に腹は代えられないというやつで、俺は一応の感謝を示した。彼女のことは苦手だが、少なくとも悪人じゃないことぐらいはわかる。

それからしばらく沈黙が続いて、俺は自分の宿に戻るうとした。

そのことを伝えようとした直前に、通行人を押しつけて誰かが猛然と走ってきた。ルシウムの名前を叫んでいて、腕章を付けているから護法軍の人間なのだろう。

その男は荒い息をつきながら、深刻な表情でルシウムの前で立ち止まった。

「き……緊急事態です大姉ルシウム、魔法の塔が……」

「……兄弟ラルコ」

あからさまに大慌てという様子の男に対し、ルシウムはきつい言い方でたしなめた。

「街中で騒いで回るな。護法軍の士官が取る態度ではないぞ」

「しかつ……しかし緊急事態で」

「見ればわかる。だが我々が緊急事態と市民に触れて回るこの意味を考えろ」

ラルコと呼ばれたまだ若い男はひたすら恐縮し、冷たい目つきでルシウムに大声で謝罪した。その声も周りに聞いてくれと言っているようなもので、傍で見ていた俺は軽く吹き出してしまった。

まあ、緊張するのも仕方ないと思うが。

何とか場を収め、ラルコがルシウムに早口でその緊急事態とやらをささやき始める。

俺は無言で立ち去るのも気が引けて、去り時を逃してしまった。

緊急事態、か。

どうせまたロクな話じゃないことはわかる。そんなことに首を突っ込むのは絶対に嫌だ。

とはいえ、気になる。

さっきラルコは魔法の塔がどうか言いかけていた。

魔法の塔で緊急事態？ もし本当にそうなら、人体でいえば冠状動脈瘤とかクモ膜下出血とか、そういう命にかかわるレベルの話になる。人類最後の砦だからだ。

俺はその魔法の塔方面に帰らないと行けないわけで……。

「……そうか。わかった」

唐突に話が途切れ、ルシウムは硬い表情で了解を伝えた。

おそらくルシウムを探して走り回っていたのであろうラルコの額からは汗が伝っている。

会話しかしていないはずのルシウムの首筋にも、汗の一滴が流れ落ちていた。

俺は近くにいるだけでその張り詰めた空気の余波を受け、無関係のはずなのに金縛り状態になってしまった。

雑踏の音は少しも変わっていないはずなのに、音量が極端に下がったような気がした。護法軍のふたりの間の空気は、周りの空間からは切り離されているみたいだった。

「……イリエ。すまないが先ほどの約束は守れない」

ルシウムが俺に静かに切り出して、俺はできれば今すぐ耳をふさぎたかったがそれもできない。

「大姉、民間人にその話は……」

ラルコは慌てて制止しようとしたがルシウムは聞き入れない。

「最後の魔法の塔と、その麓の街に灰賊の襲撃があったそうだ。しばらくは護法軍以外の通行を許可できない」

「襲撃、って……そんなのすぐ返り討ちできるでしょう？ 塔の周りはこの世で一番守りが堅いんだし、灰賊の5、6人が襲ってきたところで……」

「普通の襲撃ならばその通りだ。だが普通ではない」

「普通じゃない？ 灰賊がいつぺんに5、60人襲いかかってきたとか？」

俺はありえないことのとえとして言っただつもりだった。灰賊は毒の灰の積もる野外で暮らす賊で、社会から離れて灰の中に埋もれ

るうちに人間性も何も失ってしまった連中だ。

まともな人間はひとりもないと言っている。せいぜい数人単位で旅人や村を殺したり奪ったり食ったりするのが関の山だ。わかるだろう？ 徒党を組んで大規模な襲撃をかけるほどの分別や先見性があるなら、そもそも灰賊になんてなるもんか。

だから、ルシウムとラルコにきわめて真面目な顔で同時に見つめられた俺は、首の後ろが汗でじわりと湿るのを感じた。

「……ほぼ正解だ。灰賊が通常ありえない集団で襲撃を仕掛けているらしい。ただ……」

「ただ……？」

「人数が予想外だ。灰賊どもは、少なくとも300人ほど確認されている」

300人。

俺はバカみたいに口を半開きにさせた。みんな大変なんだ。明日死ぬかもしれない。そんな状況で、まともにものを考えられる人間をそれだけ集めるのも決して簡単じゃない。

それなのに、すでに激減している人口のさらに一部、救いようのない狂気の灰賊たちを、だ。

気が触れていて、サッカーチームほどの集団を作るのもままならない灰賊たちを、300人。

「もはや野党の群れではなく『軍勢』だ。あるいはこの街も巻き込まれる可能性がある」

「それじゃあ、まるで戦争……」

「戦争だ」

ルシウムは左の義手で橋の欄干を強く握りながら、どこか遠くを睨みつけた。

「誰がそうしているのかわからないが、灰賊を率いて最後の魔法の塔に侵攻した。戦争だよこれは。もう起きないと思っていた『人間同士の戦争』だ」

俺は何も言えなかった。

遠のいた街の雑音は、まだ耳に戻ってこない。

ルシウムが握りしめた金属製の欄干には、彼女の手形がくつきりと刻まれていた。

21 狂人兵団

こんな時に人間同士で争っている場合じゃない、というのは日本にいた頃にもよく聞いた言葉だ。

もちろんそれは映画とかマンガの中での話だったけど、毒の灰が降るこの世界では架空ではすまない。本当に切実な問題だった。

3年前にこつちにやってきた俺は、人間同士が争っていた時代を直に見たことはないし、人づてや当時の記録でしか知らない。

いわゆる『この機に乗じて』ってやつで、かなりの泥沼状態だったことは間違いなかったようだ。

あくまで過去形だ。

戦争は終わった。もう起こらない。

当時の権力者たちは灰を甘く見ていた。だから気づくまでに10年ほど時間が必要だった。

領土そのものが死んでいくのに、戦争を続けても無意味だったことを。

当時の食料生産で養える数まで人口が激減して、国家という枠組みは崩壊した。

生き残った人類は協力するしかなかった。

極限状態もピークを超えると、人間というのは案外お互いを助けあうものらしい。

それともこの世界の神様が与えた。どんな言葉でも意思疎通ができるという祝福のせいかもしれない。

話を通じる相手同士なら、戦争に資源を費やしている余裕なんてどこにもないという現状を理解し合える。

だからもう戦争は起きないし、起こしても利益がないし、起こす気力もない。

そのはずだった。

話を通じる相手なら、お互いの状況を理解できる。

では話を通じない相手なら？

そんな連中が何を考えているかなんて、俺には知りようがない。

これから始まるのは戦争だ。

もうすぐ俺は、傍観者ではいられなくなる。

*

俺が三年間過ごしてきた街は、灰賊による襲撃の知らせが入ってきたその日の内に通用門を一か所落とされ、市街戦が始まっていた。

最後の魔法と塔を擁する国が、塔への中継点と防衛を兼ねて造った神聖都市クリュミエリという名の街だったそこは、国がなくなり護法軍の指揮下に入ってから単に『塔の麓の街』としか呼ばれなくなっている。

名前は変わっても都市の構造は守りに適していることには変わりなく、護法軍が常に駐留しているからちよつとやそつとじゃ侵入なんてできない。

それも当然で、最後の魔法の塔はこの地上の魔法使いに力を与えてくれる最後の生命線だからだ。

俺には仕組みを理解できないが、塔は魔法の力を発信するアンテナみたいなものだという。魔法使いはそれを受信することで力を発揮する。

塔が破壊されればどうなるか。

修行僧クラスの下位魔法使いは自力で魔法を制御できなくなる。霊薬の生産が止まり、防毒マスクがまともに出まわらなくなるだろう。ごく基礎的なインフラも破綻し、代用食料が作られなくなれば間違いなく餓死者がうなぎのぼりだ。

中位、上位の魔法使いも同様にパワーダウンしてしまう。こつちも深刻だ。人類の生活域に防毒隔壁を作れなくなり、フィードと戦う武器を製造できない。毒の灰を食い止める魔法が維持できなくなれば、絶滅の波が連鎖的に起こるのは必死だ。

トゥルーマイジは魔法の塔によることなく魔法を使えるらしいけど、それでも全く影響がないというわけではない。

世界中の残された魔法使いが総崩れになればトゥルーメイジが舞台上に立たざるを得なくなる。そんな状況が続けばトゥルーメイジの負担があつという間に増して、限界が来るのは目に見えている。

と、まあそんな風に全部がドミノ倒しにダメになつてしまふ。世界は完全に灰で覆われ、衣食住全てが崩壊し、人類は砂漠の真っ只中とか魚のいない外洋に身ひとつで置き去りにされたも同然になるだろう。

だから、魔法の塔とかつてクリュミエリと呼ばれたの街の守備は、世界で一番堅い。

灰賊がちよつかいを出せる場所ではないし、これまで幾度となくあつたフィンドの来襲も防ぎきつてきた。俺が住み始めてからもそういう事態は何度か見かけたことがある。

フィンドは毒を吸った人間の体組織が変質してしまつた化け物で、本人の意志をねじ曲げて殺人を犯す。これは前にも説明したと思う。

じゃあなぜ殺すのか　というと、フィンドは灰憑きとも呼ばれている通り、灰の意に従っている。

灰の意つてのもおかしな言葉だが、元々地獄から吹き上がった灰なのだから要するに地獄の意向に沿つた行動を取る。

地獄が地上にそうしたように、フィンドは人間にそうする。わかるだろう？　地獄産のものは、どいつもこいつも例外なく世界を滅ぼそうとしているんだ。

フィードは人間への敵対という目的がはっきりしているから、灰賊なんかよりはるかに統制のとれた襲撃をかけてくる。麓の街に限らず、世界に残された村、都市、坑道、そういった人類の生息地に押し寄せる。まるでゾンビ映画だ。

対抗できる力は護法軍が持つ。護法軍にしかできないとも言える。

だから護法軍の庇護下に麓の街に攻め入るのは自殺行為のようなものだ。

相当の大軍勢でもなければびくともしないだけの備えはある。

その街に、大軍勢が突如攻撃を仕掛けた。

例外なく気の触れた灰賊の群れ、その数およそ300人。

狂人の寄せ集めがどうやって連携しているのか見当もつかないが、ともかくやつらは攻めてきた。

そして、初戦は灰賊軍の優勢だという。

街が戦場になる？ そんなことになって、俺はどうすればいいんだ？

旧アベリー市に足止めを食らい、帰ることもできず、他に行くあてもない。

意識が半分体からずれてしまったみたいだった。こっちの世界で築いてきた御者としての生活には戻れないのか？

世界の命運を左右するかもしれない戦闘が一週間ほどの距離の向こうにあつて、その様子を覗き見するには遠く、無関係だと言いつつには近すぎる。

ただ時間だけが過ぎていく……。

22 「灰色の、べたべたしたもの」

いっぺんにいろんなことが起きた。

リアルタイムで見た出来事だけで説明するのは難しい。

何から説明すればいいのか、ちょっと整理させてくれ……。

*

グレイ「グー」。

名前だけは聞いたことがあった。でもその正体についてはよくわからない。

と言うのも、カルト集団だとか、フィードの群体だとか、死に絶えた灰の平原に潜んでいる悪魔だとか、人によって話が一致しないからだ。

こつちに来てその言葉を聞いた俺はこう理解していた 子供を怖がらせる時に使う『おばけ』みたいな言葉だろうと。悪い子には夜中に『グレイ「グー」』が出るぞ、みたいなものだ。

正体不明の恐ろしい何か。

疑心暗鬼の中を渡り歩く悪夢。

穢された無数の魂と灰の荒野で踊る影。

あるいは生きた人間で、生きたまま人間であることを放棄した背徳者だとも。

そんなつかみ所のない、実在するのかどうかもわからないを指す言葉。

それがグレイ「グー」。

言葉だけならよかつたんだが、残念ながらグレイ「グー」は実在していた。

*

灰賊の軍勢が魔法の塔の麓の街へと攻め込んだのと、旧アベリー市のウロコ馬たちが毒殺されたのが同じタイミングで起きたのは偶然ではない。

結論から言うと裏で糸を引いていたのはグレイ「グー」だ。グレイ「グー」が『戦争』を仕掛けた黒幕だ。

最後の魔法の塔は世界滅亡を食い止める最後の砦だから、世界中で一番防備が堅い。選りすぐりの軍人たちが駐留し、持てる手段を全て投入して絶対死守の体勢を構えている。

そうすることで、護法軍の残りの戦力を世界各地に振り分けることができる。自由に動ける軍人たちがいなければ、生存圏を守りぬき、人間を襲う敵を殲滅し、街の犯罪者を取り締まることはできない。どうしても手におえない時は近隣の担当部隊と協力して対抗する。

そういう戦略をとっていた。

これまではそのやり方で問題なかった。他にいい方法を出せと言われても思いつかない。だから決して手落ちがあったと非難するには当たらない。

グレイ「グーが突いたのはまさにそこだった。

魔法の塔から旧アベリー市と同じくらいの距離に、もうひとつ大きな都市がある。

かつては学芸都市、今では過剰なほどのバリケードで全身を覆われた有刺鉄線の街と呼ばれているモツゾラブ市においても大量毒殺は起きていた。旧アベリー市とはほぼ同じ方法で同じ毒が盛られ、使える馬は全部潰された。

このふたつの都市が、小村や集落を除けば魔法の塔と地理的に一番近い大規模な生存可能拠点にあたる。こういう比喻で合っているのか自信がないけど、東京駅と羽田空港、成田空港の関係みたいなものを想像して欲しい。で、成田エクスプレスの車両が全部故障させられた。合ってるかな。まあ大体そんな感じだ。

つまり、空港に物資や人員が輸送されてきても、現場に送る手立てがない。ウロコ馬をほぼ壊滅させられたというのはそういうことだ。

灰賊の群れが攻め寄せてきているのを魔法による通信で知っていない。両市の駐留軍は動くに動けない。

おまけに、その時はまだわかっていなかったことだったが、街道のいくつかの関所はフィンドの群れに襲われて陥落していた。

関所の番を務めていた部隊は抵抗むなしく皆殺しにされた。どうも守備についていた人員の倍以上の化け物に襲われたらしい。酷い状況だっただろうな。

破壊された関所はフィンドの巣みたいになって、事実上の通行止めだ。

その後フィンドは追い払われたものの、関所は誰のものだからかわからない手足や内臓を洗い落とすところから始めないと復旧すらままならないという地獄絵図だったという。

何というか……ひどい話だ。交通網を潰される意味は大きい。俺のような運び屋にとっては特別に深刻だ。街道を外れて移動するのは手こぎボートで外洋に出るようなもので、死の危険は一桁から30%以上に跳ね上がる。徒歩で渡るのは自殺行為かそれ以上だ。死ぬだけならまだしもフィンドになって戻ってくることもある。

そうした条件が重なった結果、魔法の塔とその麓の街は陸の孤島と化してしまった。

アベリー、モツゾラブの両市に駐留する護法軍は援軍として駆けつけることすらままならず、結局、斥候として護法軍の志願者数名を徒歩で向かわせるのが精一杯だった。

斥候はあくまで志願者のみで行われることになった。つまり、捨て駒になることを覚悟の上でことだ。

街道に沿って歩いていただけでも死の危険があるのに、一度に大人数を送り込んで戦力をまるごと失ったら目も当てられないからだ。斥候による情報収集を待つ間、ふたつの都市の護法軍はさらに遠方からの支援が到着するまで戦力を温存することくらいしかできなかった。十分な数の戦闘員と輜重を輸送するにはどうしても馬車か、それに類する手段が必要になる。

悪いことが重なる。

悪いことを重ねたやつがいたからだ。

俺もこの時点では、旧アベリー市で落ち着きなく過ごす以外なかった。

*

灰賊は死を恐れない。

勇気がある？ もちろんそんな意味じゃない。

自分の命に対しての想像力が欠落しているからだ。死ぬかもしれない、危険を避けるべきだ、もっと安全なやり方がある、そういう想像が。

だからこそその灰賊とも言える。この先自分がどうなるかと想像できるなら灰賊になる道なんて選んだりはしない。

灰に触れすぎると手遅れになる。直接吸わなくても灰は灰だ。アッシュ・ラッシュの常習者みたいに少しずつ神経を冒されて、灰の

中にまみれていないと落ち着きをなくすようになって、そうなるのもう人間社会には戻れない。

完全に狂っていて、無軌道で、闇雲に標的へと襲いかかるケダモノになる。フィードでもないのに、自分から人間以下の存在に成り下がるんだ。

凶暴なサルが鈍器を持って玄関のドアをぶち破ろうとしている状況を想像して欲しい。相手は人間に似た姿形をしているけど、交渉の余地はない。略奪のために殺し、暴力を楽しむために殺し、食欲のために殺す。そんなやつが襲ってきたとしたら？

幸い、灰賊は大規模な灰賊団みたいなものをつくらうとしない。つくれない。数人の群れ程度が限界で、集団行動を取るには知能が低下しすぎているからだ。

だから対処できた。

街道を歩く旅人がいきなり待ち伏せされたらどうしようもないけど、十分な人数と武器を用意していれば返り討ちにできる。

略奪のために村を襲撃されても、防御を固め、近隣住民と力を合わせれば集落を守り切れることもできる。

何より護法軍の存在がある。護法軍が肩代わりし、法と秩序を守るために灰賊を容赦なく処分してきた。

ほとんどの局面で灰賊は護法軍に勝てない。

強弱の問題というより、プロの軍事集団である護法軍には一方的

に相性が悪いと言ったほうがいいかもしれない。

凶暴で、命知らずで、残忍だがどうにもならないほど頭が悪い。灰賊とはそういうものだ。

ところが、300人の灰賊たちはその欠点を埋め合わせてしまった。

グレイ「グー」による統率のせいだ。

本来は5、6人の集団を作るのが精一杯のはずなのに、連携を取って一軍をなしてしまったのだ。

勘違いされるかもしれないから先に言っておくと、灰賊たちは正気を取り戻したわけじゃない。

目的意識に目覚めたとか、訓練されたとか、そういうことではない。個人個人は依然狂ったサルのままだ。

『教育された』のではなくて、『乗っ取られた』と言った方がいいと思う。ある種の寄生虫に寄生されて行動を操られる生き物とか、聞いたことあるだろう？ そういうものを想像して欲しい。

かつて神聖都市クリュミエリと呼ばれていた街に侵攻した『軍勢』は、狂気をそのままに、意志と関係なく何かに操られて、一斉に街を攻撃していたんだ。

数十人単位の部隊に分かれ、武器を手に猛然と雪崩れ込み、フィンドよけの逆茂木を倒し、防毒隔壁も兼ねた外壁によじ登り、奇声を上げながら火を放ち、通用門を打ち壊しに来る。

護法軍が銃で撃つても、手足がもげた程度では動きを止めない。頭か心臓を破壊されるまで絶叫し、少しでも襲撃の輪に加わろうとする。死ぬことすら忘れていているそいつらは、もはやゾンビの大群よりのたちが悪い。

灰が降り始めて半世紀。

人の命が最後の崖から押し出され続けてきたその半世紀の間でさえ誰も見たことのない狂気のありさまだった。

死ぬまで殺し、殺されるまで殺し、殺し終わって死ぬ。

狂人兵団　人間の形をした死と狂気の群体。

グレイ「グー」の操る、悪魔の手先だ。

*

侵攻が始まって5日目の朝、300の狂人兵団はただの独りも残さず狂乱の中で死んだ。

護法軍側の被害も甚大だった。

住民も守備にあたった護法軍も無事では済まなかった。放たれた火によって防毒隔壁の一部が機能停止に陥り、逃げ遅れた人々は殺され、食料にされた。

護法軍の死傷者は魔法の塔絶対死守部隊の3割に及んだ。

塔のトゥルーメイジ自らが撃退のために動こうとしたものの護法軍は最悪の事態を想定してこれを制止し、いくつかの生命魔法による加護と現存する数少ない純正魔法創造物のひとつを借り受けるにとどまった。

この時のクリュミエリ防衛戦は、過去20年間をさかのぼっても2番目に激しい戦闘だったらしい。

一番激しい戦闘は、狂人兵団が進行してきたのと同じ日、別の場所で起きていた。

大坑道。

魔法の力に必要な秘石の多くを産出する、人類最後の生命線で。

23 地中に眠る星屑は神の愛なり

大坑道での籠城戦は、クリュミエリ防衛戦よりも長く続き、より多くの人が死んだ。

そのとき俺が足止めされていた場所から大坑道まではかなり距離があつて、狂人兵団と護法軍の戦いと同じく自分の目で現場を見たわけじゃない。

だからこの話は後になって聞いたことや、ウィジャ・メモリの記録なんかをまとめたものだ。俺の想像も多少混じっている。

それでもはつきりとわかっている事実がある。

この世界の人類にとって、ひとつの国よりも大きなものが失われた。

トゥルーメイジの命だ。

*

そもそも話をすると、大坑道と言うのは物凄く大きな鉱山だ。

つるはしやドリルで掘っていく暗く狭い炭鉱みたいなイメージがあるかも知れない。それとは比べ物にならないくらいデカイ。ダイナマイトや巨大重機で露天掘りするオーストラリアとかその辺りのスケールを想像して欲しい。

大坑道は露天掘りではなく地下鉱山だけど、とにかく大きい。入り口は海底トンネルみたいになっていて、その奥には巨大なシャフトが地の底まで穿たれている。シャフトのあちこちには横穴が開いていて、人間サイズのアリがつくった巣のようだ。

あまりに巨大なので、外に戻るのが面倒になったのか坑内に定住する人が増えて、地下都市ができあがったほどだ。灰が降りだしてからは防毒マスクが要らない街として流入者も多い。

俺の聞いた話では、採掘が始まったのは300年以上昔まで遡れるという。

よく資源が枯渇しないと呆れるけど、魔法が実在している世界を地球の常識で考えても仕方ない。

そこで採掘されている資源というのは様々な宝石だ。

ダイヤモンドとかルビーとか、あの宝石だ。

平和な時代ならともかく、死滅間際のこの時代でなんでわざわざ宝石なんかを？ そう思うだろう。俺もそう思った。

でも、覚えてるかどうかわからないけどちょっと思い出して欲しい。

魔法の成り立ちのことだ。

人間が神の領域に届く塔を建てたら、この世界の神は地球の神とは違って雷で打つどころか、人間の偉業をたたえて祝福を授けた。

どんな言葉も意思疎通ができるようになり、魔法の源たる宝珠を与えられた。

その宝珠は砕け散って無数の宝石として地に降り注いで、魔法使いは石から力を得ている。

だからここでいう宝石はただの綺麗な結晶じゃない。『秘石』と呼ばれていて、魔法の力の結晶として、人間社会のあらゆる場面で使われている。

例えば、もつとも重要な防毒マスクの浄化フィルターに使われている^{エリクサー}靈薬。あれの原料となっているのも秘石の加工品だ。

防毒隔壁にも、浄水装置にも、銃器にも、代用食料の生産にも秘石は欠かせない。

俺は見る影もなくやせ細った姿しか知らないが、魔法文明の栄光を支えたのも魔法使いと秘石の力だ。

だから秘石と言うのは単なる高価な宝飾品ではなく、石油に近いものだと思っ**て**欲しい。

燃料にしたり、加工して化学薬品にしたり、合成樹脂にしたり。大小かかわらずあらゆる場面で使われているもつとも重要な資源というわけだ。

ついでに言うと、一番巨大な秘石による構造物が魔法の塔で、最後の魔法の塔は火蛋白石の塔の正式名の通り、塔全体がファイアオパールで構成されている。基本的にデカければデカいほどそこに込められている魔法の力は膨大だ。

もしこれが失われたら、世界中の魔法使いの力が急激にダウンするらしい。電波塔がぶっ壊れてテレビが映らなくなるのと似たようなものだろう。

塔を新たに建造することはできない。その力は残されていない。だから人類最後の砦ってわけだ。

一方の大坑道も、秘石を安定的に採掘できる鉱山としてはほぼ唯一の存在になっている。小さな鉱山なら各地にいくつもあるけど、残された生存可能領域を支えられるほどの量は期待できない。

何よりも鉱山そのものが刻々と灰に埋もれていって、まるごと消滅していく。

大坑道もまた絶対に死守しなければいけない最重要拠点ということになる。

魔法の塔と同じく護法軍の大部隊が駐留して、坑道の入り口は要塞化されている。

度重なるフィンドの襲撃から地下都市と鉱夫を守るためだ。

灰が降り出して以降、フィンドは執拗に大坑道に現れ、大抵はすぐに護法軍によって排除されてきたが、防ぎきれずに侵入され大きな被害がでたこともある。

フィンドは大坑道だけでなく秘石鉱山に侵入しようとする性質がある。

誰が調べたのか知らないけど、灰の毒に操られる苦痛から逃れるため、秘石の輝きに引き寄せられるらしい。秘石に触れることで、他人を殺すことを強要される地獄から解放され、穏やかに死ぬことができる。フィードはそんな希望を抱いて鉱山を目指すのだ。うだ。

でまかせではなく、秘石がフィードの苦痛を何らかの形で和らげることは確からしい。

だったら秘石をくれてやったらいい、と思うかもしれない。でも、生きている人間にとっては絶対に秘石を明け渡すことはできない。

秘石が含まれる鉱石に触れると、フィードのおぞましい肉体はグズグズに溶けて、ペーストみたいに岩肌にくったりとへばりつく。それは石の内部に根を張って、表面にイソギンチャクのようなよくわからない肉の花が咲く。

秘石を掘り出すにはそのイソギンチャクを削り取らないといけない。

やっかいなことにイソギンチャクには毒がある。特別な魔法的成分があり、何かの拍子に体内に入ると犠牲者はほぼ確実にフィード化する。

手違いがあればねずみ算式にフィードが増殖しかねない。そうなったら大坑道は肉の花にうめつくされて、廃棄せざるを得なくなる。

だから絶対に守らないといけない。

大坑道防衛にあたるのは、護法軍の中でも最も実戦経験豊富な熟練の軍人たちだ。その日もフィンドの群れが押し寄せるのを事前に察知し、一般作業員も含め全員を大坑道の中に避難させた。

そうした防衛体制は割りと頻繁なので、ある意味手慣れたものだったはずだ。

だが、その日はいつもと違っていた。

灰に取り憑かれ、自分の望まない残虐行為を強要され、命令を拒絶しようとするとなさまじい苦痛に苛まれ、泣き叫ぶ。

フィンドとは、そんな風に手の施しようのないところまで貶められた人間の成れの果てで、だから群れなして襲ってくる時は全員が涙を流し絶叫している。

人間を殺したくない元人間と、化け物を殺さなければ自分が殺される人間との戦い。誰も望んでいないしだれも得をしない、生き残った人間同士が互いをすり潰すような戦い。

ところが、いつもであればむせび泣く絶叫が聞こえてくる距離になっても、その日の群れはほとんど押し黙っているような状態だったという。

フィンドたちの後方で、神輿のようなものが担がれているのを誰かが見つけた。

そこには女が座っていた。

24 追儼と死

フィンドの担ぐ神輿。

そこに座る女。

なぜ女とわかったかというと、その日も毒の灰が降っていたのに、そいつは防毒マスクも灰合羽も、それどころか下着一枚身につけていない丸裸だったからだ。

そいつは女だった。

でも人間じゃなかった。

フィンドの女王 誰が言い出したわけでもなく、目撃した誰もが同じようにそう感じたという。

『女王』に率いられたフィンドたちは、並の個体の数倍激しく動き、数倍多くの人を殺した。

どうやって調べたのか知らないけど、この時のフィンドたちには一般的なフィンドが受ける精神的強制よりもはるかに強い負荷がかかっていたらしい。

フィンドはフィンド化する前の人格を保ち続けるって話はないよな？

フィンドに成り果てた人間は灰の毒が脳に作用して、他の人間

を殺して食らうことを強制される。元の人格を残したままなのに、
だ。

拒絶すれば猛烈な精神的拷問が加えられ、これは到底耐えられる
ものじゃないのだそうだ。

余りにも苦しくて、どうしようもなく、フィードたちは苦しみ
から逃れるために多くの人を殺した。そうせざるを得なくなるほど
の苦痛というのはいったいどれほどのものだろうか。

殺人を拒めない苦痛と、善良な意識が残ったまま自らの手で人を
殺す自責の念がもはや物理的な爆弾のレベルにまで達し、耐え切れ
なくなつて肉体が内側から破裂する個体さえいたという。

さもなければ護法軍の硬化靈薬フレッシュトを浴びてミンチにな
ることであろうやく解放された。

苦しみを感じないようにしてやらない限り苦しみ続ける。発症後
は回復の可能性はゼロ。

苦痛を取り除く唯一の手段は『解放』してやるしかない。

つまり、そういうことだ。

フィードたちの勢いに対し護法軍もまた猛反攻した。

大坑道入口前は両者の血が混じりあつた血だまりがいくつもでき
て、死体が転がったまま、粘性^{エリクシール・ナバーム}焼夷靈薬によつて焼きつくされた。

三日三晩が経ち、なおも攻撃の手を緩めない『女王』率いるフィ

ーンドを抑えきれず、護法軍は大坑道内部への撤退を余儀なくされた。護法軍兵士と、地下都市からの義勇軍の遺体の多くは回収されず、フィーンドの餌になるか、死体に釣られたフィーンドを狙撃するための餌に使われた。

そうするしかなかった　らしい。

い。　どれほど凄惨な状況だったのか、俺には想像することしかできない。

戦いはさらに数日続き、二枚目の防御陣まで食い破られ、もはや地下都市内部まで乗り込まれるのが時間の問題という状況にまで陥った。

護法軍の損耗は激しく、生き残った兵士たちも疲弊しきっていた。死力を尽くしてもなお足りず、戦いに加わるために賦活系霊薬が用法を守られることなく使われて、空きパックが落ち葉みたいに坑道の床を覆ったという。

遠隔通信魔法によって援軍が見込めないことが判明し、いよいよ全滅覚悟の最終局面が始まるうとしていたときに、地下都市イレイカで魔法使いたちの指揮をとっていたトゥルーマイジが前線に立った。

残された最後のトゥルーマイジたちの中で、そのひとは秘石の採掘と加工を管理のために大坑道に常駐していたんだ。

トゥルーマイジは絶対に矢面に立たせてはいけない　というのが護法軍の鉄則だった。わかるだろう？　ロウソクの数はもうないんだ。一本吹き消されたら二度と取り戻せない。

制止の合間を縫って姿を表したトゥルーメイジは、『女王』を大追儼魔法で遙か彼方へ追放した。

統率者が消え、それによって一気に活動の弱まったフィンドを、護法軍が最後の力で狩り尽くした。

フィンドたちは全滅し、事態はようやく沈静化した。

しかしその代償はあまりにも大きく、取り返しは付かない。

前線に姿を晒したトゥルーメイジはその身を狙われ、『女王』を吹き飛ばすのと引き換えにフィンドに襲われたんだ。

遺体は見つからなかったそうだ。

見つからなかったってというのは、つまり何とというか。

食われ……いや、どうだろうな。わからない。

やめておこう、わざわざそんなことを言う必要はない。

とにかく、そういうことになった。

これが俺の知る限りの大坑道籠城戦の顛末だ。

*

『フィンドの女王』は、スボゥン個体として人間の前に姿を表した最初の『グレイIIグーの落とし子』だった。

グレイ「グーって何だ？

誰かが『灰に覆われた大地と水と空気そのもの』だと言った。

灰が生存不能領域に地獄の命を吹き込んだ、と言う人もいる。

その命が、人間の生存領域を最後のひとかけらまで飲み込もうと
しているのだと。

人間の生きていける場所に人間が居るように、人間の生きていけ
ない場所に人間ではない『何か』が住み着いてしまった。

どうやら彼らはもうその場に定住して、出て行く気はない。

それがグレイ「グー」だ。

『落とし子』は、灰に染まってもう人間には立ち入ることのできな
い場所からの来訪者だ。

やつらは人間に直接戦争を仕掛けるところまで来てしまった。

滅びていく時代を後戻りするタイミングはとっくに過ぎていたが、
もう立ち止まることさえ許されなくなるだろう。

地上の大半はすでに灰に埋もれている。

そこはもうグレイ「グー」のもので、これからはもっとそうなる。

何かが切り替わるのを、俺は感じていた。

これから何が起るのか何てわからないが、ひとつだけ確かなことがある。

何があっても、悪い方にしか転がらないということだ。

25 死にゆく世界に、我と孤独のみ

塔の麓の街まで戻れたのはそれからしばらく経ってからのことだ。

街道は300人の狂人兵団との戦闘が終わってから一時的に封鎖され、それが解けてからも護法軍の巡回警備に相当人員が割かれているのが素人目にも分かった。

襲撃で手痛い損害を受けたところに街道の警備まで駆りだされたら、兵士の負担は増すばかりだろう。

俺自身も含めてみんなそれぞれ大変なのはわかっているけど、護法軍の軍人は特に厳しい状況が続いている。

慢性的な人員不足の中で、軍人たちは命を捧げても法と秩序を守りぬく誓いを立てている。内心はどうあれ、少なくとも表向きには音を上げることさえ自らに禁じているくらいだ。

だから時々見ていられないような場面に出くわすこともある。

みんな疲れている。灰をきれいに落としてようやく眠れても、平和な世界で目が覚めるわけじゃないからな。

*

塔の麓の街に着くと、通用門の破壊跡はすでに足場が組まれて再建が始まっていた。

燃え落ちた建物も多いが、思ったより被害は小さいように思えた。

ただこれは俺のイメージの問題で、この時思い描いていたのは空襲を受けて焼け野原になった都市の様子だった。魔法の力を含めても人間同士の戦闘だったんだ。航空爆撃と一緒にしてもしょうがない。

俺が住処に使っていた古い貸し部屋は戦火を免れていた。

燃えてしまっても構わないものしか置いていないただの寢床だが、それでも自由にマスクを外せてくつろげるのはいいことだ。

3年前に身に着けていたものはもう何も残っていない。

制服は傷みが激しすぎて捨てた。財布とか小物は役に立たないから全部売っぱらった。一番高く売れたのはiPhoneだった。

預かっていた紙切れも ええと、誰から預かったんだっけ？

青野か。佐久間と付き合ってた女。それも渡したから、もう本当に何も残ってない。

俺がこことは違う世界から突然転移してきた人間であることを証明するものは全部なくなった。知っている人間も もう誰も生き残っていないだろう。

知っているのは俺だけ。

俺自身の体、記憶の中だけだ。

*

気が重い中、俺に御者としての働き口を与えてくれた雇い主に会いにいった。

「イリエ……！」

俺の顔を見るなり、雇い主はそれだけ言って口を引き結んだ。

雇い主は、俺が行き倒れ寸前に拾ってくれた命の恩人でもある。

引き換えに散々タダ働きをさせられたし、無口なのでウロコ馬の世話でヘタをうったりすると言葉ではなく蹴りが飛んでくるようなジジイだったが、そのおかげでなんとか生きてこれた。

いつも無口なので何を考えているのかよくわからないが、このとき何を言いたかったのかはわかる気がした。

たぶん俺と同じで、お互いまだ生きていてよかったって、そんなところだろう。

*

その夜は、もう何度も飲めないっていつてるのに無理やり酒を飲まされて、せつかく出してくれた代用じゃないシマウシのベーコンが消化される前に体から出て行った。

飲めないけど、つきあうしかなかった。

狂人兵団の襲撃に巻き込まれ、娘夫婦が殺されたのだそうだ。

まだ幼い孫も死んだらしいが、言葉を濁していた。

俺は何となく言いたいことがわかってしまった。

その子、たぶんフィンドになったんだ。

*

自分の寢床に戻って、やっぱりこの街でまた御者の仕事を続けようと思った。

妙な話だが、その途端にひどく億劫に感じた。

遊んで暮らせる余裕がないなんて百も承知だ。でも、護法軍から依頼を受けてからの短い間に大きなショックが続いて、自分で思っていたよりも嫌気が差していたらしい。

御者の仕事というか、この世界そのものに。

気を抜けば死ぬし気を抜かなくても少しずつ死んでいく環境だ。好きになれるわけがない。

でも好き嫌いはさておき、こっちの人間のひとりとして生活することに支障がなくなるくらいに適応している。3年間。その結果として俺だけが生き残った。

俺しか適応できなかった。

俺たちはあの日からずっと異世界から来た異物に過ぎない。

時代が違えばもう少しはマシだっただろう。

でも自分で選べる余地なんてなかったし、まあ、それはもう何を言ってもしょうがない。

言いたいのは、俺たちは結局のところな異世界人で、当然俺もそのひとりで、日本から持ち込んだモノを何もかも処分してもやっぱり俺は異世界の異物なんだってことだ。

散々ためらった挙句、俺は安っぽい棚の上に茶色い革靴を載せた。学校指定の靴の、片方だけ。

置いたはいいが、置いたそばから後悔の念が湧いた。

直視するのに物凄く抵抗がある。捨ててこなかった自分が悪い。元の世界のものは全部なくしたはずなのに、何でまた拾ってきてしまったんだろう。

俺はこの靴の持ち主のことを思い出そうとしたが、もうはっきりと顔のイメージが湧いてこなかった。

少し好きだったはずなのにな。

残ったのは靴の片方だけ。まるで灰シンデレラかぶり姫だ。

残念ながら靴の持ち主は、お姫様どころか山積みされた死体のひとつになって、今も灰をかぶっている。

26 決定論的ハンドリング

魔法使いの頂点であるトゥルーメイジは、もう世界に数人しか残っていないという。

数人っていうけど実際に何人なのかというと、実ははっきりしていない。

一般市民には明かされていないからだ。

魔法使いたちや護法軍の中でも相当位の高い立場でないと知らないはずだ。

名前も公開されていない。

『真の名を授かった導師』トゥルーメイジは文字通り神から名前を授かる高みまで昇った魔法使いだという。神聖なものは簡単に明かされない。

姿を現すことすら極めて稀で、物資の運搬に何度も魔法の塔を訪れた俺も実物を見たことがない。

日本の有名な寺で何年かに一度ご開帳される仏像とか、そういうのがあるだろう？ もったいぶるから尊さが増すっていうのはどこでも同じだ。もっとも、魔法が実在するこの世界では少し意味合いは違うんだらうけど。

俺だけじゃなくこの世界のほとんどの人が知っているのは、トゥルーメイジは世界をその力で何とか支えてくれる存在だということ

だけだ。

その柱のひとりが大坑道で死んだという。

あと何人残っているんだろう。最後の魔法の塔に『数人』いるという話だから、ふたり以上はいるはずだ。

逆に言えば最悪の場合もうふたりしかいないということになる。世界を支える柱が2本だけってのは心もとない。

魔法の存在しない世界から来た異世界人であるせいか、俺には根本的な部分で魔法の働きを理解できない。だから理由は説明できないけどもう新しいトウルーマイジが生まれることはない。魔法の源みたいなものが減っているせいだろうか。

地球でたとえるなら……ちょっと難しいな。核戦争でアメリカが壊滅して、選挙制度が崩壊して二度と大統領が選出されることがなくなるって感じだろうか。

そんなトウルーマイジが失われると何が起るかというと、人類に残された力 魔法を含めたあらゆる意味での力がぐりと落ちるのだそうだ。

具体的には魔法によるインフラが機能しなくなる。浄水、防毒、代用食料の生産。そうなると生活レベルが維持できなくなる。もう十分すぎるほど苦しいのに、さらに落ちる。

目に見える形だけじゃない。

トウルーマイジはいつの時代も貴人中の貴人で、魔法によって成

り立つこの世界では人類そのものの象徴だ。生き残った人間にとって最後の希望で、心を支える柱でもある。

その柱の一本が失われたらどうなるか。わかるだろう？ 希望を失ったら心がすさむ。窒息寸前の社会でぎりぎり残っていた籠たがが外れる。

モラルを失いクズに成り下がる人間が増える。

それを取り締まらなければならぬ護法軍の負担はさらに増えて法と秩序を守る誓いを立てた護法軍から脱落する人間が出てくるだろう。

ドミノ倒しだ。

今はまだ何も変わっていない。

でも空気が変わったことは俺にもわかる。

いずれこの緊張が限界に達するのは目に見えているのに、みんな気づかないふりをしている。

そんな風を感じられる。

そう感じながら、俺もまた気づかないふりをしていた。

*

その頃、俺の全くあずかり知らないところで運命を左右するできごとが起こっていた。

手綱を握ることもできないんじゃない、俺に進む方向を決めることなんてできない。大きな力に引かれるまま、どこかに連れて行かれるだろう。

そして、そうなった。

*

本当に珍しいことなんだけど、俺のところに訪問者がやってきた。

護法軍士官のラルコだった。

覚えてるかどうかわからないから一応説明しておく。声が大きく、顔が長くて、大げさに走り回るそいつは護法軍に所属する軍人で、例のルシウムを通じて知り合った男だ。

その日も顔を見せるより早く俺を呼ぶ大声が聞こえてきて、そこからしばらく大声をまき散らし続け、ようやく俺のところを駆け込んできた。

「なんなんですかラルコさん？ そんなデカい声で人の名前を叫ばないで欲しいんですけど」

正直なところ、ラルコの声が聞こえてきた時は不安で胸が苦しくなったのだが、到着まで時間がかかったせいである程度心構えできた。

ラルコは息を切らせながら、一緒に来てくれ　と言った。

「アベリーまでだ。足はこっちで用意した。悪いけど頼むよイリエさん」

「ええと、何言ってるんすか？ 俺、ここに帰ってまだ3日ぐらいしか経ってないんですよ？」

「僕もまさかこんなに早く再会するとは思ってもみなかったよ」

慌てて自分の目的の話ばかり何度も繰り返すラルコに俺は苛立った。

旧アベリー市まで俺を呼び戻すため、俺がああ街を出てから数日もあけないであとを追ってきたらしい。それはわかったが、何のためにもわざわざ戻らないといけないのか聞こうとしても一向に要領を得ない。

それに、はっきり言って旧アベリー市になんて戻る気はない。

狂人兵団に侵攻されたこともあって、余計にこの塔の麓の街から離れたくなかった。少し休んで精神的に落ち着いてから、できるだけ復旧の役に立とうなどと我ながら殊勝なことを考えていたのだ。

その矢先に一緒に来いなんて言われて、しかも必要以上に騒がしくされて、気分がいいわけがない。このポンコツ野郎が。

「大姉ルシウムからの指示なんだ。信用できる運び屋を大至急連れて来るように、と。それでイリエさんに」

「信用……？ いや勘弁して下さいよ、護法軍からの依頼はしばらく受ける気ないすから」

そう答えながら、実のところ俺は興味を惹かれていた。信用。大至急。つまり、何か重大なことが起こったか、何か重大なものを運ばないといけない状況にあるってことだ。

「ラルコさん、仕事の話なら最低でも依頼料と目的地を教えてください。それに積み荷が何かも」

カネと目的地は本当だ。でも積み荷の中身は普通ならこちらからは詮索しない。食料だから急いでくれ　　というような依頼からの自己申告の方が重要だ。

時代が時代だからこつちも選り好みをしていられない。以前に一度だけ中身を知らされず霊枢車代わりに使われたことがあって、目的地に着く前に棺から体液が漏れだした時にはさすがに後悔したが要するにかまをかけたんだ。このいかにも迂闊そうな男ならあっさり喋りそうだったから。

「うーん、すまんが現地でないと教えられないんだ。カネについては十分な額を保証すると聞かされている」

「荷物の中身もですか？」

「中身というか……いや、それもこの場では」

「じゃあせめて重さぐらいは教えて下さいよ。この間の長い箱、やたら重いせいで俺の馬も……」

俺は一瞬言葉に詰まった。もういないんだった。

「……馬の負担になるくらいだったら、やっぱりお断りします」

「ああ、それは気にしなくて大丈夫だ。重さなんてあって無いようなものだから安心してくれ」

あつて無いようなもの？ 妙に気になった。依頼を受けるかどうかは別として、珍しく好奇心に背中を押されているのを感じる。

おいおい変なものに首を突っ込むなよ といつもの俺が警告してくる。

だが気になる。

いったい俺に何を運ばせるつもりなんだ？

27 アーチエネミー

魔法のある異世界といっても物理法則は基本的に同じはずだ。

だから、アシカとアザラシが似ているように、同じ環境に適応しようとするれば同じような形になる。

こっちの世界の気温の低い海岸にもアシカみたいな姿形の動物はいる。ワタラズという鳥の仲間で、翼から変化したヒレと、短いクチバシの生えた丸っこい頭はシルエットだけならアシカそのままだ。

とはいえやっぱり異世界なので、地球とは似ても似つかない生き物もいる。

肺呼吸する巨大昆虫の剛虫類とか、自力歩行する陸珊瑚とか、海棲類人鯨とか、そういうやつ。

俺の馬車を引いていたウロコ馬はその中間くらいだろうか。足を長くして車高を上げたワニというか、ウロコのある爬虫類的なテクスチャなんだけど全体のフォルムは馬に似ている。ついでにいうと卵生の恒温動物だ。

この世界でいわゆる馬といえは、かつてはオオウマという割とそのままの馬だった。

前にも説明したかな。オオウマは灰の毒に特別弱く、ばたばた死にすぎて数が揃えられなくなった。陸運がどうにもならなくなって、比較的灰に強いウロコ馬が重宝されるようになったという経緯があ

る。

その流れでもう一種、荷駄として活躍を期待された動物がいた。

陸王サイは、一言でいうと馬の形をしたサイだ。
リックオウ

シワの入った分厚い鎧みたいな皮膚、足はごつく横幅があり、見るからに力強い。無骨なユニコーンのようにも見える。ただしその角はサイそのものだ。

陸王サイは本来軍事目的に使われてきたそうだ。要するに騎馬だ。背中に騎兵が乗って突撃するあれだ。

戦場においては天性の力を発揮する。気性が荒く、危険に飛び込むことを躊躇しない。自らすすんで兵を踏みつけ角を叩きつけようとするくらいだという。生まれつきの武闘派だ。

そんな性格をしているからだろうか、馬車を引くという行為に難色を示す。つまらん荷車なんぞ引いていられるか　とでも言わんばかりに。

ウロコ馬はかなりおおらかだ。おとなしい性格で人間の指示にはとりあえず従ってくれる。だから運び屋には重宝されている。一方の陸王サイは脚力と耐久性に恵まれていながら、使い勝手が悪く敬遠されている。

灰の降る野外を走る馬車には危険がつきまとう。

必要なのは御者のいうことに素直に従ってくれて、しかも我慢強い荷駄だ。短気を起こされて何かアクシデントが発生したら荷物を

届けられないし、最悪の場合は命に関わる。

じゃあ本来の軍馬としての用途ではどうか？

需要はもう護法軍にしかない。他に軍がないからだ。

その護法軍でも、陸王サイの存在は持て余している。しかもずいぶん前から。

灰が降るより前、そして降りだした直後の動乱期、まだ人間同士の武力衝突が起きていた頃は戦場の花型だったそうだ。

強力な魔法支援を何重にも張り巡らせ、超加速重突撃で敵陣を遮蔽スクリーンごとを粉碎するという、よくわからないが聞いただけで恐ろしい戦法に使われていたらしい。

でも現在の護法軍に必要なのは、各地に現れる灰賊やフィードのような小集団の各個撃破と、あらゆる場面で不足している物資を速やかに行き渡らせるための機動力だ。怒れる陸王サイの突進が必要とされるような『敵陣』は、もっていない。

人も物も余裕のない時代で、戦闘で運用することが難しく、体格があるぶん大飯ぐらいで、しかも力がものすごいから暴れると手を付けられない。

戦場の花型どころか危険動物扱いになってしまった彼らが、毒の灰の降る崖つぶちの世界でどう扱われるか。わかるだろう？ 『かわいそうなゾウ』だ。

とはいえ、ただでさえ死、死、死の世界だ。せつかく地獄の中で

命をつないできたというのに、人間の手で殺していいのか。これまで人間の友だった動物を殺してまで生きるのは、ある意味人間を殺して生きるより辛い。

護法軍もギリギリまで耐えた。耐えたが限界というものもある。

そこに転機がきた。例のウロコ馬の大量毒殺事件だ。

ウロコ馬をあっさり殺せる霊薬がこの世に存在しているという事実は、ウロコ馬が荷駄として使えなくなる可能性につながる。旧アベリー市で起こった時みたいに、一晩で皆殺しにされたらあらゆる物資の輸送がストップする。そしてその日はいきなりやってくるかもしれない……。

そうなる前に、荷駄を務める動物を用意しなければならぬ。数種類も限られる中、無駄飯食らい扱いになっている陸王サイの転用をもう一度試してみよう　と誰かが考えた。

背に腹は代えられないというやつだ。荷駄として使い物になれば、処分する必要もなくなるわけで、そうする以外に陸王サイが突き進む道はない。

それは大変な話だな、と俺は他人ごとながら心配になった。自分が御者として慣れるまでの日々を思い出す。

いままで放棄されてきたところに調教を行うのは、ただでさえ人手が足りない護法軍には大きな負担になるだろう。民間に任せるかもしれない。

少し話が長くなったが、何となく想像はつくだろうか？

全く知らないところで、その負担は俺に向かって突進してこようとしていた。

*

「遅い！」

旧アベリー市の護法軍駐屯地に到着した俺に、ルシウムは開口一番怒声を浴びせてきた。

俺は腹をたてるのも忘れて口を半開きにして、隣のラルコの様子を見た。直立不動。緊張して、俺とルシウムの間を取り持つくらいの気を利かせることもしやがらない。

「十日以上も何をやっていたんだ、君がついていながら！」

君、とはどっちのことだ？ あんたのボンクラ部下のラルコか？ それともボンクラ部下のお守りをしてやった俺か？

やっぱり来るんじゃないかった。ロシアの女軍人みたいな彼女の顔を見て、俺はうんざりした。ベリーシヨートの金髪頭はできれば見たくなかった。ラルコの話に乗ってまたこの旧アベリー市に戻ってきてしまった時点である程度覚悟はしていたものの、いきなり怒鳴りつけられるいわれはない。

だが俺はつきつめると小心者なので、こっちは長旅で疲れているのに茶のひとも出てこないんですか などと皮肉な台詞を思いついても、口には出せない。

「想定よりかなり時間を超過している。すまないが一緒に来てくれイリエ、歩きながら説明する。姉妹バウリ、同行しなさい。兄弟ラルコは詰め所にて待機」

手早く指示を出し、ルシウムは無言を言わず詰め所を出て行った。実際俺もラルコも、ついでに新しく借りたウロコ馬も、強行軍で疲れているのだがそんなことお構いなした。

「イリエさん、どうぞこちらへ」

バウリと呼ばれた女性士官が俺の横に来て、一礼した。短く一直線に切りそろえた黒い前髪、小柄でまだ若い。軍人と言うより日本でいうところのサブカル女っぽい印象だ。どちらにせよラルコよりは有能そうな雰囲気をもっていた。

俺はなし崩し的にバウリに従った。

俺はいつでもなし崩し的だ。

*

人類最後の希望、トゥルーマイジの死が与える影響は、俺の想像より早く現れていた。

旧アベリー市から荷物を積み出した馬車が、突然消息を絶った。

灰賊に襲われたのだ　と当初は思われていた。

実際には、依頼を受けた運び屋が護衛のため同行していた護法軍兵士と結託し、荷物を犯罪組織に横流ししていたらしい。

旧アベリーに駐留する護法軍は騒然となった。

最悪の時代にあっても、法と秩序に命を捧げると誓うのが護法軍だ。上から下までその覚悟を決めた人間だけが所属を許される。いくら末端の兵士だとしても、はした金目当てに誓いを捨てるなどあってはならない。それが護法軍の立場で、だから信用を得ている。

それがいともたやすく、しかも駐屯地のある街から大して離れていない場所で行われたわけだ。

ケチくさい横流しに関わった連中は馬鹿みたいにあっさり捕縛されて、自白霊薬とペンチを用いた速やかな尋問のあと処分された。

本当にただのカネ目当てだった。黒幕も何も無い。ほとんどその場で思いついたような短絡的犯行ってやつだ。

「護法軍だけでは物資の輸送をまかないきれないのは知つてのとおり。だが先日毒殺事件につづいて二ヶ所同時に起こった大規模な戦闘だ。無理を押ししても物資を回さなければならぬのだが……」

ルシウムは振り返ることなく大股で歩き、道幅に対して飽和気味の雑踏を物ともせず進んでいく。

「軍の人間を同行させて民間の業者に任せた矢先にこれだ。まったく、なんでこんなことになる」

心底忌々しそうに吐き捨てるルシウム声は、怒りというより強い落胆を感じさせた。

もう十分に死んで、あらゆるものが失われ、誰もが傷を負った。だからせめて生き残った人間は手を取り合って生きていこう。そういう空気は多かれ少なかれ共有されている。

悪意は外にある、と考える人たちは多い。悪意は灰賊のような人間性を捨てて社会から出ていったようなクズが持っているものであって、人間社会の内側にはない。全くないのは無理だとしても少しははずだ、という考え方だ。

俺はこのことについて何も言えない。

考えが甘すぎるとか、綺麗ごとだとか、そんな風に思うところもある。

でもそれはこの世界の人間の問題だ。

魔法が存在して、神様から言葉が違っても意志を通じ合える祝福を与えられて、地球とはぜんぜん違う環境に置かれた人間が終焉に向かう世界でどんな考えを持ち、行動するか。それこそ『外』の存在である俺は、根本的な部分で部外者のままだ。

口を挟むことじゃない。

だけど、護法軍だけはモラルを保ち続けてくれるはずだ。という期待は理解できる。俺自身もその気持ちはある。口先だけの正義じゃなく、本当に命をかけていると知っているからだ。

ルシウムの落胆はこの世界全体の落胆だろう。

心の支えを失うと人間はすさむ。

わかってはいたが、それでもやっぱり早すぎじゃないかと思った。

トゥルーマイジの死からまだひと月も経っていないのにこれだ。

この先どうなってしまっただ？

28 一角獣はかく語りき

必要なのは信用できる運び屋だ。そう言っただけでルシウムは真正面から俺を見た。目つきが怖い。

ウロコ馬大量毒殺事件の影響は大きかった。

旧アベリー市の運送業者は商売の要である持ち馬が軒並み死んでしまっただけで、物資の運搬を引き受けるどころではない。

運び屋を続けるか否かを迫られて、結構な割合で撤退を決めるどころも出てきたそうだ。ウロコ馬がいくら毒の灰に強いといっても簡単に替えの効くものではない。

だから普段使っていない業者を使わざるを得なかったわけだが、その途端に積み荷の横流し未遂が起こった。

荷物を持っていかれることだけは食い止めたものの、ひたすら厳しくなる一方の環境で貴重な物資を失うことは、誰かの生死に直結する問題になる。

単なる出来心の犯罪で補給線を乱され、それを防ぐために護法軍の人員を割くようなことになったら、運送業者に委託する意味がない。本末転倒だ。

「そこで君の出番というわけだ、イリエ」

ルシウムは俺の意向など関係なく言い切った。こっちが仕事を受

けることを前提にしている態度だった。

俺は信用されているらしい。

短い期間馬車に同乗しただけで俺の何を信用したのかわからないが、護法軍の急募人材リストには俺の名前が記載されていて、しかもかなり順位が上の方だという。

悪い気はしない。

自分では疑り深い性格のつもりなのだが、実際には他人を疑うのがどうも苦手らしい。信用に足ると目の前で言われたら、裏があるんじゃないかと思うと同時にあっさりその評価に乗ってしまう。

「わざわざここまで来たんだから話は聞きます。まあ、報酬次第ですけど」

正式な仕事としてならやってもいい、という反応を取り繕った。そうしないと格好がつかない。表面上のことだけではなく、単なる便利屋と思われるのは避けておきたかった。

軍との関わり方は気を使う。信用される、仕事を回されるのは構わない。でも今後とも延々と補給路に組み込まれるようなことになったら？ 護法軍専属にされてしまったら、逃げ時を失ってしまう。

「姉妹バウリ、契約書を彼に」

「はい、大姉ルシウム」

女士官バウリはブリーフケースからウィジャ・メモリと白紙の出

力用紙を取り出し、印字した。

紙の上に乗った小さなコマが手を触れないのに動き出し、縦横無尽に踊るとそこには一枚の契約書が出来上がっていた。

ウイジャ・メモリはウイジャコックリさん盤の応用というかなんというか、保存された音声もしくは文章を再生できる小さな魔法のコピー複合機だ。

コックリさんで指が勝手に動いて文字をなぞっていく仕組みを魔法で再現して、目に見えない力で文字を記録し、再生する。

書き上がった書類の支払い金額欄は、予想より一桁多かった。

何かの間違いだろう。いくら払いのいい護法軍といっても、年間契約でもない一回の運送でこの額は法外すぎる。こんなカネを出すくらいなら民間業者を使うより自前でやった方がはるかにマシだ。

「この金額には運賃だけでなく特別な報酬が含まれています」

疑問を口にするより早くバウリが答えた。声も動作もきびきびとしていて、聞いているこっちまで姿勢が正されそうだ。

「今回の依頼については保安上の問題で、わたくしたちが用意した荷駄と馬車を使っていたできます。しかしながら調練に不十分なところがありますので、その世話と仕上げの委託も合わせての額とご理解ください」

「保安上、ってことは」

「簡単に申し上げますと、今回の積み荷は先日横流しに巻き込まれそうになった物資なのです。突発的な犯行であるとわたくしたちも判断しておりますが、万が一にも特定の物資を狙ったものである可能性を考慮し、馬車についてもより安全性の高いものを用意した、とお考え下さい」

わかりやすい説明で、疑問の余地はない。契約書の内容とも一致している。

調練が不十分というのも、毒殺事件の影響で荷を引くのに慣れていない馬を回すしかなかったのだろう。この点はちよつと不安だ。俺が連れてきたルマンド という名前の若いウロコ馬 を使えば問題ない気がした。

「荷物を運ぶのと同程度、わたくしたちは荷駄の調練も重視しております。即戦力は常に必要ですので」

パウリのムダのない物言いは俺の不安を次々と潰していく。よく頭が回るようだ。そのくせ地味で小柄で軍人っぽい感じがなく、俺は何だかこのパウリという女士官本人に興味が湧いてきてしまった。

「では契約書に掌紋を^{パーム}」

まあ、俺が間抜けだったと言えはそこまでなんだけど、あっさり掌紋を契約書に添えてしまった俺は、契約書の重要な部分を見落としていた。

この世界の契約書というのは法律が機能していなくてももしっかり履行の義務が生じる。魔法によって契約内容を違反できないよう強

制されるからだ。

だから、馬車が用意された馬屋に案内されて小便をちびりそうになっても、もう契約を破棄することができなかった。

そこにいたのはオオウマでもウロコ馬でもなく、足の長さだけで俺の身長を超えている巨獣だった。

「軍馬から転用された陸王サイリックオウです」

バウリの声が肩越しから聞こえた。

「わたくしたちに必要なのは即戦力です。契約どおり、荷駄として使用可能な状態まで仕上げていただけを期待しております」

つまり、こういうことだ。

俺は早くも逃げ時を見失ってしまった。

*

訓練が始まった。

肋骨にヒビが入った程度では回復魔法の必要はないと判断され、塗布式の霊薬と簡易ギプスのみで処置された。

*

陸王サイがこの世界でどういう扱われ方をしているのかは前に説明したと思う。

時代遅れの武闘派。誇り高いあぶれ者。

灰が降りだしてから実質的に役目を終え、それから数十年。護法軍の、いわば温情だけで生かされてきた不遇を陸の王者がどんな風に感じていたのだろうか。

世界が死んでいく。灰に埋もれて、存分に駆け抜ける土地さえも失われる。強大な『敵』は、世界中に降り積もる灰であり、灰を突進で倒すことはできない。戦うことの意味、戦える場所、己を必要とする声。そういうものが全部なくなってしまった。

護法軍と一緒に戦うことに恋い焦がれていたに違いない。

でも、陸王サイたちは『外』に置かれた。

蚊帳の外、戦場の外、一直線に駆け抜ける輝かしい道の外。

動物に滅び行く世界を憂う知能があるかどうかは知らない。でも人間が何かと戦っていることを察することは、たぶんできる。それなのにその何かとの戦いに参加できないのであれば……。

俺は3年間御者をやって、ウロコ馬と向き合って、無言の会話をしてきた。

それがたとえ俺の一方的な思い込みだとしても、心が通じ合う気がした。あいつは無言で、ときどき鳴く時もヤギとヒキガエルの混じったような汚い声だったけど、何となく分かった。変な言い方になるけど、この世界において魔法の力で意思疎通ができる人間より、話を通じない分話を通じるような気がした。

だから、トラックのタイヤみたいな膝蹴りで脳震盪を起こしても俺は何となく陸王サイのことがわかるような気がした。

元々外からやってきた俺。

花形から外に追いやられた陸王サイ。

外という言葉の意味合いはぜんぜん違うんだけど、俺にはこいつの気持ちがあったし、こいつは どうだろうな。思い込みかもしれない。どっちも思い込みかもしれない。

それでも陸王サイが馬場にひっくり返って意識朦朧としていた俺の頭を踏み潰すことはなかったし、俺の方からも強引なアプローチをしなくて済むようになった。

契約書でばっちり縛られているとはいえ、陸王サイ相手に死ぬ気で調練しようとしたことは自分でも意外だった。

プロ意識だとか、やけになったとか、そういうこととは違うと思う。

草食動物とは思えない鬼のような目と、人を殺せるサイズの巨体を見た時には、恥も外聞も契約もなく勘弁してくれとルシウムに泣きつこうと思った。

だけどころも感じた。

生きてるだけで死ぬ世界で生きてきっていると、本当にこれはいよいよのピンチだというのがわかるようになってくる。どうにもな

らない死の予感、とでもいうものが。

陸王サイの前に立っていても、『それ』は来なかった。

だから俺は向こうのことが何となくわかってきて、向こうも俺のことをわかってくるのが伝わって、ああこれはもう大丈夫だなと思っただ。

その後、どうやら俺は気を失っただらしい。

29 口にするなかれ、その名は『禁断』

目を覚ましたのは療養所のベッドの上だった。

鎖骨の複雑骨折と全身打撲と複数の裂傷で全治2ヶ月のところを
霊薬と回復魔法の併用で2日で急速治療され、反動で強烈な不眠症
にしばらく悩まされることになった。

*

「驚いたな。こんなに早く仕上がるとは」

ルシウムは腕組みをして、満足気に馬車の様子を眺めた。

馬というよりはゾウみたいにデカイ陸王。そこに特大の頸木をつ
けて、引かせるのはこれまたいかにも大きく頑丈そうな軍用荷馬車。

その御者台に座る俺は、不眠のせいで目の見開きがちょっと怪し
くなっている。

「予見士の見立て通りでしたね、大姉ルシウム」

「私の勤が彼らを信用しろと言っていたのさ……」

バウリとルシウムの会話が耳に入るが上滑りして全然頭に入つて
こない。カフェインを摂り過ぎたときのむやみな興奮状態に似てい
る。

「では、例の荷物を？」

「ああ、問題ないだろう。いまラルコに取りに行かせている。予定を大幅に超えてしまったが何とかかなりそうだ」

荷物。

俺は御者台の上ではっと背筋を伸ばした。そうだ。そもそも何に興味を引かれたかというと、俺を連れ戻してまで運ぼうとしたモノというのがいったい何なのかということだ。

荷駄として使うには危険なサイを一から仕込んででも運ぶというのはただごとじゃない。

契約書で魔法的に縛られているから質問も他言もできない仕組みになっているから、せめて積み込まれる前に見ておきたい。いわゆる乗りかかった船ってやつだ。違うか。毒食らわば皿まで？ いや、なんだろうな。うまく言えない。

どうも目だけは冴えて、頭が全然回っていないようだ。その代わり、余計なことに首を突っ込むなと戒める方の自分は眠っているらしく、俺は単なる興味本位の浮かれたガキみたいになっていた。

しばらくして、ラルコともうひとりの護法軍の男が箱を運んできた。

長くて頑丈そうな箱。中身は分からないがやたら重いもので……。

「その箱って、あの時の？」

俺は御者台から身を乗り出し、気になってそこから飛び降りた。ラルコの運んできた箱は、確かにあのとき最後の魔法の塔で護法軍に依頼されたものだった。

受渡した後の積み荷なんて普段なら気にすることもないけど、こればかりは事情が異なる。何が入っているのか知らないが、これ見よがしな錠でがっちり蓋を閉じられているのだから、護法軍にとって重要な物資だったのだろう。

これを運ぶために俺は全く予定外に旧アベリー市まで行くことになって、拳銃相棒のウロコ馬を失うことになった。複雑な気分だった。別にこの箱が何かを殺したわけではないし、何もかも護法軍の責任だなんて言うつもりはないのだが……。

「大姉ルシウム、これはもう荷台に入れてよろしいので？」

ラルコの質問にはバウリが代わりに答え、俺の目の前であっさりと荷台に押し込まれた。

鉄枠がはまつた屋根付き密閉型の馬車はちよつとしたトラックのコンテナのようだ。わずかな手間で客用の座席を組んだり、逆に座席を収納して全部のスペースを荷物の運搬に使えるようになってい

る。
ずいぶん豪華な造りだが、それはまあいい。

ラルコたちはほとんど何の苦労も見せずに直方体の分厚い箱を積み込んだ。それに車体も沈んでいない。いくら特別製の荷台とはいえ、重みがあるように見えなかった。

そういえば……。

俺はラルコの言葉を思い出した。

『ああ、それは気にしなくて大丈夫だ。重さなんてあって無いようなものだから安心してくれ』

あの顔が長く声の大きい護法軍士官の言った通り、本当に重さがない荷物だということか？ でも、俺が最初に引き受けた時は大人の大人が四人がかりで荷台に乗せて、馬に恨みがましい目で見られるほどだった。

「それは当然だ。今は箱の中身は空っぽだからね」

ルシウムは俺の疑問にあっさり答え、大きな箱の表面をゴツゴツと叩いた。

「空っぽって……だって、中身を横流しされそうになったんでしょ？ それで、まわりまわって俺が呼ばれる羽目に」

「その時も中身は入っていなかったんだよ。価値のあるもの」という意味においては」

周りくどい言い回しに、俺はおもいつきり舌打ちをしてしまった。憤み深い態度の男としてうまくやってきた俺としては、他人の目のあるところで舌打ちするなんていつもならありえない。興奮状態が続いて眠れていないせいだ。感情のスイッチがおかしくなっている。

「少々お行儀が悪いな。まあ、隠し立てするのは逆効果だから君には話しておこう。契約書の縛りもあることだ」

魔法の契約書にはいくつかの『他言無用』が記されていて、そのことは契約が有効なうちはしゃべることができない。

「君に運んで欲しいのはこの箱そのものだ。中身ではない」

「中身の無い……空の箱を？」

「そうだ。初めからそうだ。君が最後の魔法の塔で受け取った時から、必要なのは中身ではなくその箱なんだ」

*

棺桶みたいなその箱は純正魔法創造物で、定められた魔法の暗号入力以外の方法では開かないのだそうだ。

俺が運ばされていたのはただの重りだった。

実際に入っていたのは石とか壊れた武器とか、まあ要するにゴミみたいなものだったらしい。ゴミのために俺は酷いことに巻き込まれたのかと思うと腹が立つどころではない。

だけど、なぜ護法軍がそうしたかについては理にかなっていて、真っ向から怒りをぶつけることはできなかった。

その黒い棺は外から壊すことができない。おそらく今の人類ではトゥルーメイジでさえ不可能だという。魔法文明がまだ勢いを保っていた頃に作られたアーティファクトは品質が桁違いだから、というところらしい。

それほど頑丈なのに、ストリテジック・ストロング・ストレージ戦略級不壊金剛箱『禁断』という名前の魔法の箱はとても軽い。楽に持ち上がる。それこそ中に重しになるようなものが入っていないければ、持ち逃げするのはたやすいのだ。

だからわざわざ数人がかりでないと運べないようにした。本当に重要なのは入れ物の方で、箱自体を盗まれることを阻止しないといけない。蓋をあけることは不可能なのだから、重くて簡単に運べないなら泥棒野郎も諦めて放置するしかないだろう。

放置されれば、後から場所を特定して護法軍が回収すればいい。でも軽いせいで持ち逃げされたら、追跡もぐつと難しくなる。

例えば、馬車で運んでいる最中に灰賊に奪われて、どこか灰に覆われた土地の只中に持ち込まれたとしたら？ その場所にたどり着くだけでも危険性が跳ね上がることになる。

まあ、そういうことだ。

俺が何も知らなければ、単に重い荷物を運んだだけの話で済んでいた。

たまたま偶然が重なって馬が大量死して、その後旧アベリー市に呼び戻されることがなければ、箱のことも箱の中身のことも知らないまま終わっていたことだろう。

ただ、困ったことに俺は知ってしまった。

おまけに運搬についての契約を結んでいる。

そして、早く俺様を走らせるとばかりに睨みつけてくる陸王サイ

を荷駄に仕上げてしまった。

弱ったな。

俺は興味本位で後戻りできないところに首を突っ込んでしまったらしい。

回復魔法の副作用のせいかな？ 興奮状態で判断力が鈍っているせいかもしれない。

でも、そうではないかもしれない。

俺はそうではない方を望んでいるのかもしれない。

30 灰色の大地を駆ける王者

東エーア・メシオン連合王国という国があつて、昔は相当な大国だつたらしいが、地獄が地上に噴きでた後の舵取りに失敗した。

降灰直後の混乱に乗じて版図を広げようと真つ先に戦争を仕掛けて、それどころではないことに気付いた時には何もかも手遅れになつていた。

初めから周辺国と団結していればもう少しマシだつたかもしれないが、今さらそんなことを言つてもしょうがない。

結果として、聞くのも嫌になるくらいの命が失われ、十分な対策を講じられないまま水源も穀倉地帯も穢された。

多くの国民の命が失われた。当時の王侯貴族たちも同じく毒の灰で死んだ。あるいは怒り狂つた国民に吊るされて死んだ。誰がどうやって、という細かい末路はわかつていない。そんなことを振り返っている暇はもう人類には残されていなかったからだ。

現在では、かつての領土の8割ほどは灰に沈んでいて、人間が住むことはできない。灰が降り始めてから最も被害が大きかつた地域だという。もつとも、いまは国境さえ失われているから、大きいも小さいも関係なくどこも似たようなものだ。

絶滅の波という言葉があつて、それは生存可能領域が限界を超えて連鎖的に破綻していく様子を意味している。その最初の大波は灰による大量死とその後の極めて重大な食料不足によつて起こつた。

家畜が死んで、畑の土も汚染されたらどうなるか。答えは簡単、食べるものがなくなる。

魔法による代用食料の生産と、一部のイモ類が毒の影響をほとんど受けないということを見れば、人口減少率はもっと垂直に近くなっていたはずだ。

ちなみに代用食料は食感とカロリーがあるだけで、ビタミンAとかBとかそういった栄養素はほとんど含まれていない。魔法で完全再現するのは難しく、実現するまで待っていたら飢餓を食い止めることはできなかつたらしい。

一方で、汚染に強いナナイモは栄養豊富だけどストレートに不味い。

ジャカルタから入ってきたイモが訛ってジャガイモになったみたいに、ナナイモのナナもどこの地名らしい。

その土地もどこかで灰に埋もれているんじゃないかな。

ともかく、毒を防ぐ農法や飼育法が確立されるまでは酷かつたらしい。息を吸ったら毒で死ぬ、食い物に毒が混じって死ぬ、食い物がなくなつて死ぬ、食い物の奪い合いで死ぬ、食い物にされて死ぬ。

俺もこつちの世界に来てからずいぶん苦痛を味わつたし、目の前で人が死んでいくのも見てきた。十分なほどキツかつた。だけどそれよりもずっと厳しい時代があつたのは間違いない。

そんな環境がしばらく続いて、現在の世界情勢がある。

激減した人口と、灰を防ぐ食料生産が広まってできたわずかな均衡。それが上つ面だけの安定に過ぎないことは誰もが知っている。このまま灰が降り続く限りいつか必ず限界が来る。

だけど大抵の人は自滅を避けようとするし、生き延びて少しでも楽な生活を送りたいと願う。積極的に欲を満たそうとしたり、生きがいを手に入れたいという自由がある。結果として願いが叶わないとしてもそれは別の問題だ。

人類が減びるとしても、笑ったり喜んだりしたらいけないなんて話にはならない。

商売での損得勘定も無くならない。デカい儲け。挑戦と成功。そういうものは存在する。かつての平和な時代なら鼻で笑われるほどのデカさであったとしても。

俺だつてそうだ。護法軍から重大な仕事を任されて、かなりの報酬が約束され、荷駄に転用するのがおそろしく難しい陸王サイを手なずけることができた。充実していたといつてもいい。

俺はこのとき『先』を見ていた。

何かもつと大きなものが得られるチャンスなんじゃないかと、そんなことを思ってしまった。

俺らしくない。いつもなら頭のなかのもうひとりの俺がたしなめていたはずだ。死なない程度に仕事をこなして、そこそこ力ネを貰って、世界の片隅で細々生きていればいい。それ以上を望むと転ぶだけだぞ……。

そのままの生き方を続ける方が正しいと俺は知っている。

死にかけて世界の片隅でいい、できるだけ安全な場所で生きていく方が絶対にいい。

そうするべきだと俺は知っている。

なのに俺は、あやふやなチャンスへと手を伸ばそうとしていた。

後悔することになるぞ。

知ってるよ、そんなこと。

*

目的地は、旧東エアリメシオン連合王国領内のニューステージ市に置かれた護法軍の本拠地。

極光都市と呼ばれていたニューステージは、灰が降りだす以前は聖地とみなされる場所だった。

はるか昔に魔法の塔の一本・縞瑪瑙オニクレスの塔が建立され、それが失われた後も土地そのものに強力な魔法が刻まれて、その名の通りときおり上空に極光オーロラがたなびいていたのだそうだ。

見る影もない廃都同然になった今もなおその力は存在し続けている、それを利用するために護法軍が本拠地を作ったという。

俺は出発前に使い古しの灰合羽や防毒マスクをまるごと買い替え

た。

旧アベリー市からニューステージまでは距離がある。長期間灰にさらされることを考えると、できるだけ信頼できる装備にしておきたかった。荷物を運ぶというよりは登山に近いと思っしてほしい。簡単に後戻りできないし、手落ちがあれば生死に直結する。

他にも細々とした品を買い込んだがいちいち挙げる必要はないだろう。

空の魔法箱と、ついでに護法軍本拠地に運ぶ物資をいくつか、それに護衛のためルシウムとラルゴが同行することになった。

俺ひとりで移動するよりははるかに安全だとわかつてはいるが、正直なところまたこいつらかよ、と思わないでもない。

できればあのバウリという女士官と一緒にほうが良かった。彼女は有能だが事務方なのでそれはかなわなかったが。

ともかく、出発が決まった。

「チャンプ、いよいよ出発だつてよ」

俺は陸王サイの前足にブラシをかけながら話しかけた。チャンプというのは俺のつけた名前だ。

チャンプはものすごい勢いで鼻息を吹き出し、首を傾けて上から睨んできた。いつまでまたせやがる、早く俺様に走らせる。そういう目だった。

軍馬としては無理でも、荷駄として天下を獲らしてやると俺は約束してしまつたから、そうしてやる必要がある。

言葉がなくても意思疎通ができるという神の祝福のせいなのかもしれない。ウロコ馬のときも陸王サイのときも、俺は何となく気持ちがあつた。向こうも俺の言いたいことがわかつている。

気のせいといわれればそこまでだ。だから人前では言わない。でも、俺はそう信じている。

「全て積み込み終わったな？ ではイリエ、出発してくれ」

ルシウムのはっきりとした声が薄曇りの空に響く。

俺はチャンプの長々とした手綱を引いて、馬車を発進させた。

歩幅も足の長さもぜんぜん違うから、ウロコ馬のスピードの比ではない。その分操作は大変だが、それは何とかできそうだ。

半分闇に包まれたような旧アベリー市は早くも小さくなっていく。

もう戻れないかもしれないなと思った。感傷でもなんでもなく、道中で何が起こるか分からないからだ。

反対に、目を離れた際に街の方がまるごとなくなっているかもしれない。実際にそうなる可能性はある。一夜にして全てが灰に沈むなんてことになっても不思議じゃない。これは別に旧アベリー市だけじゃなく、どこの場所でもそうだ。

どこに居たってそうなんだ。

どこに居たって同じだ。

だったら御者台の上に居た方が少しはマシなんじゃないか？

31 黒い涙

単なる雑用係かと思いきや、ラルコは馬の扱いに長けていた。

護法軍が用意した馬車の車体は頑丈で、それを引く陸王サイはもつと頑丈だとはいえ、御者は生身の人間。俺に何かあれば馬車は立ち往生してしまう。その交代要員として同行しているというわけだ。

馬車に並行してウロコ馬に騎乗するその姿は、防毒マスクで顔が隠れているがよく見るとマスクごとやや縦長なので、顔の長い声の大きい例のあいつだと知れる。

俺がチャンプと名づけた陸王サイも、初めの荒れた状態なら手を付けられなかったが、ひと通り訓練を施した後はラルコでも一応走らせる程度はできるようになった。

だつたら護法軍だけで勝手に運べよ　と言いたいところだが、魔法の契約に縛られている立場なのもどかしい。

灰の降る長い道のりを進むということは危険が伴う。

たとえ短距離であっても死亡率が1パーセントを切ることはない。長距離になれば言わずもがなというやつだ。安全策は可能な限り取った方がいい。

俺は新調したマスクの、今までより広い視野で上空を見上げた。

灰曇りの色がいつもより濃く見えた。

もうすぐ第二雨季が来る。

*

陸王サイの歩幅や力強さはウロコ馬の比ではない。

体格もまるで違うし、いくら言うことを聞いてくれるようになって
たとはいえ、動きがダイナミックすぎて振り回される感覚が強い。

御者になってからずっとウロコ馬専門だった俺にとっては気を抜
けない時間が続いた。

道なりに半分居眠りしながらのろのろ走らせるから楽なのであつ
て、レースにでも出場するような鼻息の荒さをなだめて進むのはか
なり疲れる。

鼻息で思い出した。

チャンプは一種の生体改造を受けていて、専用のゴーグルさえあ
れば鼻をむき出しでも毒の灰を吸い込むことがない。

魔法で防毒膜を鼻の中に埋め込んでいるからだ。

灰の毒は地獄に由来していて、理屈はよく分からないが『悪い魔
法の力』みたいなものが毒の成分になっている。だから毒の効き方
も化学反応じゃなくて、魔法に対する親和性とか抵抗力が関係して
いるらしい。肉体だけじゃなく精神も影響しているってところだろ
うか？

早い話が個人差がある。人間でも動物でも同じことだ。

誰が死んで、誰がフィードになって、あるいは化石病になるのかは運次第だし、動物もあつという間に種ごと絶滅するものもあれば、ウロコ馬みたいに適応できる場合もある。その差は灰が降り始めて半世紀たつても完全には解明されていない。

ただ、灰を吸い込むことが一番危険だということは間違いないよ
うだ。

これはもう、本当にどうにもならない。

肺は毒の影響を受けやすい。組織がグズグズに崩れて即死するか、肺胞から毛細血管に取り込まれて全身にめぐり、フィード化する
か化石病にかかる。

マスクをつけていても完全には防げない。これは前にも言ったよ
な。

息を潜め、灰の吹きこまない場所から一生一歩も出ないようにで
もしない限り灰からは逃れられない。そんなことは不可能だ。つま
りこの世界の人間は誰ひとり灰から逃げられない。

御者の仕事は、移動中は野外で時間を過ごすことになる。これは
一歩進むごとに運試しをしているようなものだ。

もつともそんなことは御者に限ったことじゃないから、特別不遇
だなんてことを言つつもりはない。

それでも、せめて街道くらいはこちらから何も言わなくても馬車

を引いてほしいと思った。ヘタすると毒の灰の降る空の下を八時間ほどぶっ通しで走らないといけないのだ。いちいち動きを指示していたら神経が持たない。

チャンプにそれを言い聞かせたが、知ったことかと言わんばかりに首を振って、むしろ足を速めて走りだした。

この野郎　と俺はマスクの中で舌打ちして、陸王サイの分厚い尻の皮を突き棒でつついた。さすがにこんな勝手を許してはこれからの旅に影響が出る。こういう動きを制御するから御者なんだ。

俺は叱りつけながら手綱を引き、速度を緩めるように命じた。

鬱憤が溜まっているのかもしれないが、暴走されたらたまったものじゃない……。

*

最初の宿場町までは、ウロコ馬の足なら丸一日かかるところを半日で走破してしまった。

ちよつと驚きの脚力、そしてタフさだ。

馬車を止め、頸木を外してやると、チャンプは桶に入った濾過水と飼葉を代わる代わる大量に飲み食いした。本当によく食う。健康状態には心配なさそうだ。

あとは素直に指示に従ってくればいいことではないのだが、難しいものだ。

「イリエさん、飲むかい」

ラルコが差し入れを持ってきてくれた。ヒョウモンヤギの乳に茶葉と塩を入れて煮た飲み物だ。地球でいうとモンゴルとかチベットあたりで出てきそうなやつで、しょっぱい抹茶ミルクティーみたいな味がする。今はまだ豹紋柄のヤギっぱい家畜が生き残っているから乳も飲めるけど、いずれこれも代用ミルクになるんだろうか。なるんだろうな。

「しかしずいぶん走るな陸王サイは。付いていくのがやっとだよ。軍でも扱うのが難しかったのに、短期間でよくここまで仕上げたものだ。どうやったのいったい？」

「俺もよくわからないツスよ。不満を聞いてやる内に何となく通じるようになったっていうか。あれですよ、人間同士が言葉を超えて意思疎通ができるっていう、例のアレ。たぶんそれが動物にも効いたんじゃないスか」

「いやあ、そんな簡単なもんじゃないと思うよイリエさん」

「そうですか？」

「だって、動物とも話が通じるなら他の人がもっと早く手なづけるはずだろう？」

「言われてみれば確かにそうだ。どん詰まりの世界に後からやってきた部外者が簡単にやってのけるようなことなら、先人は苦労していない。」

「つまりイリエさん、才能だよ才能」

「……才能、ですか？」

「御者よりも調教向きかもしれないな。どうだい、護法軍で馬の面倒を見るっていうのは。腕の良い調教師なら大歓迎だ」

ラルコの言葉に俺は露骨に顔をしかめてしまった。

何となく、話がそっちの方向に行くことは予想が付いていた。

護法軍は補給線が切れるのを恐れていて、でもほとんど打つ手が無い。運送業者に委託するよりは自前で物資を運んだほうが安全なのは間違いないから、契約や提携よりは『専属』を望んで来るのも当然だ。

「まあ、考えておきます」

ラルコには一応そう答えておいた。

法と秩序のために命をかけて戦う　というのは一瞬熱くなるフレーズだけど、実際にそうするだけの覚悟はない。仕事ならまだしも、使命にしまってしまったらあとは行き着く所まで行ってしまふ。

考えておくだけならタダだ。うまい具合の立ち位置を見つけれらるまではある程度距離を保っておこうと思った。

保身だつて？　保身は重要だよ。

俺は自殺志願者じゃない。

自分の命まではまだ諦めていないからな。

*

翌朝。

宿場町を発つ頃に、空から灰ではなく大粒の雨が一滴落ちてきて、
チャンプの鼻先で弾けた。

第二乾季の終わりを告げる雨。

空の灰曇りを洗って落ちる、第二雨季の始まりを知らせる最初の
雨。

黒い涙だ。

3 2 悪魔は灰の彼方より訪う

春夏秋冬の概念はこの世界にもある。

俺がいま暮らしているこの地方の天候は、晴れが続く時期と雨ばかりの時期がはっきり分かれていて、一年に三回入れ替わる。

新年は春から始まって、これが第一乾季。日本で言えば4月から5月くらいだと思う。梅雨から初夏にかけては第一雨季 というように、第二雨季までが繰り返される。

第二雨季は、乾いた夏から一転して雨が続き、気温が下がっていく。秋の長雨ってやつと同じようなものだ。

気温は高いのにマスクと灰合羽が手放せない時期に比べると、一応は過ごしやすいようになっていく。

暑さだけの問題じゃなく、雨粒が空気中の灰を巻き込んで落ちてくるおかげですっと呼吸が楽になる。マスクなしでも過ごせるくらいだ、とたとえ話で言われることもある。実際に試すのはやめた方がいいけれど。

ただ、雨季ならではの危険っていうのもあって、そんなことを言い出せば乾季の時も危険だけどそれはひとまず置いておいて、そのひとつが『灰崩れ』とか『灰雪崩』とか言われている土砂崩れだ。

灰の毒は植物も腐らせる。毒の染みこんだ土壌からは、この世のものとは似ても似つかないモノが生えたりする。旧アベリー市にま

で荷物を運んでいったときにすれ違った、トゲのある真つ赤な何かが生えた森があったのを覚えているか？ ああいうのだ。

よくある話で、木がなくなると土を保持する力が弱まって土砂崩れや洪水が起こりやすくなる。

それだけじゃなく、地面にはところかまわず灰が降り積もっている。乾いた灰の層が地面を覆っているわけだ。そこに長雨が降り続くかどうか。わかるだろう？ 地滑りがおこり、ドロドロになった灰の濁流が川に流れ込むんだ。

これが灰崩れだ。

過ごしやすくなるといつても、季節の移り変わりの最初に降る雨は、年間を通して一番毒を含んだ水滴となって落ちてくる。

灰の穢れをたっぷり取り込んだ毒の雨。

黒い涙だ。

*

俺たち空箱運び一行は、黒い涙がおさまるまで途中の宿場町で立ち往生になった。

視界も悪くなるし、足場もぬかるむ。

陸王サイの頑健さと足の速さなら突っ切れないこともないけど、随伴するラルコが生きてそれについていける可能性はそれほど高くない。

とりあえず黒い涙が透明になるまでは雨宿りだ。

「もう少し早く出発できていればよかったですねえ。ああ、反対にもう少し遅く出発してもよかったかも」

「黙りなさいラルコ。元々半月以上時間がずれ込んでいることを忘れたのか……」

場を和ませるつもりだったのだと思うけど、ルシウムのラルコに対する態度は冷えた金属みただった。

半月か。

確かに俺が馬車で旧アベリー市まで例の箱を届けてからそのくらい経つ。

いろいろと重なって俺が陸王サイを荷駄に仕立てるまで動かすこともできなかつたのだから、荷物に関する責任者であるルシウムにとっては頭痛の種だろう。護法軍本部までは無理をしても急ぎたいはず……。

そういえば考えたこともなかった。

何で急いでるんだ？

中身が重要な軍事物資なら理解できる。でも荷台に積み込まれた縦長の箱には何も入っていない。重要なのは『箱そのもの』だという話だから、要するに頑丈なだけで空っぽの箱を急いで届けようとしていることになる。しかも盗難防止に策を講じながらだ。

アーティファクト
純正魔法創造物は存在そのものが貴重だというのはわかる。箱の形をしているけど金塊よりも価値のあるものだ。

でも護法軍は財産が欲しいわけではないだろう。一番重要なのは世界の法と秩序を乱す敵と戦うことで、最後の魔法の塔と大坑道を死守することだ。

そのために必要なのは戦う力、戦い続けるための力はずだから、箱だけあっても意味が無い。少なくとも俺には思いつかない。

それに契約書の禁止事項のせいでそのことを尋ねようとすると舌が動かなくなるからこれ以上は知りようがない。

『運び屋は客の荷物を詮索するな』。

雇い主から直接教わった数少ない言葉だ。

俺は割りとそういうことは律儀に守る。

守っていたはずなんだが。

*

同じ頃、俺の知らないところでいくつかの動きがあった。

*

灰崩れの土砂と濁流に襲われ、北方のアーパイン防毒農業地区が大きな被害を受けた。十年以上の試行錯誤を重ねて何とか灰の毒を

除去する農法を確立した土地は分断され、毒の泥が畑に染み込んだ。

不幸中の幸いで、第二乾季で実った作物は収穫済みだったものの、今後の生育にきわめて大きな影響をおよぼすことは明らかで、農夫や重農魔法使いたちは呆然と立ちすくむしかなかった。

少しでも作物を守ろうとする人たちと、命を省みると止める人たちの悶着があつて、決着する前に絶望が現れた。

ボロをまとい、背中を丸め、杖をついた老人がいつの間にか灰色の泥に覆われた畑の只中に立っていた。

老人だということだけは遠目にも明らかだったが、ほとんど前屈みになるほど丸まったその背中までの高さでおそらく3メートルは超えていた。

巨大な老人の姿をした絶望が、泣き喚く赤ん坊みたいな顔で笑うと、杖の先からぼこぼこ泡を立てて灰色の泥人形が這い出してきた。

誰かがその巨老人を『クレイマンサー』と呼んで、いつのまにかそう呼ばれるようになった。

生存不能領域から訪れるグレイ「グー」だ。

湧いて出る下僕の泥人形は毒の塊でもあり、捕まった人間は死んだ。

黒い涙が降り止んだあと、死者行方不明者は609人にのぼった。

これはアーパイン地区の人口のおよそ8割にあたる。

*

アクアカレン漁港は19年前のちょうど同じ季節に住民のほとんど全てがフィインド化する灰禍に見まわれた。

護法軍による必死の包囲攻撃にもかかわらず陥落は果たせず、奪還は不可能と判断され人類の統治下から放棄された。

護法軍高級士官モリブデンはかつてその奪還作戦に参加するも、フィインドとの交戦中の怪我が元になって化石病に罹り、両膝から下を切断することを余儀なくされた。

魔法によって動くこの世界の義肢はその後の軍人としての人生に対するハンデキャップとはならなかったものの、彼にとっては生涯の屈辱の証だった。

時は流れ、黒い涙が降りだすのと同じくしてアクアカレンのフィインドが活気づき始めたという報を受けたモリブデンは、危険な毒雨の中、自ら前線に出て指揮を取った。

物理的、魔法的に封鎖された漁港からはすでにフィインドの群れが這い出し、二重囲いのバリケードが破られていた。

19年の月日で中のフィインドは食料不足で餓死したとされていたが彼らは死んではいなかった。死にながら生きていた。生きながら死んでいた。

ほとんどミイラのように干からびた体に黒い涙が吸い込まれ、か

すれた声で苦悶する彼らは人間に擬態した枯れ枝のようでもあり、ミイラを適当にバラバラにしてくっつけたような異様な姿を見せていた。

元から人間のパロディじみた姿なのに、19年物の化け物は2体もしくはそれ以上の個体が融合していた。

おそらく共食いした結果と考えられた。その上で、干物みたいに乾燥した状態で年月を過ごしていたのだろう。

それがいまこの時に蘇った。

黒い涙は雨季が始まる度に起こる現象だから、それがトリガーになっっているとは考え難い。ではいったい何がフィンドを干からびた生死の狭間から呼び覚ましたのか？

疑問の答えは、護法軍キャンプの背後に自分から姿を表した。

裸の女の姿をしたグレイ「グー」、あの大坑道籠城戦にも現れた『フィンドの女王』だ。

女王の指の運びひとつでミイラ化フィンドが一斉に襲い掛かり、さらに女王自らが率いていたフィンドが雪崩れ込んだ。挟み撃ちの形になったキャンプは混乱に陥りながらも徹底抗戦した。護法軍は常に徹底抗戦するのだ。

ミイラ及びノーマルフィンドは、女王の操作により異様な凶暴性を発揮した。

虎の子の硬化靈薬短針弾散布装置まで破壊され、モリブデン指揮

フレッシュトスフリンクラ

する護法軍は窮地に追いやられた。

対フィード戦術に長けていても、女王には通用しなかった。
作戦を弄しようとも無駄に終わった。

グレイ^{II}グーは倒せない。

魔法も銃弾も焼夷靈薬も通用しなかった。

モリブデンは一部の精鋭とともに抜剣突撃まで試みた。

追難^{ハンシュ}魔法刻印済みの剣で首を刎ねても女王は死ななかった。

グレイ^{II}グーは殺せない。

死ぬのは人間の特権のようだ　モリブデンが最後に残したウィ
ジャ・メモリにはそのように記録されていたという。

33 なまえをいれてください

灰による死の危険が通信手段を分断してしまった時代では、情報の伝達はロコミのレベル以上には速くならない。

黒い涙がおさまったあと俺はずっと馬車の上で、その間にどこで何が起こっていたかなんて知る由もなかった。

ルシウムたちも心話魔法通信機を持ち込んでいない。世界のあちこちで護法軍の戦いが行われていたことをリアルタイムで知ることが不可能だ。

俺は雨上がりの、久しぶりに灰の振らない空を見上げ、ぼんやりと陸王サイの足音を聞いていた。

陸王サイのチャンプは俺が何度も手綱をひいてようやく早足を抑えるようになった。全力疾走できないのは不服そうだったが、安全のためには仕方ない。

俺はひとつ見当違いをしていた。

チャンプは闇雲に早駆けしていたのではなく、街道のコースを自分から読んで最適なラインを選んでいたようなのだ。

想像以上に頭がいい。

ウロコ馬がのんびりと指示に従うのに対して、陸王サイは求められていることを理解してとっとこなそうとする。そういう性格の

違いを把握すれば、扱い方も自然と違ってくる。

どこに向かうのかがはっきりしていれば、一々命じなくても勝手に判断してくれる。だから強制するのは極力避けて、俺はむしろチャンプに先導してもらおうくらいの気持ちで走らせた。

そのくらいの関係がちょうどいいらしい。

*

「妙だな」

密閉型の荷台からルシウムの声が聞こえた。覗き窓から、行く手に見える宿場町を眺めている。

「明かりが見えない。もうすぐ夕餉の時間だろうに」

彼女の言うとおり、街道を進む内にすっかり日が傾いて黄昏どきを過ぎようとしている。それなのに霊薬ガス灯のオレンジ色の光がひとつふたつ点いているだけで、宿の窓から漏れる明かりもわずかだ。

いくら交通量が少なくても基本的に物資の輸送はなくてはならないものだから、大きな都市と都市の間にある宿場町の利用者というのは一定数いる。宿泊客がひとりもない状況というのは、暦とか天候とか灰賊とかいろんな理由で起こりうるけど、だとしても町の明かりがほとんど見えないというのはおかしい。

「もしかして、灰賊かフィードの襲撃を受けて皆殺しにされたんじゃない……？」

ウロコ馬に乗って馬車に随伴するラルコが、誰でも思い浮かぶ不安を口にした。

そういう予想はできる。

何か不自然なことがあったとしよう。そういうことは何らかの形で灰と死に結びつく。それがこの世界の現状だ。

襲撃でなくても、たとえば町の防毒隔壁が何かの拍子に作動しなくなつて、灰を吸って大量に死んだとか、末路はいろいろと考えられる。

最近起こつたことといえば黒い涙だから、その濃い毒にやられたというのはあり得る話だ。

また死体の山を見なきゃいけないのか？ 俺はうんざりしてマスキの中のため息をついた。正直、宿場町の住民の命よりも今晚の寢床と食事の確保のことが気になった。死を悼むのは実際に死体を見てからでも遅くない。

街道の途中で馬車を止め、俺はルシウムの判断を待った。

「イリエ、隔壁の手前まで進んでくれ。私とラルコで様子を探る。何かあった時のためにすぐ走り出せる用意はしておいてほしい」

俺は返事ひとつですぐに従った。

ここ数日の間に自分なりに考えた結果、彼女は依頼主という客ではなく、上司だと思つことに決めた。そういう見方をすれば、行動

の速いリーダーとして頼りに思えてくる。

自分から護法軍の組織に入り込むみたいで複雑な気分だが、偉そうにしゃがってと延々思いながら付き合うよりははるかにマシだ。

言われるままに宿場町と外界を遮る防毒隔壁の近くに馬車を寄せ、チャンプの足を止めさせた。

停まらなかった。

重低音の声を発し、落ち着きなく足踏みを繰り返す。普通の様子ではない。でも指示を嫌がっているのとは違う。

チャンプは頭がいいし、元々軍馬として生まれついた勘の良さがある。意味もなく暴れるような真似はしない。少なくとも俺に荷駄として仕上げられてからはしようとしめない。それが早くここから動けと言い出してるも同然の仕草だ。

気が滅入った。わかるだろう？ 隔壁の中にあるのはおそらく悲惨な光景だ。チャンプが近づきたくないと思うような、見るべきじゃないものがあるに違いない。

ここにるのが俺だけなら、今夜は屋根のある場所で寝るのを諦めてすぐさま出発していただくろう。

でも今は魔法の契約書に縛られている。ルシウムたちが町の中を改めるまで、ひとりだけ逃げ出すこともできない。

「やめといた方がいいんじゃないスか。チャンプがこんなに落ち着かないなんて、何かあったに決まってる」

俺の余計な気遣いに、ルシウムは俺に背を向けたまま片手を上げてわかつているよと笑った。

「無論、何かあったに決まっている。だが私は護法軍の士官で、ラルコもそのひとりだ。護法軍の軍人はこうするんだ。護法軍というのはこういうものなんだ、イリエ」

そう言ってふたりは防毒隔壁をくぐって町の中へと入っていった。チャンプが口の中に入った灰を大量のつばとともに吐き出してから、振り向いて俺のことを睨んだ。

バカめ、俺様のいうことを聞いていりゃあいいものを。

そう言っているように見えた。

「そんな目で睨むなよ。俺だってそう思ってるよ……」

無意識に、俺は灰合羽の内側に吊るしてある銃に触れていた。

*

宿場町の中は大量の毒の灰に埋もれていた。

雨季に入り、黒い涙が明けてからは、積もるほどの量は降っていないはずだ。

しかし隔壁の内側は乾いた灰にうめつくされ、住民がその中で悶え死んでいた。あるいはフィードになって悶え死ぬ用意をしてい

た。

その灰がどこから現れたのかを調べる間もなく、灰の中から巨大な犬がもそもそと起き上がった。

灰の塊が犬の形になって動いていた。

体の色が特徴的で、顔の正面から縦に割ったように、半分が白、もう半分が黒に分かれていた。灰色の中から現れ、白と黒の真つ二つに色分けされた巨大な犬。

具現化したグレイ「グー」のひとつで、『両面犬』と呼ばれるようになった。

そんな風に名づけてしまったのは、あるうことが俺自身だ。

グレイ「グー」の化け物たちは、誰かが名前を思い浮かべるとその名前に定着するらしい。広まって名前が定着するってわけじゃない。誰かのつけた名前を脳みその中から横取りして、まるで『私は初めからその名前でした』とでも言うように人々の記憶の中に残っていく。

これも魔法的な働きのせいなんだろう。うまく説明できないが、俺は間抜けにも両面犬なんて名前を思い浮かべて、そういうことになってしまった。

名前のことはどうでもいい。

宿場町の貧相な防毒隔壁の中で何が起こったのか、実際に見たわけじゃないけど想像はつく。

両面犬が大量の灰を持ち込んだのか、大量の灰から両面犬が『生きて』来たのか。とにかく毒の灰につつまれて町がひとつ滅んだ。住民は全滅かそれに近い状態で、生きているとしたら建物の中で全部扉を閉め切って部屋の隅っこで震えていたはずだ。

想像だ。確かめる余裕なんてなかった。

馬車で待機していた俺は、隔壁の内側から聞こえたラルコの悲鳴を聞いて、思わず御者台から降りてしまった。

ルシウムの指示通り、何かあった時にすぐ移動できるようにしておかないといけないのにそれを無視してしまった。

思い返すと馬鹿な行動だ。悲鳴を聞きつけて俺が隔壁の中に駆け込んだところで、どう考えたって役に立てるはずがないのに。

でもじっとしているのは無理だった。

ラルコの悲鳴はマスクを通したくぐもった声ではなく、顔を晒した生声だったんだ。わかるだろう？ 何が起きているのかわからない場所で、護法軍の軍人がうかつにマスクを外すなんて考えられないことだ。

誰かに無理やり外された　俺はそのとき直感でそう思ってしまったんだ。

後先考えずに宿場町の中に走りこんで見たものは、灰に包まれた町並みと、両面犬の大口で防毒マスクを引きちぎられ、前足で顔を踏みつけられているラルコの姿だった。

火薬の音ではない独特の銃声が響き、両面犬の体に銃弾がめり込んだ。ルシウムの大型軍用拳銃による正確な射撃だ。

銃の内側に念動魔法で圧縮された加速力場に弾かれ、霊薬をつめ込まれた弾頭が発射される。目標に突き刺さり、瞬間的に膨張して肉体を破壊する。仕組みは違っても地球の銃と目的は同じだ。

肉の体を持つフィード相手なら殺せる量の銃弾を浴び、両面犬は灰になって崩れ落ちた。白黒に色分けされた体が入り混じり、灰色になって。

「ラルコ！ 兄弟ラルコ！ 無事か！」

厳しいルシウムの声に、顔を灰まみれにしたラルコは片手を上げるだけでそれに答えた。うかつに口を開けて返事をすれば灰を吸い込んでしまうからだろう。

すっ飛ばされて俺の足元近くに落ちていた防毒マスクを拾い上げて、俺はラルコのそばに駆け寄った。灰をはたき落として浄化霊薬を噴霧すれば一応まだ使えそうだった。

「イリエさんか？ ダメだよ、あんたは危険なところに出てきたら！」

目に灰が入ったらしく大粒の涙をぼろぼろ流すラルコ。俺は全くその通りだと思いつつも、いてもたってもいられなかった。

人間の死は見慣れたつもりだった。人はすぐ死ぬ。死体は毎日増える。そのことは身を持って理解している。死体を見ても滅多なこ

とがなければ嘔吐しなくなった。

でも知っている人間の死は……。

「話は後で聞く。イリエ、君はすぐ馬車まで戻れ。君と馬車に何かあれば身動きがとれなくなる。それだけは絶対に避けないといけな
い」

ルシウムが冷静な声で言った。マスクのゴーグル越しの目は険しいが、怒り心頭という感じではない。あとで説教するから覚悟しておけというような、目下の失敗をやむなく叱責するような、そんな雰囲気だった。もちろん俺が勝手にそう受け取っただけかもしれない。

「しかしこれは只事ではないな。あれが話しに聞くグレイ「グー」か？」

ルシウムは考え込みながら、上半身をゆらゆらとさせて近寄ってくるフィードに一瞥をくれて瞬時に射殺した。住民が灰の毒で変容したものだというのは明らかだ。無慈悲に殺すことだけが慈悲だということも。

俺がここにいてもただの足手まといだ。

涙で灰が流れ落ちるまで目を開けられないラルコの手には護法軍の救急パックを握らせて、俺は格好悪く防毒隔壁の出入口へと向かった。

向かおうと振り向いた矢先に両面犬が灰の中から現れた。

灰色の塊が、巨大な犬の姿に変化するに連れて黒と白に色が分かれていく。それがどんな意味を持つのかわからない。混ぜた絵の具が元の色に戻るような……。

次の瞬間に両面犬が襲いかかってきて、それと同時に俺はルシウムの左の義手で首根っこを掴まれて後ろにぶん投げられた。

灰の積もる地面にたたきつけられて、頭が朦朧としたせいで怪物と軍人の戦いがどんな風だったのかよく覚えていない。

義手の前腕を噛ませ、その隙に銃弾をありったけ撃ちこんで前足と頭半分吹き飛ばしたらしいのだが、それでもとどめはさせなかつたようだ。

両面犬は白黒から灰色に戻り、崩れて毒の灰の中に紛れ込んだ。

紛れ込んで、また別のところから塊になって生えてきた。

グレイ「グーは殺せない。

銃弾をいくら浴びせても同じことだ。一時的に破壊することはできても、本当の意味で死ぬことはない。

数回の試行の結果、それを確信したルシウムは生き残りの住民の搜索を諦め、ラルコを抱え上げて馬車に戻った。

防毒隔壁から抜けだした俺たちに、さらに両面犬の追い討ちが迫ったが、自己判断で馬首を返していたチャンプの猛烈な蹴りがそれを吹き飛ばした。

自慢気に鼻を鳴らすチャンプの脇腹をピシャッと叩き、俺は御者台にのぼった。

「走れ！ 全速力だ！」

それは俺様に言ってるのか？

チャンプは口元をぶると震わせ、命じられるまでもないとはかりに四肢の力を全開にし、車軸の心配をしなければならぬほどの速度で駆け出した。

3 4 彼らは虫のように路傍で

疲労が、溜まっている。

気を抜くと御者台から滑り落ちてしまいうくらい眠い。

丸2日半、ほとんど休みなし。ぶっ通しで馬車を走らせ続けている。

いつもの運び屋としての仕事なら、居眠りしたところで最悪自分が死ぬだけで終わるが、今回は荷台に貴重な純正魔法創造物と護法軍の軍人ふたりが乗っている。不注意で失わせるにはちよつと大きい荷物だ。

契約書の効力に縛られているということももちろんあるけど、運び屋としての最低限の誠意を捨てるのは気が進まなかった。この世界での3年間をそのまま放り投げるのと変わらない。

まあ、俺の義務感はどうでもいい。

俺たちは両面犬に壊滅させられた宿場町から逃げて、でもどこまで逃げれば追ってこないのか見当がつかなくて、結局逃げ続けることを選んだ。

灰はどこにでもある。

雨で洗い流されて、泥と混じって生コンクリートみたいになって地面を覆っているとしても灰は灰だ。両面犬が灰を通じてどこにで

も出現できるのなら、いまこの瞬間に道端から生えてきても不思議じゃない。

安全な場所に着くまでは移動するしかなかった。

矛盾した話だと思う。

安全な場所なんてどこにあるんだ？

*

はっと気がつくくと景色が変わっていた。

死んだ川の臭いがマスクを通して鼻をかすめる。どうやら橋の手前で馬車が停止しているようだ。頸木に繋がれた陸王サイが煩わしげに後ろ足を踏み鳴らしている。

眠気がピークに達して意識を失っていたらしい。

馬車を停めたのはチャンプの判断だろうか？ いくらタフでも、ほとんど飯抜きで走らされているのだからこいつも疲れているだろう。なんとかかしてやりたいが次の宿場に着くまではどうすることもできない。わかるだろう？ 毒の混じった道端の草や水を勝手に口にさせる訳にはいかない。

そこに、ラルコが声をかけてきた。

「イリエさん、少し休憩しよう。僕らだけ楽しっていたら申し訳がないよ」

簡易防毒テントの中には浄化水と代用チョコレートバーが用意されていた。マスクを外して深呼吸してからそれらを口に入れると、誇張抜きに生き返ったみたいに感じた。

毒の灰をかぶりながら野外を移動していると、何かがじわじわと体の中に入り込んでくる。有害物質とかストレスとか、そういうものとは別の何かだ。灰の中に地獄の粉末が含まれていて、魂がちよつとずつ地獄に堕ちているのかもしれない。

やや死んでいる俺にとってまともな空気と食料は落差が大きくて、ある種の感動みたいなものがあるのだ。

「この距離だ。あと半日で着けるか、イリエ？」

ルミノススクロール
光巻物に映る地図のポイント指で抑え、ルシウムは難しい顔で言った。彼女も疲れの色が濃い。寝不足というよりも、グレイ「グー」に攻撃が通用しなかったことへのシヨックの方が大きいようだった。

「大丈夫……だと思えます。まあ、チャンプの体力次第ですけど」

「厳しいデビュー戦になってしまったな」

「多少無理させることになることになってもしかたないっすよ。あいつは意地でも走り続けるだろうし」

「そうだな。君にも無理をしてもらおうことになるが、腹を決めてくれ。悪いが他に手がない」

手がない、か。

俺は軽く首をすくめて曖昧に肯定した。

確かに手はない。

馬車に随伴していたウロコ馬は、両面犬から逃げる時に回収できず生き別れになってしまった。ラルコが負傷していて騎乗できず、置いていくしかなかった。その後どうなったかは考えないようにする。

移動手段はもう馬車しかない。屋根付きの荷台にルシウムたちを載せて、俺が何とかして次の町までたどり着かせる。それしか手はない。

考えてもしようのないことだ。

短い休憩だったが少なくとも精神的には楽になった。

護法軍用の覚醒靈薬は断った。エリクサー靈薬は魔法で作られた薬品だが、魔法で作られたからといって副作用が無いわけじゃない。

かわりにチャンプが口に入れても平気な代用食料と濾過水を可能な限り分けてもらった。

量に対する不満をあからさまに示すチャンプだが備蓄を使い切るわけにはいかない。分厚い皮膚を軽く叩き、我慢しろとなだめてから俺は御者台に上がった。

一瞬、不安がよぎった。次の宿場町にたどり着きさえすればなんとかなる。でも、本当にそれで大丈夫なのか？

次の町もすでに壊滅しているんじゃないのか？

いま考えても仕方がないことだ。

そう自分に言い聞かせたが、俺は結局不安を引きずったままチャンプに前進を促した。

*

道中、黒い涙に打たれたらしき灰賊の死体が街道の脇に転がっていた。

死体のそばには、同じく灰賊だったと思われるフィードがひっくり返っていた。

足跡や血の流れ方から見るに、お互いに殺しあった結果のようだ。

頭の狂った灰賊たちにも仲間同士で殺しあうことには躊躇するのだろうか？

何の答えも思いつかないまま、馬車は死体の横を通り過ぎた。

*

数時間後、目的の宿場町に辿り着き、まだ何も起こっていない様子に安堵した。

宿をとってチャンプの世話をしたあとは、記憶が飛ぶほど眠った。

翌朝一番に馬屋に行くと、チャンプの周りを遠巻きに数人が見物

していた。

陸王サイ自体が物珍しいし、それを荷駄として調教してあるのはおそらく初めて見る光景なのだろう。

チャンプは煩わしそうにしながらも、自分が特別な存在と思われることにまんざらでもない様子に見えた。

*

また数日の移動が続いた。

この頃になると世界各地の惨劇と、それを裏で引き起こしているグレイ「グー」の存在がうわさとして流れてくるようになっていた。

いくつかの断片的な情報から、具現化したグレイ「グー」は種類や個性といったものを備えていて、そのどれもが不死か、それに近い異常な生命力を持つ怪物であるらしいことがわかった。

ルシウムたちも俺もそれを自分の目で見ている。両面犬が殺せなかったのは疑いようのない事実だ。

そしてそんな怪物が前触れもなく、残された人類の生存可能領域を破滅に追い込んでいる。

「グレイ「グー」ってのは、軍の見解じゃあフィードの変化したも のってなってますが、それで民間人は納得しますかね？」

ラルコがある意味当然の質問を口にした。顔の長い声の大きい護法軍士官は、両面犬に襲われた時の怪我の調子が良くないらしく、

顔色が悪く声のトーンも低い。

「公式見解としてはそうしておくしかないだろう。フィードの親玉で手強い敵。そのことに間違いはない。不死の存在などと聞かせてこれ以上人心を寒からしめたいか？」

ルシウムは、額に手を当てて深い溜息をついた。彼女のそうした仕草は、そろそろひと月ほどになる付き合いの内でも初めて目にするものだった。俺なんかよりもはるかにたくましい女軍人でも、気が滅入ることくらいあるだろう。

俺は正直なところ、自分が当事者であるという意識が希薄だった。

あのグレイ「グー」の、両面犬の、何をやっても殺せそうにない体の構造を間近に見たというのに、戦うのは護法軍であって自分が矢面に立つなんて考えもしなかった。

同じような絶望的な怪物が世界各地で目撃され、人間が生存を許されなくなりつつあると聞かされても、どこか他人事のようにだ。

何かまだ手はあるのだろう。そうも思っていた。

この世界には魔法が存在していて、その力は日に日に衰えているという。でも防毒マスクや防毒隔壁みたいな必需品や設備はまだ健在だし、最後の魔法の塔も大坑道も、襲撃されて被害が大きかったとはいえ結局撃退はできている。

加えて、馬車の目的地は護法軍の大本営だ。

運がいい、と考えていいのかわからないけど、俺はこの世

界に飛ばされてからの年月をこの世で一番安全な塔のお膝元で過ごしてきて、グレイィグーというこれまでに見たこともなかった人類の敵が現れたタイミングで護法軍の本拠地に行こうとしている。

大本営ということは当然十分な防衛策が取られているだろう。そこにたどり着きさえすれば、少なくともいきなり襲われて死ぬしかない状況に陥るということはないはずだ。

俺はぼんやりと自分の身の振り方をどうするかを考えていた。

最後の魔法の塔までは距離がある。荷物を全部捨てて陸王サイの脚力に任せれば、帰るだけなら問題ないが、壊滅した宿場町やグレイィグーの脅威のことを考えると、大本営で護法軍に守られたまま生活することも視野に入れておくべきだろう。

チャンプを荷駄に調教した実績もあるし、ルシウムに調教師として推してもらえば問題ないはずだ。

なし崩し的に護法軍の一員に加わることも覚悟しておく。

だからこそ、非戦闘員としての保証があるポジションが必要だ……。

自分の保身しか頭にないのかよって思われるかもしれないが俺には最初からそれだけしかない。他のものはもう手に入らないと早めに気づいたから何とか生きてこれた。よそにいるよりは安全にさせて、多少余裕のある生活が手に入ればそれでいい。

この世界で、この時代に、価値が有るのは安全だけだ。富や権力なんて無意味だ。毎晩しばみ続ける世界で成功者になって何ができ

る？

どこにいたって、灰を吸ったら人は死ぬんだ。

35 灰禍

少し整理しておく。

俺は護法軍との契約で中身の入っていない箱を馬車で運んでいる御者だ。

御者台に座り、灰合羽と防毒マスクで念入りに灰を防ぎながら、陸王サイという大きな動物に引かせて大型馬車を走らせている。

棺桶みたいな箱は純正魔法創造物アーティファクトで、特別な方法でないと開けることも壊すこともできない。

馬車の荷台は天井のある防毒対策済みの密閉式で、そこには護法軍士官のルシウムとラルコが箱を守るようにして同乗している。

向かう先は、極光都市ニューステージに位置する護法軍大本営。

目的地まではあと四分の一ほどの距離。

何のアクシデントもなければあと数日で到着する予定だ。

だが今は、世界各地でグレイィグーというものすごく危険な怪物が歩きまわっている。何も起こらないなんて保証はどこにもない。

最後まで諦めないか、最初から諦めるか。

どちらかでないかと心を強く持つのは大変な時代だ。

とにかく無事に進めることを祈るしかない。祈ることしかできない。

この世界の神様は、俺が祈っても応えてくれるのだろうか？

元の世界では祈りが通じた覚えがないので、比較しようがないのが残念だ。

言っておかないといけない重要な事がある。

俺は元々地球にいた。日本人だ。要するに異世界に飛ばされた人間だ。

それが3年前の出来事。当時はまだ高校生だった。一緒に飛ばされたクラスメイトはもういない。全員死んだ。

それともうひとつ。

この世界には魔法が存在する。素晴らしい魔法文明が築かれていたらしい。

いまは見る影もない。半世紀ほど昔からずっと空から毒の灰が降り続け、人類の多くが死に絶え、生存可能領域が日々狭まりつつある。

灰の毒は人を殺す。生き物を殺す。土を水を殺す。

灰は常に、どこにいても、空があるかぎり降ってくる。

太陽は灰曇りの向こうで頼りなく目をそらす。

空気はもう人類の味方をしてくれない。

それがいつなのか誰もわからないが、誰もがそれが訪れるのを知っている。

どうやらこの世界は終わるらしい。

*

堤防を作って洪水を防げても、川そのものが消えてなくなるわけじゃない。

台風に強い家は作れても、熱帯低気圧が生まれることを誰も止められない。

地獄から噴き上がった毒の灰もそれと同じで、魔法を使っても地獄を塞ぐことはできない。

誰もいない灰の平原から起き上がり、人間を滅ぼしにやってくるグレイ「グー」もそうだ。

グレイ「グー」は殺せない。

いくら頭を叩き潰しても、首をはねても、銃弾を浴びせても、魔法で追^{パニッシュ}難しても、目の前から姿を消すだけでまたどこかで起き上がる。

雨漏りがしないように屋根を修理しても雨が止むわけではないよ

うに、グレイ「グー」を足止めすることはできても倒すことはできない。

だから、ある意味ラルコは川で溺れたようなものだ。

グレイ「グー」という川の流に足を取られて、ラルコは川下に流れていった。

助けたと思っていた。でもあの時、すでに手遅れだったんだ。

ラルコは死んだ。

化石病による多臓器石化が死因だったようだ。

*

遺体の埋葬は諦めるしかなかった。

灰を避けながら十分深い穴を掘る余裕はないという判断だ。そうするしかない。この時代の環境では、安全が確保されない場所での土葬は二次災害の恐れさえある。

道端に放置することも考えられたがこれはさすがに選択できなかった。遺体がまともに残っている状態での護法軍士官に対する処遇としては僥びない。

火葬も難しい。これは単純に、燃やすだけの燃料霊薬が足りないからだ。焚き木？ そんなものは無理だ。どれだけの森が根から腐ったと思ってる。

消去法として、ありあわせの死体袋にいれて護法軍本営に急ぎ、集団葬儀で同志と一緒に荼毘に付すしかない。そう決まった。

俺もそれがいいと思った。

ラルコの血の気を失った肌のあちこちには、灰色の硬くなった部分が斑点のように浮いていた。体の所々に分散して石化が起こるタイプの化石病は、肺が崩れて即死するよりは長生き出来ても、内臓の急所が石になればやっぱり生きてはいられない。

仕方がない。誰でも死と隣合わせで、半歩踏み出したらこうなる。灰は誰の上にも平等に降る。そういう世界なんだ。

死体は溢れ、葬られることさえ放棄されることも少くない。あの旧アベリー市の惨状みたいに。

だから、上司と、一応関係者である俺に看取られて死んだラルコはまだ幸せだった。そう信じたい。

名前の無い死体は慣れるほど見た。

だけど名詞付きの遺体に慣れるなんて、やっぱり不可能だ。

何も目の前で死ぬことはないじゃないか。

*

「イリエ、君はどこの出身だ？」

道中、馬車の中から不意にそんな質問が飛んできた。ルシウムは

相手の都合を考慮しない。聞きたいことがあれば前置きなしで聞いてくる。

「ずっと遠い田舎の村です。もう灰に埋もれて帰ることもできませんけど」

俺はこの手の質問にはいつもこう答えるようにしていた。

地球ということは違う星から放り込まれた異世界人です、なんてことを説明してられないし、説明するだけ無駄だ。頭のおかしい奴だと思われるのも癪に障る。

だから、よくある灰禍の犠牲者という設定にしている。

ずっと遠い場所にあつて、帰ることもできないというのは事実だから、まるっきり嘘というわけではない。

一言で返す答えとしては上出来だと自分では思っている。

「そうか」

「何なんスか急に」

「なんでもない……と言いたいところだが、ラルコのことだ。私は彼の出身地を知らない。彼に家族がいたのかどうかさえ」

俺は何も言えなくなった。

短い付き合いで、俺もそこまで詳しい話を聞いていない。聞かれただら困る質問を俺から振ることはなかった。つまり、さっきの出身

地や家族とか、子供の頃何をしていたかとか、そういうことを。

それでも今はもう喋ることのできない顔の長い声の大きかった男は、どこか抜けていたけど善人であることは間違いないと思えたし、俺は……。

くそつ、だから誰からも距離をとってなるべく深く関わらないようにしてきたんだ。関わってしまうと、こうなってしまうのはわかっている。

生きているだけで人は死ぬ。

知らない人も知っている人も死ぬ。

ちくしょう、何でまたこんなことを味あわないといけないんだ。俺がこつちに来てから何人のクラスメイトが死んでいくのを見たと思っっている。

不意にチャンプが喉を鳴らした。

俺のことを気遣っているのだろうか。気が気じゃなくて、チャンプが何を言いたいのか通じ合えなかった。

無言になり、チャンプの思い足音だけが灰混じりの小雨の降る街道に響いた。

俺はルシウムにも同じ質問をしようと思った。

でも、やめておいた。

左手を化石病で失った女軍人にそれを聞いて、微笑ましい答えが返ってくるとは思えない。

護法軍がなんで箱だけをは運ばせているのか、という疑問は、俺の中ではルシウムという人物そのものに結びついている。

彼女が護法軍の中でどういう地位にあり、何を目的に行動しているのか。

それがわかれば疑問が解決する気がする。

でも解決して何になるんだ？

そんなもの、知る必要のない答えのはずなのに。

36 魔法の神、神の愛

あと3、4日で護法軍大本營のある極光都市ニユーステージに着く所まで馬車は進んだ。

グレイ「グーはあの両面犬以来姿を見せず、灰賊やフィードのたぐいも襲ってきたりはしなかった。

グレイ「グーの一件さえなければ、長距離の移動に関わらず比較的安全な旅だった。もちろん、常に付きまとう毒の灰のことを考慮しなければの話だが。

いい加減、長旅の疲れが出ている。毎日毎日御者台で揺られすぎて、立ち止まっても地面が揺れて見えるくらいだ。

ルシウムも、口にだすことはないものやはりこたえているようだった。

おまけにこの二日ほどは、部下だった男と馬車の中でつきっきりだ。

間に合わせの死体袋^{ポティパッケ}と食料保存用の靈薬を使って、腐敗はある程度抑えられるはずだけど、そういう生理的なモノ以上に、馬車の乗っている間ずっと死者と向き合わないといけないのは苦しいに違いない。

ラルコという人間の背負っていたすべてのものが抜けてなくなつた死体は、命の喪失という事実を無言のまま延々と主張し続ける。

ああ、そういうことか。

だから人間は死体を隠そうとして埋めたり荼毘に付したりして、葬る。衛生上の問題もちろんあるだろう。でも本当の理由は、そんなものがずっとそばにあったら耐えられないからじゃないか？

いきなり運命の糸をちよん切られたみたいなラルコの死。

ラルコの体は死んだままの状態で、死んだまま運ばれている。

終わった命が終わったまま、終わり続けている。

こういうのは、やっぱりよくない。

タフさとプライドの高さで道中を走りきった陸王サイのチャンプは、彼なりの方法で文句は言ってくるがギブアップしようとはしない。

でも俺の目から見て、馬体重がかなり落ちているのがはっきりわかる。

みんな疲れている。

この世界の誰もが疲れているのと同じように。

*

「イリエ、少しいいか？」

荷台の小窓からルシウムの声がした。

「聞きたいことがある。印象で構わないのだが、以前と比べて灰賊の略奪行為は増えたと思うか？」

「灰賊？ そうですね……」

少し難しい質問だった。

いままで俺が仕事をしていた主な運送ルートは魔法の塔と麓の街の往復で、そこから外れたことはそれほど多くない。

魔法の塔周辺は護法軍の駐留する世界で一番安全な場所だから、そもそも灰賊が出てくる事自体めったにないのだ。

めったにないというのは、たまに出てくることもあるということだ。

最後の魔法の塔に運び込まれるのは必然的に重要物資であり、リスクを無視して襲い掛かってくる灰賊もいることはいる。

運び屋同士のうわさ話も含めて俺なりに整理すると、灰賊は全体数が減っているのではないか、ということになる。

理由は簡単。人類の総人口がずっと下がり続けているからだ。人口の1%が灰賊か灰賊予備軍だとして、1000人が50人に減ればそれにつれて当然灰賊も減る。

その状況でもし灰賊が増えているとするなら、人口減少率に反比例するように灰賊の割合が増えているということになる。果たして

そんなことがあり得るだろうか？

「おおむね私も同じ意見だ。灰賊とは単なる犯罪者ではない。毒の灰の中に潜んで人間社会に牙を剥くという、狂気に基づく裏切り行為だ。そもそも灰とともに寝起きするなどありえない。自殺行為だ。いくら世の中がジリ貧だからといって、そんな人間が増えるというのは考えにくい」

ルシウムの言うことは灰賊についての基礎知識をなぞるものだった。

灰賊は頭が狂っている。完全な狂気に染まるか、毒の灰のせいで死ぬか、フィードになるか。それとも護法軍に狩られるか。

そういう末路を迎える以外ない。もう人間とは別の生き物だと言っているかもしれない。

そんな生き方を、どれだけ社会が厳しい状態になったからといって選ぶ人間が増えるわけがないということだ。

「だがクリュミエリを襲ったのは300人の狂える灰賊たちだ。300人。彼らはいったいどこから集められたんだろうか」

また聞かれても困る話をしてきた。

塔の麓の街　クリュミエリに大規模な襲撃を掛けたのが300人の狂人兵団で、最後のひとりになるまで熱狂状態で破壊と殺戮を続けたというのは知っている。その裏にグレイ「グー」の存在があることも、今ではもう疑いようがない。

どうやったらそんなことができるのかは知らないけど、この世界には魔法があるのだから、グレイ「グー」が魔法を使って300人に募集をかけても驚くには値しないはずだ。

「そうだな。魔法なら可能。確かにそうだ。そうなんだが……」

「何なんスか？」

「ん？ ああ、すまない。彼らの……グレイ「グー」が魔法を使えるとして、その力の源は何なのかと思ってね」

「それは秘石とか魔法の塔とか、そういうことスか」

地球人なので、俺は魔法のことわりを完全に理解することできない。できるのかもしれないけど、それこそ幼稚園からやり直すくらいの根気が必要だと思う。そんな根気はない。

だから俺がわかっているのは、神様が大地にまいた秘石という神の宝石が魔法には必要で、さらにその力を制御したり増幅したりするのが魔法の塔で、塔が失われたらもうまともに魔法は使えなくなるってことぐらいだ。

「そういうことだ。彼らが……グレイ「グー」がもし我々と同じように魔法を使えるのなら、魔法の塔を利用しているのだとしたら？」

「それじゃタダ乗りだ」

俺がそのとき思い浮かべたのは携帯電話とか無線LANのタダ乗りのことだった。魔法の塔を電波塔に見立てればわかってもらえると思う。電波が送受信できなければ通話もネットも出来ないように、

魔法は使えない。

「魔法とは神の愛だ。神の愛の結晶が秘石で、秘石から魔法は生まれ、魔法の塔がそれを行き渡らせる。もしや、グレイハッグは神の愛を盗んでいるのではないか」

それきり、ルシウムは黙りこんでしまった。

俺はなんとも居心地の悪い気分になって、何度も物理的に座り直した。

神の愛が盗まれる。

その言葉の意味を、俺には正確に理解することができない。

神の愛と聞けば宗教的なイメージが湧く。でもこの世界は魔法が実在している。その魔法が文明を築いてきた。神聖だけでもっと現実的なもので、つまり……。

何をいいたいのかわからなくなってしまった。

とにかく、この世界の神と元いた世界の神とでは根本的な違いがある、ということだ。

何が違う？

魔法の実在とはまた別の何かが違う気がするんだけど、結局その答えは出せなかった。

*

(暗転)

*

何が……。

何かなんだかわからない。

自分がどこにいるのか、何が起こったのか……体が動かない。視界がぼやけて……。

ごくわずかの間、俺は失神していたらしい。

ここは地面の上、それも舗装された街道の路面で、背中からそこに投げ出され強く打ち付けられた。投げ出されて……そうだ。

いきなり馬車の横っ腹に何かがぶつかって、俺は御者台から吹っ飛んだんだ。

何でそんなことになった？ 何がぶつかった？

記憶が無い。というより、本当にいきなりのもので、何も覚えていなかった。

死角からいきなり、大きな何かがドン、って激突した感じしかわからない。

追突事故？ でも街道は一本道で、両脇はほとんどが立ち枯れの森や灰の丘ばかり。死角と呼べるほどのものはない。横合いから追突してくるといっても、馬車同士の衝突なら先に音で気づく。

「うっっ……」

痺れる体を無理やり動かし、俺は周りの様子確かめて、力が抜けてまた倒れた。

どういうことだ、これは。

馬車は横転していた。

前の車軸がへし折れ、左の前輪が全然別のところにすっ飛んでいた。冗談みたいに、その場に縦に立ったまま静止している。

頑丈なはずの車体は大きく歪んでいた。

天を仰いでいる左側には、明らかに何かがつぶかった凹みがあり、防毒用の塗料がひび割れてボロボロに剥がれている。

チャンプは？ チャンプは無事なようだ。でも頸木につながったまま馬車に巻き込まれ、もがいても立ち上がることができない。怒りの唸り声を漏らしているのは、ひどい目にあつたこと以上に、自力で障害物を押しつけられないことに対するものだろう。

おい、何を寝てやがる。早く俺様を自由にしろ。

体が痺れたままの俺の耳にはそんなふうに聞こえた。

「そ……んなこと言ったって、俺だって……」

そうじゃねえ、早く動かないと『あいつら』が来るぞ。

「……あいつら？」

不思議なことにはほとんど直に会話しているのと変わらない「コミュニケーション」が取れていたけどそんなことはどうでもいい。

チャンプは、明らかに『敵』への警戒を抱いていた。

37 コンクリートリバー

ベトンキヤスター
混凝術士と自らを称する彼らの起源は元人間の魔法使いたちで、灰に取り憑かれたフィードに近い。

灰の毒を吸い込んで肉体が作り替えられるのがフィードで、本人が全く望まない化け物に貶められた存在なら、ベトンキヤスター混凝術士は本人が自ら望んで化け物への道を進んだ外道だ。

灰から抽出した地獄由来の成分を使つて靈薬を作る。

そこに肉体と精神と魂をどっぶり漬け込む。

そうすることで人間をやめることができる。

人間やめて何が嬉しいのかというと、やめる特典がある。

そこらじゅうに降り積もっている灰から魔法の力を引き出すことができるようになるからだ。

普通の魔法使いなら、神の宝石であるところの秘石から力を借りる。でも混凝術士は秘石を持っていなくてもパワー不足にならない。早い話が魔法の無駄遣いができるってわけだ。

もうひとつは、うらやましいことにマスクなしでも平気になる。灰の毒を吸っても体組織が変化しないようになる。人間なら死ぬ環境でも、人間ではないから死なない。

ある意味、灰の降るこの世界に適応した姿と言えなくもない。

灰に魂を売り渡した全人類に対する裏切り者ではあるんだけど、動くものの何も無い見渡すかぎりの灰の平原で思い切り深呼吸する気分はどんなものだろうと、そんなことを考えてしまう。水墨画の中にいるみたいで、侘び寂びの美しさがあるじゃないかな。

代償として人間をやめるだけの価値があるかどうか、やめてみないといけないのが残念なところだ。

人間をやめると、人間だった時の特典は逆になくなる。そのくらのペナルティはあってもらわないと困るけど。

具体的には言葉だ。

この世界は元々、神の祝福で誰もが言葉を超えて意志を通じ合える。それは灰に覆われて死にかかった今でも有効で、異世界からやってきた俺にさえ有効だ。

混凝術士はそれを失う。

死ぬまで意思疎通ができなくなる。誰とも何を話しても通じない。混凝術士同士でさえダメらしい。

文字もだ。書いても伝わらないから筆談もできない。それどころか完全な文盲になる。つまり本も読めない。絵本のふりがなも読めない。護法軍が捕縛した混凝術士を生きのまま開頭して『検証』した結果、自分の書いた文字さえ読めなかったらしい。

イラストはどうだろう？ 絵もダメなんだろうか。そこまではわ

からない。

ともあれ人間をやめると二度と誰かと言葉を通じさせることはできなくなる。

そこまでして魔法使い放題、灰の中でも呼吸できる体になるのがいいのか悪いのかは俺にはわからない。本人の倫理観次第だろう。

彼らがそうやって手に入れた力は、ただ本人の欲望のために使われる。もう誰とも分かり合えないのだから、ひとりで好き勝手やるしかないとも言える。

例外がひとつ。

混凝術士はもう人間じゃない。灰の向こう側にいる存在だ。だから、灰の向こう側にいるグレイ「グー」だけでは何かを通じさせることができる。

何かって？

人間を裏切ってグレイ「グー」に擦り寄った混凝術士は、グレイ「グー」から何かを受け取って、それに従っているのだという。

要するに悪魔の手先ってやつだ。

俺たちの馬車を襲ったのはその悪魔の手先だった。

*

最悪の状況だった。

俺ひとりがふつとばされて地面に落ちたくらいなら我慢すればいいだけの話だ。

でも壊れた馬車は簡単に直せない状態だった。

車軸が折れ曲がっていても、横転した状態から起こしても当然走ることができない。せつかく目的地まであと数日の所まで来ておいて、これだ。

車体に激突したのは生コンクリートの塊のようなものだったらしい。

街道から外れた小高い灰の丘から、ボロ布をローブみたいに被った青白い顔の男がこつちを見下ろしていた。

遠目にも普通の人間じゃないことはわかった。

体毛らしきものが一本もなく、髪も眉もない禿頭だ。もしかするとまつ毛も下の毛もないんじゃないか？ 剃っているわけではなく、全部抜け落ちてしまったという印象で、たぶんそれは合っている。

ベトンキャスト
混凝術士という存在がどういうものか、この時点の俺には知識がなかった。

だからてつきりグレイ「グー」に襲われたんだと思っていた。さもなければちよつと変わり種のフィンンドかと。

どちらにしても俺ひとりの手に負える相手じゃないことはわかつ

た。

そうだ、ルシウム。

無人の街道の只中で、ラルコが死んだいま頼れるのはルシウムただひとりだ。

まだしびれの残る身体を強引に動かし、密閉式の荷台に乗っていたルシウムの姿を目で追った。完全に不意を突かれた攻撃。横転した馬車。その中にいた彼女……。

それでも戦闘用義手をつけたあの女軍人なら、とっさにうまく脱出できたに違いない。

そんな期待があつた。

が、それは過剰な思い込みってやつだ。

いくら訓練された護法軍の士官であっても、アクシデントに100%反応できるわけじゃない。

ずっしりと重い生コンの塊の衝撃を受けた馬車の中で、目一杯シエイクされたんだ。怪我のひとつも負っていて当然……。

大きく歪んだ荷台の後部扉をぶち破って這い出して来たルシウムは血まみれだった。

左の額あたりから大量に出血して、二の腕くらいまで赤く染まっている。血が目に入って片目しか見えていないらしい。

「イリエ、どうなっている！ どこにいる！ 何が起こった！」

矢継ぎ早に怒声を発するルシウムに、俺は少し安心した。出血くらいなら何とかしてくれるはずだ。

「あっちの方！ フィーンドみたいな連中が」

「何！」

俺が示した方を向き、青白い禿頭の男を確認し、ルシウムはすぐさま懐の大型軍用拳銃を抜いてひと呼吸も躊躇せず引き金を引いた。

念動魔法による圧縮された力場で弾丸を弾き飛ばすこの世界の銃は火薬式のものとは比べると反動が少ない。

だからごつい軍用拳銃でも片手で扱える。そうやって撃ちつつ懐に飛び込んで左手の戦闘用義手で相手の顔面を叩き潰すのが彼女の得意な戦法だ。

でも今回はうまくいかなかった。

まず、最初に撃った弾丸は、禿頭の足元からせり上がった分厚い灰の壁に阻まれて目的まで届かなかった。

ベトンキャスター
混凝術士は灰を操る。水と土と灰を混ぜた生コンクリートを作り出し、それを壁にしたり投げつけてぶつけたりできる。

軍用拳銃の威力が並大抵なものでないのは俺も知っている。それでもずっしりした壁にぶつかってから標的を撃ち抜けるほどの威力はない。

どうすることもできず見守る俺の前で、病的な青白さの混凝術士は毒混じりの生コンクリートを爆発させ、散弾のように撒き散らした。

握りこぶしほどの塊が俺の方にも飛んできて、咄嗟に顔を覆ったが脇腹に一発めり込んだ。

息が詰まって空気が肺の中に入ってこない。

でも俺のことはどうでもいい。

問題はルシウムで、散弾をまともに浴びた彼女の身体は吹っ飛んで、くの字に体を曲げて舗装された街道の上に投げ出されていた。

ルシウムはこの時点で右の鎖骨と肋骨を骨折し、右腕が動かせなくなった。拳銃が楽に撃てる筋力の持ち主とはいえ、鎖骨が折れたら腕自体をまともに動かせない。

俺は脇腹の痛みをこらえて彼女の名を大声で呼んだ。

ルシウムなしにこの状況を切り抜けるなんて無理だ。

だがそこに混凝術士が無表情のまま近寄ってきた。その手には灰色の棒を持っている。毒コンクリートでできた槍だった。

昔何かで聞いたことがある。生コンクリートは強いアルカリ性で、肌に直接触れるとやけどのように皮膚が溶けてしまう。

ましてや、毒の灰を混ぜ込んだ魔法の生コンだ。

そんなものを、皮膚どころか身体に突き刺されたらどうなるか。どうなると思う？

ルシウムは左の戦闘用義手で穂先を払おうとしたが間に合わなかった。いつもならできたはずの、あとわずかの距離を詰められず空振りした。

悲鳴が上がった。

毒槍が、ルシウムの太ももに深々と突き立てられていた。

38 君の声が聞こえない

青白無表情の混凝術士ベトンキャスターはその生態通り、考えていることが全く伝わってこない。

何かを要求しているのか、ただの殺意なのか、目的があるかどうかすらわからない。意思疎通が全くできないというのは、人間大の昆虫のようで恐ろしく気持ちが悪い。

それに、青ハゲが何をしでかすかわからないように、俺たちつまりまともな人間が喋る言葉も向こうには何ひとつ通じないはずだ。

交渉不可。

目的不明。

魔法使いの助けがなければ、捕縛して尋問しても何ひとつ情報を引き出せないだろう。

つまり、虫の複眼のような目つきの青ハゲをどうすればいいかというと、答えはひとつしかない。わかるだろう？ 暴力で始末する以外ないんだ。

それなのに、くそっ、なんでこんなことになっている。

戦闘においても有能な軍人であるルシウムは、馬車の転倒で流血している上に敵の攻撃で鎖骨を折られ、右腕が使えない。

さらに太ももを、毒の灰を固めて作った槍で深々と突き刺されている。

見る間に血が広がり、ひとすじ、ふたすじと赤い流れが地面にこぼれていく。

とにかく何とかしないといけない。

俺は灰合羽の内側で冷たい汗をかきながら武器になりそうなものを探した。素手ではどうにもならないし、槍を持った相手ならこっちも長い棒を使わなくてはいけない……。

そんな俺の焦りをよそに、ルシウムはひと呼吸の間に一気に動いた。

左の義手で槍をへし折り、仕込まれた伸縮ギミックで青ハゲのすねに手刀を叩き込んだ。肉が削げてよろめいたところに、まだ無事な方の足で側頭部を蹴った。

顔色の悪いベトンキヤスター混凝術士の男は思い切り地面にひっくり返り、勢いがついたまま背中ベトンキヤスターで舗装された道を3メートルほど滑った。

「すげ……」

俺は思わず動きを止めてつぶやいていた。

「イリエ、イリエ！」

マスクの中で呆然になっていた俺を叱りつけるようにルシウムが怒

鳴った。

「足が動かん！ 銃を拾ってそいつを撃て！」

ルシウムの額の出血は止まらず、防毒マスクは半分くらい赤く染まっている。マスクの中にも流れ込んでいるなら、視界の半分はふさがっているはずだ。

やるしかない。

自分ひとりの意志だけだとたぶん足がすくんだまま動けなかったと思う。

だけどルシウムの命令には意味があつて、そうするだけの理由があると、今では信じられる。

だから感情のスイッチを切つて、俺は人間ではなく一個の装置になつた と思う。

でも……。

いつもそうなんだ。俺はまたやってしまった。

灰合羽の中に俺は護身用の拳銃を吊るしていて、こつこつ時にすぐ取り出して使えばよかったんだ。

それなのに、肝心なときにはいつもその存在を忘れてしまう。

この時も、まったくそのことを頭に思い浮かべず、あさつての方向に吹っ飛んでいたルシウムの拳銃を拾ってそこから一周りして青

ハゲを撃とうとした。

引き金を引くことに躊躇はなかったはずだ。

生き物を撃ち殺すことへの恐怖は、ルシウムの大怪我よりずっと優先順位が低い問題だと、この瞬間には思っていたはずだ。

でも本格的な訓練を受けていない俺の腕前では、離れた目標には当てられない。とにかく絶対にはずさない位置まで駆け寄ってそこから問答無用で引き金を引く。

その意味で、俺の取った行動は間違っていないかった。

混凝術士の幽霊みたいな顔面は対フィード用炸薬弾で消えてなくなるはずだった。

実際にはそれより早く混凝術士の作り出した『腕』が降り積もった灰の山から伸び上がり、ルシウムの防毒マスクをむしりとった。

*

火薬ではなく、念動魔法による力場で射出するこの世界の銃は独特の発砲音がする。

俺は計6発を撃ちこんだ。命中したのは2発だけだった。

軍用拳銃の威力は確かだ、青ざめた混凝術士は腹と喉元に大穴を開けられて死んだ。

だが、ルシウムはもう手遅れだった。

外気に顔を晒されたまま『腕』に振り回され、彼女は灰溜まりに落とされた。

舞い上がった灰はむき出しの顔に降りかかった。

もし俺が、懐から自分の銃をすぐに取り出していれば……。

もう遅い。

事実はひとつだ。

俺には無理だった。

俺には救うことはできなかった。

ルシウムは死んだ。

知り合ってから二ヶ月も経っていなかった。

*

少し記憶は曖昧になる。

すでに唇の端から血の泡が流れつつあるルシウムに俺は何かをわめいていたはずだが何を言ったのか覚えていない。

「黙りなさい。聞け。聞けイリエ！」

左の義手で胸ぐらを掴まれた。俺の耳は、仰向けになった彼女の

口から1センチの距離まで引き寄せられた。

「こんな事になってしまったが、頼む。荷物は最後まで運んでくれ。必ずだ。私とラルコのなきがらはここに捨てて置いて構わない」

「そんなこと言ってる場合じゃ……!」

「だまりなさい……しゃべらず、ききなさい」

気道に血が絡む音がして、ルシウムの声は聞き取りにくくなった。

なきがらなんて、アンタまさか本当に死ぬつもりかよ？

「あの箱は護法ぐんにとって、ひつようなものだ……少なくともわたしの命いじょうのかちはある。いい、な？ 必ず、とどけてくれ」

俺はわけも分からずとにかくうなずいた。

「すまない。君はなかなかおもしろい男だった、もう少し身の上話でもしておけば……よかったと。いまさら、そう、思う、よ」

「俺は……!」

何かを言いかけて、唇を噛み締めた。だめだ。どう考えても説明しきれぬ身の上じゃない。

その時ルシウムは限界を超えて咳き込み、血を吐いた。崩れた肺の一部が混じっていた。

「私には妹がいる……軍の部下という意味じゃない。肉親だよ、た

「ったひとりの肉親」

声の中にヒューヒューと空気のごすれる音が混じっているが、なぜかきちんと意味が伝わってきた。

「護法軍の本部にいる。つまり、目的地にだ。楽しみにしていたが、残念ながらもう会えない。すまないと伝えてくれ」

「待ってくれよ、待って、オイ、このまま死ぬつもりかよ？ 俺は」

「まあ聞け。妹は……少し……特殊な立場にいる。会えないかもしれない。だから、私の義手を形見として持って行ってくれ。そうすれば直に会えると思う」

ルシウムは少し笑い、少し血を吐いた。

「いいな、かならずだ。箱と、腕。このふたつを君に託す。そして妹を頼む」

「おい、俺にどうしろっていうんだよ？ 直接何を話せばいいってんだ？」

「遺言だよリエ。ゆい、ごん、だ。君から見た私のこと、私が何をして、どんなふうになつて死んだか。全部だ。見聞きしたことをそのまま伝えてくれ」

勘弁してくれよ。

俺は誰からも何も遺されたくなんかないんだ。何人死んだと思っ

ている？ 一緒にこの世界に飛ばされた俺以外の全員が死んだんだぞ。死んだあいつらのことを背負っていたら、俺なんかすぐに潰れてしまう。

遺言なんて託さないでくれ。俺はそんなものを背負える人間じゃないんだ……。

「ああ、そろそろ……限界だな」

俺のくだらない困惑を、ルシウムの妙に清々しい声が遮った。口と鼻から血が溢れ、まったく止まらない。

「すまないなイリ工。どうもおかしな風に巻き込んでしまった。こんな世の中だが、君は誠実だったよ。私の名誉にかけて保証しよう」
「そんなの……嬉しくないツスよ。そんなの、そんなこと言われても……」

「まあ聞け。『誠実であれ。寛大であれ。悪は根絶やしにせよ』。護法軍の3つの使命だ。ひとつでも当てはまるならば軍に入る……資格がある」

褒めているつもりだよ、とルシウムはうわ言のように言った。血が流れて。

とうとう血涙までこぼれ落ち、目はまったく見えていない。

俺も泣いていた。こういつとき防毒マスクは本当に邪魔だ。

「では、ここまでだ。化石病で腕を失い、最後は血を吐いて死ぬが、

「フィードにならずにすんだ。こっ、うん、だとおもっ……」

「ルシウム……おい、こんなところで……」

「悪いなイリエ。君は……生きられるだけ、生きて……くれ」

ルシウムの血が止まった。

もう十分だと、彼女の魂が判断したらしい。

39 トウルメイズ

灰の降り方がいつそう強くなって、雨まで混ざってきた。

俺は必要な準備を済ませ、相棒のチャンプの背にまたがった。馬車は壊れて使えない。頸木を外して直接乗るしかなかった。

御者としてはそこそこだが、乗馬の腕はそうでもない。その上チャンプの背は普通の馬のそれとは違う。本来なら専用の鞍をつけなといけないのだがあいにくそこまでは用意していなかった。

とにかく、乗った。

必要な荷物はチャンプの体にロープで巻き付けた。

ルシウムとラルコのなきがらは置いていくしかなかった。直接灰が触れない場所にふたりを安置するのが精一杯だった。

馬車の残骸をいくつかふたりのそばに突き立てておいた。弔いになるのかわからないが、万が一後で誰かが回収するときには目印くらいにはなるだろう。

そこまでひとりやって、ヘトヘトに疲れて、護法軍の備品の覚醒靈薬を奥歯で噛み潰し、俺はチャンプを走らせた。

防毒マスクのバイザーに灰混じりの雨が落ちて、黒いひと筋が伝った。

*

かつての東エーア^{II}メシオン連合王国領内、極光都市ニユーステ
ージ。

昔 といっても千年近く昔に縞瑪瑙オニクスの塔が建立され、栄華を誇
っていた都市だという。

それから時代を下って大きな戦争が起きて塔が失われ、さらに半
世紀前から灰が降り始めると、極めて甚大な被害を受けそれまでの
人口の八割が死ぬか逃散した。

いまはバリケードと見張り台と浄化鉄芯入り掩蔽壕が立ち並び、
あらゆる魔法を駆使した防御装置が至るところに準備されたひとつ
の要塞になっている。

ちょっと被害妄想気味な念の入れようだ。

やりすぎだろう、とは思わなかった。

グレイ^{II}グーヤ狂人兵団のことを考えると、どれだけ防備を固め
てもなお不安は残る。

護法軍の旗が掲げられ、同じ紋の入った腕章をつけた護法軍の兵
士に明確な警戒感を抱かれながら、俺はチャンプの判断に任せて護
法軍大本営南通用門の前まで辿り着き、その場で失神した。

*

3日間眠らずに馬を走らせ、水と覚醒霊薬以外を口にしないとい

うなるらしい。

気をつけた方がいい。

*

医務室で一般医に診られていた俺はベッドから跳ね起きて早々にバケツだかゴミ箱だかをかっさらって思い切り吐いた。

泡っぽい胃液しか出てこなかった。

「何をやってるの、いきなり動いたらいけませんよ」

一般医は中年女で、俺を押さえつけるようにしてベッドに沈み込ませた。

魔法医とは異なり、回復魔法以外で治療を施すのが一般医だ。つまり深刻な病気や怪我は負っていないことになる。

「ここ、どこですか」

多少落ち着いた俺は霊薬の点滴を受けながら尋ねた。

「本営の医務室です。あなた、どういう状況だったか覚えている？
気を失ってあの大きな……」

「陸王サイ」

「そう、その背中から落ちて。大変だったんですよ」

「あいつ、どうなったんです?」

「あの大きいの? さあ、私はよく知りませんが、たぶん厩舎に連れて行かれて防疫処置を受けているんじゃないかしら」

それもそうだろう、と俺は深々息を吐きだした。

あいつが荷物を運んで走りだして、何日になるだろう。

陸王サイ自身がいくら灰に強くても、体に貼り付いた毒の成分を持ち込まれたら周りの命にかかわる。

「あなたもずいぶん灰で汚れていたけれど、毒の影響はそれほど心配しなくてもいいわ。それよりも過労ね。まあ、しばらくしたら元気になるわよ」

だからじっとしていなさいね、と言い残して女医は部屋から出て行った。

静かになって、俺は鈍った頭で考えた。

これからが問題だ。俺はルシウムのことと、ルシウムの遺言のことを話さないといけない。そうでないと何のためにこんな所まで来たのかわからない。

でも、いったい誰に何を話せばいいんだ?

鈍った頭が完全に動きを止め、俺は眠りに引きずり込まれた。

*

「冗談だろう？」

俺は護法軍から正式な依頼を受けて、契約書に掌紋パームまで残したんだ。

身も心もすり減らして、あんな……あんなものまで見せられてまで箱を届けたのに。

俺は取り調べを受けていた。

尋問だ。

犯罪者扱いされた。

それも重大な犯罪、護法軍に対する妨害行為と士官殺害の罪に問われたんだ。

信じられなかった。

あまりに腹が立つので、実際に何をされたり言われたりしたか、わざわざ並べ立てるのはやめておく。

とにかく俺は怒っていた。もう、護法軍のことなんか知るか。

勝手に滅びてろ、クソ軍人どもが。

*

「出る、『釈放』だ」

たぶん俺より若い青っちょろい兵士にそう言われ、俺は跳びかかって鼻を陥没させてやりたい衝動を抑えた。

牢屋よりはマシな部屋に軟禁状態になって3日あまり。

暴力や拷問こそ受けなかったが、俺の護法軍へのイメージは一変していた。

法と秩序を守り、悪を滅ぼす軍事組織。

つまり、俺はこいつらから見て法も秩序もない悪人だとみなされたと言ってもいい。

そんな連中のためにラルコやルシウムの死を間近に見なければいけなかったのか？

でも……。

それでも耐えたのは、ルシウムの妹に形見を渡さないといけないという、その一点だけは譲れなかったからだ。

受け入れて流されてここまで来た。いろんなことはもう諦めがついている。それ以上は何も望まない。でもこれだけはだめだ。受け入れられない。

俺はひよろ長い兵士に促されるまま、別室に連れて行かれた。

軍の高級士官でも待っているのだろう。誰でもいい、こっちの主張は絶対に通してもらおう。

ルシウムの妹に合わせると……。

妹？

そこまで考えて、俺はじわっと冷や汗をかいた。

妹ってなんて名前だ？

ルシウムは妹とだけしか言っていない。詳しく聞いている暇もなかった。

今の今まで妹だけで通じると思っていた。

でも、名前も知らないのに妹に合わせるとだけ言って、どうやって信用されるんだ？

「その部屋だ、入れ」

俺の目の前には、明らかに頑丈そうな両開きの扉があり、数秒のためらいの後、取っ手に手をかけた。

*

ゆったりとしたローブに変わった形のフード。顔の前にたられ、薄手の布のせいで何者なのか全くわからない。

「始めに言っておくが、このお方は現在この世界で最も位の高い魔法使いだ。くれぐれも妙な考えを起こさぬよう気をつけよ」

俺から見て左側の席に座る男はそう言って俺に睨みを効かせ、それから『魔法使い』の方に目配せした。

どいつもこいつも名乗りもしない。

無精髭に白いものが混じる男からは、絶対に逆らえない威圧感が発散されて、ほとんど物理的に顔の半分がひりひりするようだった。

軍服と腕章を見るに、指揮官とか将軍とか、そういう高い地位にある軍人だというのはひと目で分かった。大本営の将軍。もしかしたら護法軍そのもののトップかもしれない。顔も名前も知らないから特定のしようもないが。

まあこの将軍サマが誰であつても構わない。

問題は正面に座っている『魔法使い』だ。

現在この世界で最も位の高い魔法使い。そう紹介された。

最も位の高い魔法使い、それも現在の世界で最高位と言えは真名^トウルメイジ^ウを授かりし導師のことだ。

トウルメイジ。

トウルメイジだって？

魔法使いの最高位どころじゃない。この世界全てのうちで最重要人物じゃないか。

地球で言えば、アメリカ大統領やローマ法王がいきなり面接する

みたいなものだ。そんな人物に目の前に座らされたらどうする？
俺の心臓がどんなことになっているか想像つくだろう？

県知事に表彰された時だって上がっていた俺に、この状況は厳しい。

「君に直接尋ねたいことがあるそうだ。別に危害を加えるつもりはない。偽りなく答えればそれでいい」

「……はい」

「では例のものを」

將軍の合図で護法軍の士官が布を巻かれたものを持ってきて、テーブルの上で広げた。

生々しい傷跡の残る戦闘用義手。ルシウムの形見だ。

それは彼女の妹に直接渡すように遺言されたものだと言われ、強く言っ
つて、席を蹴るようにして立ち上がった。

次の瞬間には取り押さえられた。

「……遺言とは誰の遺言だ？」

「何回おんなじこと言わせるんだ！ ルシウム！ ルシウムだよ！
あんたたち護法軍の一員の！」

「本当に、偽りはないな？」

「知るか！ 何回同じ質問して……同じこと聞くなり、こんな、こんなところ、わざわざ連れてくるな！」

俺は興奮しすぎてわめき散らしていた。たいていのことは飲み込めるはずだけど、この時は無理だった。

將軍はトゥルーマイジに何かを確認し、トゥルーマイジは一言も発さないままうなずいて、どこか別室に出て行った。

テーブルを見るとすでに義手は持ち帰られ、何も残っていないかった。

俺の手元には何も残っていないかった。

ルシウムやラルコの、生きていた証も死んだことの証も、何も残っていないかった。何も。

ようやく俺は解放され、城塞都市となったニューステージの片隅にあるホテルの一室をあてがわれた。

もしかするとまだ見張りがついていいるかもしれない という疑いはあつたけど、気配を察知できなければ同じことだ。

何なんだ、この扱いは……。

なんでこんなことになる？

俺はもう全部投げ出して、ベッドに入ってひたすら眠ろうとした。

もうどうでもいい。

チャンプを休ませたらここを出ていこう。保身のために護法軍で働こうと思ったこともあったけど、やめた。

ここだろうとどこだろうと、どうせ死ぬんだ。灰から逃げられないならどこにいても同じだ。

ちくしょう、もういい。

こんなところ……。

40 錆びた遊具は墓標に似ていた

幸い、強行軍の疲れや灰の毒にも負けずチャンプは元気だった。

何事も無くて本当によかった。

これでチャンプまで失っていたら、さすがにどうなっていたかわからない。

ただ、まともに食事を取れていない日が続いたので馬体重が落ちていて、もう少し調整が必要のようだ。

とにかく、本当に良かった。

俺はずいぶんとずさんでいる。

*

ホテルに戻ると手紙が届いていた。

従業員からそれを渡されて開いた俺は、比較的マシな服に着替えて慌てて客室を飛び出した。

文面には、自分がルシウムの妹であることと、姉の最後の様子を直接聞きたいという旨が書いてあった。

自筆ではなくウイジャ・ライターを使って書かれたものだったけど、この際どうでもいい。本人かどうか疑ってもキリがないし、今

さら俺のことを騙すだけの価値があるとは思えない。

何でもいいから俺を単なる誠実な仕事をするだけの人間に戻してくれ。

これ以上、護法軍につきあってられない。

*

指定された場所は公園だった。

見るからにつまらなそうなみすばらしい遊具。しおれた雑草が好き勝手に生え、植え込みの木は半分以上立ち枯れている。まともに管理されているとは思えない。

護法軍大本営のあるこのニューステージ市にも人間の生活があつて、軍人の家族や民間人の暮らす住まいがある。

住宅がある以上は子供もいて、子供たちが遊べる空間が必要だと誰かが考えて公園を作った。

言い訳だ。

生活面も考慮していますよ、というアピールのために作られただけだ。そして、もはやそれすら顧みられることがない。わかるだろう？ 公園の世話なんてしていられる余裕は、護法軍にはない。

だから公園は無人だ。乳母車を押す母子の姿もないし、遊んでいる子供もいない。空は灰曇りで薄暗く、いつ雨が降ってくるのかわからず……。

改めて、本当に気が滅入る世界だ。

特に子供にとっては辛いだろう。俺がこんな環境で育ったら、とてもじゃないけど、『世界の法と秩序を守る』なんて発想には行き着かない。守りたい世界だと思える自信がない。

それでも護法軍は守ろうとする。守ろうとする人間が集まってい
る。俺にはわからない感情だけど、それは詰まるところ俺がこの世
界の出身ではないということに収まるから、考えても仕方のない
ことだ。

彼女も　ルシウムも、世界と人々を守ろうとした人間だ。

化石病による左腕の切断。軍からの義手の提供。その恩を返すた
めに身命を捧げる決意をした。俺が知るかぎり、彼女の動機はそれ
だ。

でもそれ以外のことはほとんど知らない。

俺が俺自身のことを曖昧にしか答えなかったのと同じように、彼
女もそれほど多くのことを語らなかつた。妹がいるという話も今わ
の際のギリギリのところまで聞いた。

せめて彼女の遺言を守り、彼女の妹に全部話さないと。それまで
は街を出て行くわけに行かない。

「イリエさん、ですね？」

現れた女は細身のシルエットで、長身で鍛えあげられたルシウム

とはイメージが違う。妹も護法軍所属の軍人だと思い込んでいた俺は、一瞬混乱した。

「ええと、はい。俺がイリエです。その……なんて言えばいいのか。スミマセン、この度はご愁傷様で」

「まあそんな。かしこまらいで下さい。お話を聞かせていただきたいのは私の方ですから」

遠慮気味に笑うルシウムの妹の顔は、どこがどうとは言えないがよく似ていた。背の高い女軍人の姉と、育ちの良さそうなお嬢様というところだ。

美人だと思う。

ルシウムも灰の降らない場所でおとなしく内勤か何かをしなければ、こんな風になったのだろうか。

「ここで立ち話というのも何ですし、場所を変えましょう。ではこちらへ」

彼女は一礼して、そのままさっさと歩き出した。

ちょっと啞然として、俺はどうしようか迷ったが結局そのまま彼女の後に続いた。こっちの意見は初めから求めていないらしい。

そのあたりの押し付けがましさも、姉に似ているのかもしれない。

*

リリウムは左目を失明していた。

灰の毒で化石病にかかり、眼球が石に変わってしまったのだ。

石化が広がるのを防ぐために眼球ごと摘出し、かろうじて事なきを得た。姉のルーシイが左腕を失ったのと同じ時の話らしい。彼女は姉のことをルーシイと呼ぶ。彼女はリリイ。ルーシイとリリイ。

姉の左腕を切り落としたのは妹で、妹の目をえぐりだしたのは姉だったそうだ。

何というか……。

ものすごいドラマがあつたのだらうということはわかる。どうしてもそうせざるを得ない状況に置かれたのだらう。それが具体的にどんなものだったか、俺はとてもじゃないけど詳しく聞き出す気になれなかった。

恐ろしいもの乗り越えて生きるのは大変だ。この世界に生きている者は多かれ少なかれ恐ろしいものを見ている。俺だってそれなりに。

まあ俺のことはどうでもいい。

リリウムは海賊船長のようなアイパッチを付けている。あの黒いやつ。ところどころに装飾が入っていて、女物っぽくなっている。

でもやっぱりいかつい雰囲気があつて、若くて綺麗な女が付けているのは少し驚くし、目を引く。

ルックスのことなんて口にするべきことじゃないとはわかってい
るけど、一応感想をいうと白い肌と金髪とのコントラストが際立っ
ていて、魅力的に見えた。眼帯のデザインのことを少し気にしてい
るというのも、何というか、しばらく忘れていた感覚を刺激してく
る。

彼女は女だった。

俺が男であるということ以上の意味で、彼女は女だった。

*

リリウムの自宅に招かれた俺は、できるだけ正確に、かつ言葉を
選んでリリウムに姉の死に際を語った。

護法軍の取り調べで何度も繰り返し喋らされたので、そこそこう
まく語れるようになってしまった。腹が立つ。

「姉らしい、最後だったと思います。あなたのお陰で任務を果たせ
たのですから、思い残すことはありません。姉も、私も」

はかない。

はかなく笑って、リリウムは彼女のもとに届けられた遺品の義手
に触れた。

リリウムは泣かなかったが、俺はダメだった。

こっちが慰められた。

何をやってるんだ、俺は。

*

「この後はどうなさるんですか、大兄イリエ？」

そう言われて、俺はリリウムが入れてくれたお茶を喉につまらせた。

大兄というのは護法軍組織内の尊称で、外部の人間に対しては使われない。居心地が悪くなった。もしかしてこの人、俺のことを軍人だと思っているのか？

「まだちよつと決めてないんですけど……一段落したらこの街を発とうかと」

「クリユミエリに？」

「いや、それもちよつと。どうするか決めかねてて。なにしろ遠いですから」

いま居る護法軍大本営から塔の麓の街に戻るのには、旧アベリー市を間に挟んで、何も問題なくとも3週間以上はかかる。おそらくそれだけで命がけになるだろう。そして問題が起こらないはずがない。グレイ「グー」による新しい絶滅の波が、いつ大波に変わってもおかしくない状況だからだ。何の拍子に命を落とすか、いちいち想定するのも大変なほどだ。

「御者は……まだお続けに？」

「続けると思います。それ以外、できることもないんで。お情けで陸王サイはそのまま使っていいことになったから、なんとかなるんじゃないスカね。ウロコ馬より速くて安心、なんていつて。まあ、食費が大変ですけど」

「馬がお好きですか？ あんな大きな陸王サイを魔法の助けもなしに手なづけたと聞いていますけど」

「なんか向いているみたいっスね、そういうのが。だからまあ、運び屋より調教そうちに絞ってもいいかなーとも考えましたけど……」

「軍馬の調教でしたら、ニューステージに残って軍に掛けあってみては？ 私、そちらにつてがあります」

「えっと、まあ……どうでしょうか、ねえ……？」

俺は少し戸惑った。妙にリリウムの食いつきがいい。状況として、姉を亡くした妹に遺言を伝えに来た雇われ御者という配置で、話の中心はどう考えてもリリウムだ。

俺がこの先どうするかなんてことをあれこれ聞いてくるのは、親切心からなのだろうと思う。でも第三者の俺の身の上を詳しく聞いてもしょうがないだろうに。

「いや、でもやっぱり護法軍に入るのはちょっと。いろいろと抵抗が」

情けない苦笑いが浮かんだ。

箱を届けるという任務をかわりに果たした俺を犯罪者扱いした連

中のために働けるか、と口走りそうになったがルシウムはバリバリの軍人だったわけで、その肉親の前で護法軍のことをけなすのは行儀が悪いってやつだ。

「いえ、そういうわけにはいきません」

「え？」

「直接お話をして、やはり姉の判断は間違っていなかったと確信しました。本営に行きましょう」

リリウムはそう言ったときり、さっさとお茶やら何やらを片付けて外出用の上着を身につけた。

「さ、ついてきて下さい。私と一緒にしたら怪しまれることはありません」

なんだそれは。

リリウムはもう玄関を出て、俺が来るのを待っている。

なんだこれは。あの子、何を言ってるんだ？ 何だこの強引さは。外見はいいとこのお嬢様って感じだが、この勝手に決めてこっちの話を一切考慮しない態度は本当にルシウムそっくりだ。

「イリエ、どうしました？ 早く行きましょう」

いつの間にか俺がチンタラしてることにされている。

何なんだ。もうワケがわからない。

こういう時、俺が取る行動はひとつしかない。わかるだろう？
反論を諦めて彼女に従った。

どういうわけか、俺はこの姉妹に振り回されて、後戻りできない
ところに連れて行かれる運命にあるらしい。

たぶん、今回もそうなる。

41 星霜を経て

リリウムもまた護法軍に所属している人間だった。

彼女は魔法使いで、前線に出る戦闘要員ではなく軍需品にかかわる仕事をしているらしい。

防毒マスク用の浄化霊薬の生産とか、念動射出式の銃や弾丸、治療用の霊薬、魔法刻印素材、合成食料。そういったもの全般を、魔法の力で生み出すのが軍令魔法官マーシャルウオーロックの役目だ。

ルシウムは自分には魔法の才能がって、魔法式義手の扱いが上手かったから護法軍にスカウトされた　と言っていた。

妹のリリウムも同じく才能があり、彼女のほうがより顕著だったそう。幼い時分に修行僧になって、以来ずっと魔法使いとして生き、護法軍として姉とともに『敵』と戦ってきたというわけだ。

そんなわけで、俺は今朝起きた時点では二度と入るものかと思っ
ていたはずの大本営に逆戻りしていた。

まあ……なんと言えはいいのか、釈然としないけど、別に構わな
いと思った。

どうせ行き場もなかったんだ。リリウムに従うのも、ひとりであ
りもなく旅するのも、どっちだっていい。自分の居場所を探すのに
苦労するのはどこに向かっても同じだろう。

とりあえず、リリウムがどこまで話をつけてくれるのか、それ次第だ。

それを見てから決めたって遅くはない。

*

遅かった。

まさか、まさかこんなことになるなんて。

信じられないことを知らされて、信じられないことをしなければならなくなった。

なんでこんな大事なことを言い残さなかったんだ、ルシウムは……。

*

リリウムが誰か係の人間と話している間、俺は別室に通されてぼんやりと椅子に座っていた。

何もない部屋だ。飾り気もないし、雑誌も置いていない。耳鼻科の待合室以下だ。雑誌なんてこの世界ではもつずいぶん前から刊行されなくなっているが。

「イリエ様、こちらへお越しください」

女士官に一礼されて、俺はまた別の部屋に案内された。

昨日まで尋問の対象だったはずの俺が、うって変わってこの扱いたい何がどうなっているんだ？ 腹が立つより不思議だった。不自然といったほうがいいかもしれない。

リリウムが話を通してくれたからだろうか。だとしたら、姉妹揃って軍内での地位はすいぶん高いに違いない。

「えっ、どこ？」

俺は思わず声に出してしまった。

「はい。こちらのお部屋です」

真面目な顔の女士官は、表情を変えずに答えた。俺が案内されたのは、昨日と同じ部屋だった。つまり、トゥルーマイジと將軍らしき男に引き合わされた部屋だ。

まるで昨日の繰り返しのように、そのトゥルーマイジと將軍が入ってきて、俺はわけが分からず立ち尽くした。

「座りたまえ」

そう言っただ俺を見る將軍の眉間には、切れ目を入れたみたいに深くしわが寄せられている。苦虫を噛み潰したような、という慣用句はこういうことをいうのだろう。なぜかわからないが今にも怒鳴りつけてきそうな雰囲気だ。

俺が何かやったか？

いや、昨日の今日で何も変わっていない。

洗いざらい全部話したし、渡すべきものは全部渡している。いまさらこの場に呼び戻されるいわれはないはずだ。

俺はただ目の前に座るリリウムに言われるままこの場についてきただけだ。

「あの、リリウム……これはいったいどういう」

最後まで言い切る前に、背筋が凍った。

左手側に将軍が。

正面にトゥルーマイジがいて。

でも正面にいるのは、顔のヴェールを取った眼帯姿のリリウムだ。

つまり……。

リリウムがトゥルーマイジ？

なんだそれは。

なんだそれは？

*

ニムボロウ総司令は本当に護法軍の最高指揮官だった。

つまり俺は二日続けてこの世界最後の軍隊の将軍と面会したこと

になる。

50手前の恐ろしく目付きの鋭い男は、いま世界を襲うグレイ＝グーの脅威に対応しなければならぬ重責を担っている。

あんまり卑屈になるのもよくないけど、俺みたいな特にどうというところのない運び屋相手に直接話しをしている余裕はそれほどないはずだ。

ニムボロウもそう思っているようで、こんなことに付き合っている場合ではない、という態度を隠そうともしていない。

一方のリリウムはというと、俺と話をしていたときと特に変わったところはないようだった。残された右目で穏やかに俺の方を見ている。

トゥルーマイジという肩書のデカさに彼女に対する俺のイメージが上書きされてしまって、神々しく感じられた。

「イリエといったな。いまから君に話すことは極めて重要な機密事項だ。その上でいくつかの『提案』をさせてもらおう」

「……提案、ですか？」

「そつだ」

將軍はそう答えたが、俺には拒否不可能の命令を下すと言っているようにしか思えない。

「本来であれば契約で厳重に縛るべきだが手間を省かせてもらおう」

「と、言つと……?」

「機密事項を知った時点で君の自由は制限される。軍の許可無く逃げた場合は即時死刑を執行する。そのつもりで聞くように」

「あの、聞きたくないって言つたら……」

「君には自由がある。話を聞くもよし、聞かずに出て行くもよし。ただし君はすでに機密事項を知ってしまった」

ニムボロウ將軍は腕組みしつつリリウムの トゥルーメイジのことをちらりと見た。

「あえて何とは言わないが、君がこの部屋で見聞きしたことを漏らされるのは都合が良くないということだ」

「それって、もう提案を飲むしかないってことじゃ……」

「自由があると言っている。好きにしまえ。我々はそれに対応するだけだ」

つまり、拒否する自由はないってことか。

リリウムに助けを求めようと一瞬思ったが、やめた。この状況にはおそらく彼女も関わっている。間に入ろうともしないということ。もしかすると彼女自身がこの席をセッティングしたのかもしれない。

でも、何でだ?

「では本題に入ろう」

低く、重く、ニムボロウは体を前のめりにして切り出した。

*

リリウムには魔法の素質があり、魔法使いになった。さらなる修行の結果、その素質はものすごいものであることがわかった。

紆余曲折を経て、いまでは護法軍のマイシャルウォーロック軍令魔法官及び護法軍全体の最高顧問の地位にある。 齡19歳。

トゥルーマイジが顔も名前も人数も明かされていない理由がわかった。

何となくもつと神々しい人間離れたイメージを持っていたけど、リリウムは見た目だけでは魔法使いであるかどうかさえ区別がつかない。ごく普通の人間にしか見えない。

例えば暴漢がいきなり現れて銃撃したら、たぶん普通に殺されるだろう。身柄を拘束できるなら、誘拐されてクソみたいな目的に魔法を使うように強要されるかもしれない。

だから徹底的に秘匿されて、どこで何をやっているかさえほとんど明かされないというわけだ。

それを知ってしまった人間は契約で縛って漏洩できないようにするか、手っ取り早く処刑される。だから俺は、言うことを聞かなければいつでも殺すぞと銃口を突きつけられているも同然で、もう後

戻り不可だ。

その上で、本題はリリウムの話ではない。

いや、リリウムの正体も重要なのは重要なんだけどその意味が違
う。

何のことかといえば例の棺桶みたいな黒い箱のことだ。 アーティ純正魔法
ファクト創造物。 ストラテジック・ストロング・ストイジ戦略級不壊金剛箱『禁断』。

あの空っぱの箱に入れるべき荷物がここ、まさにこの護法軍大本
營の地下にあり、そこに閉じ込められるのをずっと待っていた。

あの日、最後の魔法の塔で預けられた箱はひと月以上掛けてよう
やく本来の目的地に辿り着いた。そしてここはまだ終着点ではな
かった。

中身を積んで、さらに運ばないといけない場所があるという。

その役目を誰かが果たさないといけなくて、その誰かというのが
俺だ。

黒い箱は、俺が最後まで面倒を見ることになった。

俺はこっちの世界での3年間、いろいろと諦めて、望まず、抗わ
ず、流されるまま生きてきた。別に初めからそうしようと思っ
たわけじゃない。生き残るにはそうしている方が楽だったからだ。

でも、ここからはそういうわけにはいかなかった。

俺は別の世界から来た人間で、結局のところ部外者にすぎないと
ずっと感じていた。

だけど俺はもう逃れられない。

もう傍観者ではいられない。

*

まず過去の話しよう。

灰が降るよりもずっと昔。

遡ること800年前。

東エーア・メシオン連合王国が隆盛していた時代。

ニューステージ市にまだ**緋瑪瑙の塔**^{オニクス}が健在だった頃。

そこに転移した18世紀のイギリス人、チャールズ・アシュフォ
ードという人物の、数奇すぎる人生の話だ。

4 2 チャールズ・アシュフォードの奇妙な事件

教師をしていたチャールズは当時のイングランドでメソジスト派の熱心な支持者だった、らしい。

この冒頭部分から俺はつまづきかけた。

メソジスト派というのが地球の歴史上の言葉かどうか、自信がなかったからだ。

この世界は言葉が違ってても意思疎通ができて、それは文章でも同じことで、だから古い英文で書かれていても頭に入ってくる。仕組みは分からないがそうなっている。神の祝福のおかげだと言いたいようがない。

とにかくわかることとして、キリスト教への信仰について常に真剣に考えていた人物だったらしい。メソジストというのはたぶんプロテスタント運動の流れのひとつだったと思うんだけど、この辺りは本当に自信がないので割愛させてもらう。

チャールズはある日突然何の前触れもなく地球からこの世界へ転移してきた。30代の頃だったという。

全く突然のことで大いに戸惑ったようだ。まあ当然だろう。俺もそうだった。誰だってそうだ。

少なくともチャールズは俺より幸運だった。

なにしろ当時は毒の灰なんて影も形もない世界、神秘と驚きに満ちた魔法の世界だったからだ。

それがどれほど素晴らしい光景だったかに多くのページを割いていて、その時の感動が読んでいただけで伝わってきた。もしかこれこそが天国か、とまで書いています。

その後彼は世界各地を周り、故郷に帰る手段がないか、自分は何のために魔法の国に呼び寄せられたかを突き止めようとした。この数年で見聞したことを詳細にまとめている。ファンタジー旅行記だ。読み応えがあった。

800年前の時点ですでに魔法文明は折り返し地点を過ぎていて、ずいぶん衰退していたようだけど、それでもいま俺がいる現代の死の世界とは全く比べ物にならない時代だったようだ。

当時は魔法の塔も4本建っていて、魔法の力が今よりも桁違いに強かった。だから高度な魔法でなら戻れるのではないかという期待を抱くのも当然だった。

チャールズは聡明だった。表面上の言葉にとらわれない本質をすぐに見抜いていた。この世界の『魔法使い』とはむしろ聖職者に近く、『魔法』とは神の祝福の表れで、目に見える形で生活を支えているのだと。

『この世界で暮らす人々は主の存在と愛を微塵も疑わない。魔法が存在することそれ自体が神の証明であると考えている。常に神の愛がある。我が聖書の神と同じく』

そんな風に表現して、場所も方法も違えど神の愛は不変であるこ

と手記の中で何度も強調している。

それを追求する内に、チャールズは自ら魔法使いとなることを選んだ。

俺はこのエピソードをすごく意外に思った。

異世界人が魔法使いに成れるなんてありえないと思い込んでいたからだ。

俺は魔法がどんな仕組みで働いているのかも知らない。地球に魔法がないのだから当たり前だ。当然地球出身者には魔法の才能なんてあるわけがない。そう思っていた。

何がどう違うのか、彼が熱心な信仰者だったことと関係しているのか、とにかくチャールズは魔法の素質があつた。

修行にもあつさり順応した。

こつちの世界の一般的な修行僧よりもはるかに早く魔法技術を身につけていったようだ。

かなり高位にまで上り詰め、魔法の実力も頭のキレも業界で噂になるほどの人物になったチャールズだったが、次第に後悔し始める。自分は目的と手段を混同してしまい、あるべき方向とは異なる道に進んでしまったのではないかと。

『魔法という目に見える力を求め、身分を高めることに魔法を使うのであれば、私は腐敗した教会内の生臭坊主と何が違うのか？』

『しかしながらこの世界で目にし、自らが扱えるようになった魔法の力は腐敗とは別のものであるはずだ。それを突き止め無くしてはならない。我が信仰に誤りなきことを証さなければならぬ』

このあたりの感覚は、難しい問題だ。

何かを熱心に信じていることが人生の中心にある、という感覚を特に意識したことはない俺と、信仰のあり方を常に命題にしてきた18世紀のチャールズ・アシユフォードの間は、地球と異世界の隔たりと同じくらい違っているかもしれない。

チャールズは魔法と魔法使いとは何者であるかをもう一度徹底的に定義しなおし、魔法を行使することの本質を考えた。信仰心であり、好奇心でもあった。ひとりの人間として抑えられない衝動が彼の背中を押した。

チャールズは半端を許さなかった。

信仰か、魔法か。聖書の神か、魔法の神か。両者は同一か、別物か。

葛藤を抱えながら、目に見える形で顕現している魔法の方が、より神の真実に近いのではないか　という、迷いのようなものが手記から浮かび上がっていた。

熱心な人間は方向が変わっても熱心になれるらしい。

悩みつつもチャールズの魔法への適正は目覚ましいものがあって、ついには当時のトゥルーマイジとの面会を許され、縞瑪瑙オレックスの塔の力を高い優先順位で使用できる権限まで授かった。遅咲きの飛び級っ

てところだろうか。

40を前にして、彼はふたつの神が頭の中で統合できないまま、魔法の塔とある純正魔法創造物の制作を依頼された。アーティファクト

重要施設防衛用の自律思考型ゴーレムという、当時のチャールズとしてはそれほど難しくない依頼だった。

悲劇の始まりというのなら、このゴーレムがきっかけになった。

チャールズはゴーレムの製作途中に『おかしく』なった。

信じられないことだけど、彼が『おかしく』なったせいで、つまり彼ひとりのせいで、オニクス縞瑪瑙の塔は破壊された。地球で例えると、自由の女神を個人で破壊するようなものだ。

チャールズはテロリストになってしまった。

チャールズの身にいったい何が起きたのか？

話はもう少し続く。

4 3 樹を巡る二者の対立

護法軍総司令官ニムボロウ將軍と、ルシウムの妹で実はトウルーメイジだったというリリウム、そして油断のない目つきの護法軍軍人数名に囲まれて、俺は大本営地下にある牢獄と金庫を組み合わせたようなデカイ檻の前にまで連れて来られた。

鉄格子にぐるりと囲まれた空間は広い。たぶんコンビニ2店舗分はある。

鉄格子とは言うものの、太さが尋常じゃない。電柱みたいな鉄の柱が縦横に組み合わさって出来ている。おそらくその材質もただの鉄じゃなくて、魔法刻印の入った強化金属だろう。

「これが『狂える人形遣い』^{アイティファクト}チャールズ・アシユフォードの遺産だ。800年前に生み出された純正魔法創造物。^{ブラインド・ガーディアン}光なき守護者の一体だ。^{ハンドレッド・ストラングラー}百の手と呼ばれている」

ニムボロウ將軍が険しい顔で檻の中を遠巻きに覗きつつ、言った。

「イリエ、どうぞ中を」

リリウムにそう言われ、俺は腰の引けた姿勢で太い鉄格子に近寄って、隙間から中にあるモノを見た。

檻の中央で重そうな鎖がからみ合って、小さな山ができています。これがアイティファクトなのか？

「そうではない。鎖が絡んで動けなくなっているのだ」

目を凝らすとその意味がわかった。

鎖の山から、マネキンのような『手』が何本かであらめな方向に飛び出している。腕だけで、頭や足はない。見えるだけでも何本か、鎖のせいで見えない腕も何本かあるだろう。『百の手』といわれれば確かにそんな感じはする。

ずいぶん念入りだ。鎖で簀巻きにして、そのうえ檻に閉じ込めるなんて。

「鎖で巻いた上で閉じ込めないといけないからだ。これの動きを封じ込めるために兵士たちの命がどれだけ奪われたか。詳しく聞きたいか？」

ニムボロウ将軍の眼光は鋭く、俺は苦笑いして遠慮した。

*

俺はあることに気付いた。

あの黒い箱に護法軍がこだわって、最終的に部外者の俺に託してまで送り届けたことの意味も、この『百の手』にあるのではないか。

あの黒い箱、アーティファクト『禁断』は、定められた方法で開けない限り破壊不能だという。外からも、内側からも。その中に『百の手』を封印してしまえば、こんなごつい檻を使う必要はなくなるはずだ。

「おおむね正解だ。『百の手』は護法軍の本営を建設する際に編瑪クマの塔跡地から偶然発掘されたものだ。盲目の守護者の名の通り、誰も彼もを区別せず百の手を伸ばしてひとり残らず絞め殺す」

ひとり残らず絞め殺す？ 確か重要施設防衛のための自律思考ゴーレムという話だったはずだ。でもそれじゃただの無差別殺人マシンだ。

チャールズは誰を殺し、誰を通し、誰を排除するか区別する方法の実現に悩んでいた。つまり基準のことだ。

合言葉でもなんでもいいはずなのに、チャールズ・アシユフォードはもつと完璧を求めた。これまでにない、画期的な手段を、究極的な答えを求めた。

人間と人間でないもの、敵意を持つものと敵意を持たないもの、善と悪、義人と罪人。

魔法を使うもの、使えないもの、その目的。一体何を基準に敵と味方を区別させればいいのか？

ゴーレム内部に自立思考型人工靈魂を封入するのはいいとして、そのプログラムの最も初期段階にあたる『人間と人間でないもの』を分ける部分。そこさえクリアすれば、あとは思考内容の調整でなんとかなるはずだ……。

ここまで来ると行き過ぎじゃないかと俺は思った。

手記の記述を追う限り、チャールズは、通していい人間と排除すべき人間の違いをゴーレムに判断させる手段というよりは、別のも

のを追い求めているようにしか思えない。

それは人間と人間以外を区別する者はなにか、そして善と悪とはなにかという宗教的な問題を、高性能防衛ゴーレムの制作の最中に考えすぎていたようだった。

それが間違いの始まりだった。

「何かが彼を狂気へと駆り立ててしまったの。でもそれが何か、800年の歳月を経てもわからない」

リリウムが音もなく俺の横に来て、手元のウィジャ・メモリボードを見るように促した。

「手記の残りの部分は、どういうわけかほとんど読み取れなくなっているでしょう？ 文字も言葉もなんであれ意味が通じるはずなのに、いったいどういう方法を取ったのか、彼は神の祝福を回避して記録を残している」

俺はリリウムの言葉に従い、手記の大半を飛ばして後ろのページを開いた。

確かに、前半のページに比べれば歯抜けのように『読めない』文や単語が出てくるようだった。『読めない』というのは、言語を超えて意味が頭のなかに入ってくる魔法の作用が働かないという意味だ。

ただ、リリウムの言うような『ほとんど読み取れない』ようには思えなかった。

もしかしたら、これは神の祝福とは少し違う問題なのかもしれない。

俺は地球人で、曲がりなりにも英語教育を受けていた。古い英文であっても単語を拾ってニュアンスを理解するくらいならできる。

そのせいか、他のページと比べて極端に『読み取れない』ことはなかった。

つまりこういうことだ。

この世界の人間には、たとえリリウムのような大魔法使いであっても読めない手記の内容を、俺だけが読める可能性がある。そういうことになる。

*

『私は聖書の神に信仰を捧げた。魔法の神に信仰を捧げた。ふたつの神はその本質において同じであると私は信じた』

『夏と冬で太陽のあたたか味が違うように、我が故郷とこの世界では差し伸べられる愛もまた異なるだろう』

『しかし、私は知ってしまった』

『なぜもっと早くこのことに思い当たらなかったのだろうか？』

『私は激しい嫉妬と憎しみを抱いてしまった。おお、お許し下さい。私はもう後戻りできなくなってしまった』

『私はもう魔法の力を身につけてしまった。元の子羊ではいられなくなってしまうた』

『我らの祖は神の庭から実をもいだ。罰せられ、罪とされた。では彼らはどうか？ 魔法の神は彼らに何を』

『罰せられてなどいない。我らは有罪で、彼らは無罪』

『やはり、そうだ。生まれつき違うのだ。そうであるならば、私は私の叛乱を始めなければならぬ。私と私の運命への叛乱を』

『主よ、お許し下さい。Original Sinをもたぬ全ての者、汝らに災いあれ』

*

Original Sin? オリジナル・シン?

シン……罪? オリジナルの罪ってというのは……『原罪』のことか?

生まれた時から人間は罪を背負わされているっていう、例の勝手な言い分だ。

原罪か。

原罪をもたない全ての者を、チャールズ・アシユフォードは呪った。

この世界の神話ではバベルの塔みたいなものを建てても怒られる

どころか褒められて、魔法の力を与えられた。

庭に生えてた知恵の実を食った食わない程度で人間を楽園から追い出した懐の狭い誰かに比べれば、ほとんど甘やかされていると言ってもいい。

そして、手記の記述を読む限りチャールズは同じようなゴーレムを多数制作して、それを従え、たったひとりで叛乱を仕掛けた……。

『狂える人形使い事件』という名前で呼ばれるテロのせいで、^{オニ}編瑪^{クス}の塔は崩壊した。魔法の塔に立てこもったチャールズは当時のトウルメイジと高位魔法使い30人余を殺害。強力無比なゴーレムを鎮圧するための激しい戦いで、その頃でも世界で四本しかなかった魔法の塔が失われた。

ひとりの異世界人が、ひとりの地球人が、信仰と魔法で揺れ動いた男が、人類全ての財産を奪ってしまった……。

無茶苦茶だ。何でそんなことを？ 何のためにそんな破壊活動を仕掛けたんだ？

世界のすべてを敵に回して、そんなことをして行き着く先は自分が全人類どちらかが死ぬまで終わらない。理解できない行動だ。

「原罪を持たない者って、要するにこの世界の人間全員のことじゃないか」

俺は深く考えずにつぶやいただけだった。

でもその瞬間、『百の手』の檻を取り囲む全員にざわっと緊張が

走った。

「待て、何と言った？ 聞き捨てならんぞ」

「まさかイリエ、あなた『ゲンザイ』の意味がわかるの？」

「どういうことだ？ お前はチャールズ・アシュフォードの記述を理解したのか？」

「教えてください、ゲンザイとはどういう意味なのか」

ニムボロウとリリウムが、交互に俺を質問攻めにした。

何なんだこれは。どうなってるんだ。

俺は反射的に曖昧に笑ってごまかそうとした。

それが通じる状況ではなさそうだ。

*

知っている範囲のことを説明させられた。

ちょっと信じられないことだけど、ニムボロウも、リリウムも、他の人間も、彼らはみんな原罪という言葉の意味を全然知らなかった。

800年間、ずっと謎のままだったチャールズ・アシュフォードの動機を、適当な語学力しか持たない俺が解いてしまった。

そう考えると、チャールズの葛藤を少しは理解できたような気がする。

この世界の人間は、聖書の神が人間に架した原罪を全く知らないまま魔法の力という物凄く強大なものを与えられている。

一方、俺達が元いた世界では、生まれる前から罪を背負わされ、ずっとその罪を背負い続けて生きている。

どう思う？ 俺ならそんなズルい話があるか、と思う。

かたや神に祝福されて魔法の力を授けられ、かたや樂園から追放されて罪を背負わされ。

この神が、もし同一人物だとしたらひどいえこひいきだ。別人なら聖書の神はねちねちと昔のことを根に持ついやなやつで、魔法の神は人間に出し惜しみをしない大物ってことになる。

俺ならそう解釈する。

でも俺と違ってチャールズは真面目な、熱心な、本当に真剣な信仰心を持っていた。適当なたとえ話じゃなく、信仰が根底からくつがえるような気分をずっと味わいながら、それでも神と魔法の追求を行っていた。

そのあたりの断絶みたいなものが我慢できなくなって、それでも魔法使いと信仰者の両方であり続けることしかできなくて、ついに原罪の有無という根本的な差に思い至って、最後には心に亀裂が入ってしまったらしい。

理解できる話　いや、やっぱり俺には理解できない。

チャールズは結局はこの世界でただひとり『地球の人』であり続けようとしていたんじゃないだろうか。

いいとか悪いとかじゃなく、しっかりしたアイデンティティがずっとあって、そこに魔法使いとしての新しい価値観が入って、ふたつが混じらないままその瞬間を迎えてしまった。

俺が早々に諦めてしまったものを、彼はずっと手放さなかった。

理不尽だ。

俺も、彼も、自分の意志とは関係なくこの世界に飛ばされただけなのに、何で俺達ばかり色んな物を失わなきゃならないんだ？

これじゃあ灰があってもなくても変わらないじゃないか。

なんで俺達だけが失い続けるんだ。

44 ブラインドガーディアン

狂える人形使いとなつてしまったチャールズ・アシュフォードが
しでかしたことは到底許されることなく、当時の軍隊が制圧に
乗り込んだ。

ほとんど内戦状態に陥るほど、チャールズの人形は猛烈に強かつ
たという。

彼がまともであれば、いくらでも軍事用に採用していたのにと時
の権力者が才能を惜しむほどだったらしい。

ニムボロウ将軍たちは当時の権力者たちの見解を支持した。

過去の遺産である殺人人形を支配下に置くことができれば、護法
軍の慢性的な人手不足を解消できないかという期待だ。

でもそれは無理な話だ。人形たちは原罪を持たない人間、つまり
地球人であるチャールズ本人以外の全てを殺すようプログラムされ
た存在だったのだから。

実際、地下から発掘された百の手は800年の年月を経てまなお
凶悪に動きまわり、そのまま自由にさせれば護法軍本営を血の海に
沈める勢いだったという。

アーティファクト

純正魔法創造物も経年劣化はするはずだけど、本当に優れたもの
は千年単位で動作するのだそう。わかるだろうか？ チャールズ・
アシュフォードは本当に優れた魔法使いだったんだ。

使えるものなら何とか使いこなす手はないかと護法軍はチャールズの手記を解析するが、『原罪』という言葉が立ちはだかった。

原罪の概念が理解できなかつたからだ。

だから800年後の今、発掘された百の手も護法軍の戦力としてハンドレッドストラングラーは使い物にならず、かなりの犠牲者を出した上で強引に身動きを封じるしかなかった。

再度封印を施されたものの、いつ暴れだすかわからない危険がある。だから同じく純正魔法創造物の黒い箱『禁断』に押しこめ、どこかに捨ててこようと誰かが考えた。

捨てる、というのは単に廃棄するという意味ではない。グレイIIグーの出現を予見していた護法軍首脳陣が『敵の巢に殺人人形を投入し、皆殺しにさせる』という一石二鳥の作戦を立案したからだ。

もはや死地である灰に埋もれた平原に百の手が置かれれば、少なくともその周囲はグレイIIグーや灰賊などの暗躍を防ぐことができるだろう……。

一応、理には叶っていると思う。

俺ならもう一度深い穴をほってそこに捨てて見なかったことにした方がいい気がするけど、戦力不足をなんとか補えないかという意図は痛いほどわかる。これ以上人死を出していると本当に軍を維持できなくなりそうな状況だからだ。

もし、自軍の兵士ではなく敵の怪物だけを殺せる兵器があればそ

の獲得に予算を割くのも決して馬鹿げた話ではなく、ルシウムはその密命を受けた士官ということだったのだ。どうりで羽振りがよかつたわけだ。

「ルーシイ姉さんはこの危険な人形を閉じ込めた後、その足で生存不能領域に開放してくる予定でした。全部の任務が死と隣合わせで……結局死んでしまいましたけど」

リリウムは鉄格子に手をおき、鎖で縛り付けられた百の手を残った右目で見つめた。横顔が怖い。姉と同じくらい怖い。

「それでも、あなたは姉から義手を受け取り、それを私の所まで持ち帰って来てくれました」

「それは……妹に直接渡してくれ、ってルシウムに言われたから」

「はい。ですから、私はあなたにチャールズ・アシユフォードの手記を読ませ、この檻の前にも連れてきたのです」

「えっと……その、それはどういう意味で」

「ルーシイ姉さんの義手は姉さんの命です。姉さんの信念全てがこもっている」

リリウムは俺の台詞のすそを踏むように言った。人の話を最後まで聞かず、言わせないのは姉妹揃って同じ癖だ。

「だから私は信用することにしました。ニムボロウ將軍には、ちょっとお気に召さなかつたようですけど」

ニムボロウは無言で俺の一挙手一投足を睨みつけている。召されていないようだ、確かに。

「そして……これは正直なところ魔法の力でも完全に予見できていなかったのですが、あなたは……」

リリウムの言葉の途中で、金切り声がいきなり響いた。何の気なしに彼女が檻に背中を預けた、その拍子のことだった。

バチバチバチつとすごい音がして、檻の中で動きを封じ込められていた『百の手』が、鎖を引きちぎっていた。

名前の通り、その身体は無数の人形の腕で出来ている。胴や頭は見当たらず、とにかく何本もの手だけで構成されているようだ。

手は無数の足になり、あるいはつながって大蛇のようになり、そうかと思えば五本合わさって巨大な拳を作りる。変幻自在だ。

『百の手』は無数の手をあやつり、原罪なき者を自動的に殺害しようとする。

この時は指を使った。

無数の手の無数の指を直列につなぎ、長い一本の棒にした。その先端は小指の細さで、丸太のような鉄格子の隙間から誰かを突き刺すことなどたやすい。

矢のように飛ぶ直列の指は一直線にリリウムに迫った。位置、速度、体勢、いずれも彼女の身体を貫通する条件をクリアしていた。

俺は何かを叫び、リリウムとの距離を転がるようにして詰めた。ここで彼女まで死んでしまっただけではルシウムに申し訳が立たない。これだけは諦められない……。

でも俺は見当違いをしていた。

彼女は軍人の姉を持つか弱い妹ではなく、トゥルーマイジなのだ。魔法使いの頂点に立つ人間だ。

800年前の狂える魔法使いが作った殺人人形がいかにも強力とはいえ、簡単に串刺しにできない。

指でできた槍は鉄格子の隙間からリリウムを突き刺す前に方向をねじ曲げられ、彼女の肩をかすめただけにとどまった。それでも服ごと皮膚を切り裂かれ、血が滲んだ。

百の手が自動的に人を殺すなら、リリウムは自動的に自分に向けられた攻撃をそらす魔法を身にまとっている。念動魔法のマントのようなものが指をはじき、事なきを得た。

その場にいた全員が、俺も含めてため息を漏らした。最悪の事態は免れた。

「大丈夫か、リリウム!？」

一番近くにいた俺が、彼女をかつさらうようにして檻から引き離した。思ったより傷が深く、二の腕が血に染まりつつあった。

「あ……大丈夫、です」

さすがにショックを受けたのか、リリウムは舌をもつれさせるようにして言った。

次の瞬間に本当にショックな出来事がおこった。

先端を弾かれただけの直列指はまだ生きていた。

蛇のように鎌首をもたげ、再び指の槍が飛んだ。

その穂先は、今度は俺を狙っていた。眉間に突き刺さって脳みそを貫通されるコース。突然のことだったので、死の恐怖は感じる暇もなかった。

その後どうなったかというと、何も起こらなかつた。わかるだろう？ チャールズ・アシュフォードの作った殺人人形は原罪を持たない者を殺すように作られている。

原罪を背負っているらしい異世界人の俺は、800年前に仕組まれたプログラムのお陰で命拾いした。

眉間の先わずからミリで指先は止まり、数秒の後にすると引き下がって檻の中央で無数の手の中に紛れた。

俺はどつと冷や汗をかいて、その場にへたり込んだ。

でもこんなのは序の口だ。

本当に厄介なことはこのあとだ。

命拾いした俺は、原罪があることをその場の人間に知られてしま

ったからだ。

*

あああ、最悪だ最悪だ、最悪だこんなの！

俺は偶然が重なってこの場にいるだけの、ただの運び屋なんだ。

18世紀のイギリス人がしでかしたことなんて関係あるか！

やめてくれ。俺にそんなものを背負わせないでくれ。

頼むよ、俺はあんたらの期待にこたえるなんて無理だ。

無理に決まってるだろう、俺が殺人人形の飼い主になるなんて！

*

どうやら俺はこの世界にきて以来、ウロコ馬とか、陸王サイとか、人間以外にモテるらしい。

そのせいで百の手からも信頼を得てしまった。

800年ぶりに出会った主人と同じ原罪の匂いを俺に感じた殺人人形は、俺の体にまとわりついて殺戮の命令を待っている。

チャールズ・アシユフォードの生み出した殺人人形・光なき守護者アンシリーズの1体である百の手。ハンドレッツ・ストラングラー

こいつは原罪なき人間を殺すことを800年経っても忘れていな

かつたんだ。

原罪のある俺のことを主人と勘違いしてもおかしくはない。少なくとも主人と同類だと思っっていることは間違いなさそうだ。

懐かれているのはわかる。

頭をなでられるのを待つペットのように腕の群れが俺の足元をうねうねと這いまわっている。もちろんこいつは腕しかないので撫でる場所がわからない。おまけに、すでに発掘されてから護法軍の兵士を何人も殺している。そんな危険な代物を、気安くなでてやるわけにはいかないだろう。

それ以前に、俺自身が殺されるかもしれない。いまは懐いていても、俺が本来の主人ではないと気付いてふざけるなど首を絞めに来る可能性も考えられる。なにせ800年だ。プログラムが壊れているかもしれないし、本当は別のプログラムが仕込まれていてやっぱりいきなり俺を殺すかもしれない。

「これは奇跡か？ それとも悪夢か？」

ニムボロウ将軍が、檻の中で俺にじゃれつく百の手を見て額に手を当てた。めまいでも起こしているようだ。

「ですから、私は最初から言っていたではないですか将軍。姉が義手を託した人物ですもの、必ず信用に足る方だと。もっとも、こういう形とは思いませんでしたけれど」

檻から遠巻きに見ているリリウムはそう言って微笑んだ。ニムボロウが許せば、檻の中に俺たちと一緒に入ってきそうな雰囲気だっ

た。

一方、百の手と一緒に檻の中に閉じ込められている俺は途方に暮れている。危険を考慮しているのはわかるが、何も殺人人形と一緒にすることはないだろう。

本当に最悪だった。地球人だからという理由でこんな目に会うなんて、こんなもの予想できるはずがない。

おまけにもうひとつ。

俺はとうとうこの世界の人間ではないとバレてしまった。

隠そうとしていたわけじゃない。面倒になるから自分からは口にしなかっただけだ。

それでもやっぱり隠しておくべきことだったようだ。

まさか、まさかこんなところで後戻りできない場所に追い込まれるなんて。

45 寂しさを持ち寄って

俺は志願させられて、護法軍の軍人になった。

表向きの肩書は馬匹管理長とかなんとかで、軍事用の馬の調教や厩舎の設備責任者を兼ねた役割　ということらしい。結構上の立場だ。

特別上級士官。イリ工特別上級士官と呼ばれるようになってしまった俺は、その表の仕事をこなしつつ秘密裏にある計画の中心に据えられる羽目になった。

馬を育てて調教するだけなら得意な仕事だ。護法軍の中でもやっていけるだけの自信もあったし、俺個人がいままで培ってきた努力を十分に発揮できる場でもある。

ただ殺人人形・百の手の飼い主として目をつけられたのは俺のハンドレッドストリングラー実力とか才能とかそういうものとは一切関係ない。原罪がある、つまり地球人であるということだけが役に立つとみなされている。

はつきりいって面白くない。

結局のところ百の手は殺人人形なのだ。

いくら俺になついたらところで、原罪なき者を皆殺しにしようとする本能みたいなものは残っている。それを我慢させることはどうも無理なようだ。

たとえば対フィンド戦に参加させたとしても、フィンドよりも護法軍の味方をブチ殺すのでは被害が増すだけだ。

だから……。

ちくしょう、なんでそんな話になる！

俺はニムボロウ將軍を始めとした軍首脳陣の決定に耳を疑った。決定だ。検討じゃない。

あいつらは、俺『だけ』を戦場に放り込み　　いいか？　俺だけ、俺ひとりだけだ。俺ひとりをフィンドとグレイ「グー」ひしめく戦場に放り込んで、その性能を確かめることにした。

こんなもの、厄介払いにきまっている。

危険極まりない百の手が灰の中で暴れてくれるならそれで十分。俺が死んでも護法軍の腹は痛まないし、万が一グレイ「グー」を撃退する能力が認められればそのまま同じように転戦させる気だ。

どう転んでも俺には悲惨な末路が待っている。護法軍は降って湧いた幸運をとりあえず試しに使ってみるかという感覚に違いない。

だから俺は憤慨し、一日中いらついで馬の世話にも身が入らない。

ぼんやりと腰掛けているところに、チャンプが大きな体で近づいてきて横顔をぶつけてきた。

半端じゃない馬体重のある陸王サイのパワーは、俺の体を横倒しに転ばせた。

てめー、どうでもいいけど俺様の世話くらいしやがれ。シワ
んところに灰が残っててピリピリするんだよ。

そんなふうな目で俺を睨みつけた。

「悪い。ちよつとな」

会話が成立しているかのように俺はチャンプの足元に踏み台を置いて、肩から背中をブラッシングしてやった。

平和な時間だった。

灰も降ってこないし、慌ただししい出兵の様子もない。グレイ＝グ
ーの暗躍はどこか遠い場所の出来事のような気がする。

本当にそうだったらいいのに。

ラルコ、ルシウムは死んだ。グレイ＝グーのせいだ。

「俺だって、仇が討てるってんならそうしてるけどさあ。でも……」

ふん、女々しい野郎だ。お前の代わりにあの怪物どもを踏み
つぶしてやるうか。

「無茶いうな、あいつら死なないんだぞ」

……おっと、客人だぞ。
……だったらあのなんとかいう人形はどうなんだ、あれがあれば

振り返るとリリウムがいた。今日はトゥルーメイジではなく単なる普通の格好をした女に見える。服装がそれらしくなければ、特別な雰囲気をもとっている感じはしない。

「本当に動物と心が通じているのね。魔法を使っても会話までは中々できるものじゃないわ」

「陸王サイの頭がいただけだよ。それに、通じあってるって思い込んでるだけかも」

「でも、それでも凄いなと思う」

リリウムは気安い感じで俺の隣に来て、チャンプのごっこつした肌をなでた。

そこらじゅうから馬糞の臭いが漂っている。俺はもう慣れてしまっているが、リリウムはどうなんだろう。大きなお世話かも知れないがそんなことを考えた。

眼帯をしていない右目は上空の雲の行方を見ていた。

「夜から雨になりそう」

「それも、魔法の力で？」

「まあ、違いますよ。天気くらい何となくわかります」

そういうものだろうか。俺にはよくわからないが、彼女がそう言うならそうなんだろう。毒混じりの雨にふられたら面倒だから、今日は早めに厩舎に引っ込めよう。

俺はどうもリリウムの言うことを簡単に信じすぎている気がする。トウル・メイジという立場の人間が軽々しく嘘をつくはずがないという思い込みもあるが、それ以上に彼女だから信じてもいいという気持ち強い。

ルシウムの妹であるということに同情心があるのか、それとも彼女に惚れたのか？ まあ、確かに彼女は美人だが。

「ねえ、イリエ」

「はい？」

「あなたは本当に別の世界から来たの？ その……」

「チャールズ・アシユフォードと同じように？」

「まあ、そうなるかな。時代も国も違うけど。前にも言った通りだよ。地球っていう、全然別の世界から……」

「魔法の代わりに機械と電子と化石燃料が動かしているのでしょうか？ すごいなあ……どんな世界なんだろう。灰の降る前のこの世界より栄えていたのかな？」

リリウムはまた俺の言葉を最後まで言わせずに、夢見る乙女のように指を組んで片目をきらめかせた。

彼女はまだ19歳だという。

つまり生まれてから今まで灰の降る環境以外を見たことがない。

地球のことはもちろん、自分が生まれた世界の本来の姿さえ想像できないのではないかと思うと、俺は胸の中に泥が詰まったみたいなきな気分になった。

「それで……イリエ。決心はつきましたか？」

「決心？ 俺の決心なんて護法軍は考慮してくれないだろうか？ 武器にするにしても捨て駒に使うとしても、軍は絶対百の手を使ううとするだろうし」

いまは黒い箱『禁断』に隔離されている百の手のことを想像しながら、俺は平静を装った。俺はもうただ灰の毒を恐れているだけの立場ではられない。戦争に巻き込まれているんだ。不安がどうやっても拭えない。

「封印したまま無理して使わなきゃいいものを。勝手なことばっか言いやがって」

「じゃあ、辞める？」

「え？」

「私の権限で計画を全て中止にさせることは……一応できると思う」

「そりゃあ……そう言ってくれるのはありがたいけど。でも、そんなことしたっていずれば……」

全部灰に沈む。俺はそう言いたかったが、口には出さなかった。見ないふりをしていることをわざわざ明らかにしなくてもいい。

「……聞いたよ、北の方でまた集落が全滅したって」

「そうらしいです。防衛にあたっていた護法軍も壊滅だって」

「グレイ「グー」かな」

「そつだと思う。最近はず、この地上を好きなように蹂躪しているらしくって……」

「じゃあ、ますます百の手を使いたいと思うだろうなあ。もう護法軍には余裕が無い。使えるものは800年前の殺人マシーンでも使えってね。そうになると俺にも逃げ場がないってことになる」

俺の少しおどけたような態度に、リリウムは顔を伏せた。気の毒に思ってくれているのかもしれない。思われたくらいでどうにかなるものでもないが、一応嬉しかった。

「では、せめて私も現場で対応できるよう同行します」

「え?」

「最悪の場合でも、私の魔法ならグレイ「グー」を遠くまで追^{ハンニッシュ}難できるし、百の手が暴走した時の制御にも力を貸せるはず」

「ちょ、ちょっとまって待って」

「はい?」

「だって、リリウムはトゥルーメイジなんだろう? 世界であと何人残っているのかわからないけど、その最後の最後なんだろう?」

そんな人間がうつかり外に姿晒したらヤバいんじゃないの？ もし何かあったら、俺はどうすりゃいいの？」

「それなら、あまり気にしないで。私が死んだくらいじゃ、大した影響はないわ」

俺はぽかんと口を開け、何を言えいいのかわからずに開けっ放しになった。

だって、トウルーメイジだ。

世界の魔法を支える3つの要素、魔法の塔、大坑道の秘石、そしてトウルーメイジだ。それがなくなったらいよいよ人間には後がなくなる。

リリウムがそのひとりで、そのリリウムが死んだら……。

「うっん、そうじゃなくて。私、トウルーメイジじゃないの」

「……ん？」

「だから、私はトウルーメイジじゃないの。護法軍最高魔法顧問だけど、トウルーメイジじゃないの」

「だって、あのニムボロウ将軍が『この世に残された世界最高の魔法使い』って……」

「うん、それは本当」

「だったら」

「最高の魔法使いだけど、トゥルーマイジじゃないってこと」

「それは、その……どういう？」

トゥルーマイジはもういないの、とリリウムは残った右目をつむった。

*

魔法使いも老いるのだ。

灰が降り始めてから半世紀。その間、新しいトゥルーマイジはひとりも生まれなかったという。

つまり、この時代のトゥルーマイジというのは灰が降り始める前から生きていた人物ということになる。灰が降り始めた時の年齢プラス50年。

「本当の最後のひとりが亡くなったのはもう10年以上昔なの。それから空白が続いて、私がたまたま魔法の力が強かったから、代理の代理で『今の世界で一番高位の』魔法使いになっているってわけ」

リリウムは寂しそうに肩をすくめた。

彼女もまた自分にはふさわしくない場所に連れて来られたひとりだった。

一番高位といってもそれはこの時代だから言えることで、正式な階級で言えばトップから数えて4番目くらいに当たるらしい。つま

りそこから上はもう誰も生き残っていない。

まだ10代の若さでそこまでの才能を發揮するのはおどろくべきことのはずだ。

でもいまは彼女が事実上のトップを務めなければならない状態で、護法軍に保護されつつ力を貸している協力関係を結んでいる。

問題は彼女自身のことよりも、トゥルーマイジがすでに10年以上不在だったという事実だ。

トゥルーマイジがいなくなると魔法の力が維持できなくなってもうどうにもならなくなる。そう聞いていた。

「実際、もうどうにもならなくなっているでしょう？ もう、どうにもならない」

リリウムはそう言った。皮肉げな言葉だけど本人も俺もそれを皮肉と捉えることはできなかった。言われてみればそのとおりなのだ。トゥルーマイジがいなくなったらもう終わりだ。そう言いつつこの世界の人々は生きてきた。でもついにグレイ「グー」なんて怪物が現れ始めた。本当にもう終わりだ。

「大坑道で死んだと言われているトゥルーマイジは、本当はトゥルーマイジじゃなくて私と同じ上級魔法使いで……でも、命を落としたのは本当。彼女は私の先輩で、なんて言えばいいのか、もうひとりの姉みたいな人でした」

また嫌な話を聞いた。

他人の口から出る言葉はいつだって灰の毒が混ざっている。

明るい話？

そんなものあるもんか。

俺はどんどん落ち着かない気分になってきて、こっちに来てからの3年間を全部話してやろうかと思ったが、思ったただけだった。

俺の話なんてどうでもいいことだ。リリウムに聞かせて何になる。同情でもして欲しいのか？

して欲しいのかな。

して欲しいのかもしれないな。

足元に雨粒が落ちてきた。

雨音の風情も、毒を含んだ雨だと思つと気が滅入るばかりだ。

*

一夜明けて、俺は出征した。

百の手が入った箱を荷台に載せ、チャンプの引く馬車を駆り、グレイグーがブドウをすり潰すみたいに人間を殺している工場都市ネモレイドに向けて。

46 工場都市ネモⅡレイドにおける虐殺

工場都市ネモⅡレイドは魔法を使わない生活物資を作る大規模な拠点だった。

魔法はあらゆるものを生み出すけどそのためには魔力と秘石が必要になる。なので魔法でなければ生み出せないもの以外は人間の手に頼ることになる。

灰が降りだしてからネモⅡレイドは何度かの略奪を受けた。でもその都度返り討ちにして職人の意地を守り通してきたという歴史があった。

その頑なな人間の意志を、ベトンキャスター 混凝術士と狂人兵団との混成部隊が塗りつぶした。

護法軍でも重要な打撃力を担うスベルブラスター 魔砲撃手に匹敵する呪われた灰魔法が街の防毒隔壁を乗り越えて毒の灰を撒き散らし、住民の何割かがその時点で死んだ。

狂気が完全に彼岸へ行き着いた灰賊の群れがその隙に襲撃を掛け、自警組織も駐留護法軍も死体になり、あるいはフィードになった。何割かは食料になった。

控えめに言っても悪夢の光景のまっただ中に、俺は馬車で乗り込んだ。

武器は渡された鎮圧杖と、ライオットランド 粒状霊薬弾を装填されたショットガン。

そして荷台の黒い箱『禁断』の中に入った殺人人形『百の手』。

俺の味方は馬車を引く陸王サイのチャンプだけだ。

街まで同行してきた護法軍は、百の手の暴走を恐れて距離をおいて望遠鏡で眺めている。俺が死んだら改めて街に突入するつもりだろう。

リリウムは護法軍の部隊に守られている。

彼女自身は俺と一緒にネモレイドに乗り込むつもりだったが、それだけはやめてくれと護法軍に制止され、留まった。

どういうわけか、俺はこの無謀な突撃に積極的だった。

いや、積極的とまで言うところとちょっといいすぎだ。

ただ、もう引くに引けないぞ、という空気が指で触れるぐらい近くまで迫ってきて、逃げ出すよりは戦ったほうがまだマシだという気分になっていた。

トゥルーマイジがもうこの世にはいないという話は自分で思うよりショックが大きかったらしい。

俺は自暴自棄になりかけていた。

ここで死ぬならしょうがない。そんなふうに思った。

それでもやっぱ俺は自殺志願者じゃないから、なるべく生きよ

うと思ったし、ルシウムの遺言が俺を引き止めた。

『君は生きられるだけ生きてくれ』。

だから俺はなるべく死なないようにした。

代わりに、敵の多くが死体になった。

*

心臓の。

動悸が。

一向に収まらない。

防毒マスクの内側は白く曇って、水滴が垂れて外が見えない。

俺は息を止めたままマスクを外し、灰を吸わないようにして空っぽの胃から胃液を吐き出した。

*

俺が何をしたかという地震で逃げ回っていただけ。

その代わりに百の手が活き活きと動きまわり、灰賊の首を二回転させてねじ切り、混凝術士の手を握りつぶし、もう一本の手で上腕を握りつぶし、次の手で肘を逆に曲げ、二の腕の肉をえぐり鎖骨を手刀で砕いてから喉仏を引きちぎった。

殺人人形は原罪を持たないものを無制限に殺す。

灰賊なんて存在すること自体が罪みたいな連中だけどそれでも原罪は背負っていない。

だから、俺がわざわざ何かを指示する必要なんてなかった。

ざわざわと無数の腕を蠢かせ、触手か何かのように伸ばしてはその先にあるクズどもの首を掴み、絞め殺した。

そこまではよかった。

あらかた敵が血の海に沈んで静かになってから、おそろおそろ顔を出した生き残りの住民も殺した。

その時の俺の絶望たるや……。

結局、数人の普通の人達を殺した百の手の前に俺が身を投げ出すようにして、それでようやく止まった。

間接的とはいえ、俺は普通のまともな人間を殺したことになる。

どうすればいいのかわからない。

*

護法軍は正しい判断を下した。

百の手は単体では本当にただの殺人マシンだけど、俺とペアで使えばそれほど被害を出さずに敵だけを排除できる。

だから俺は、もう全く逃げ場を失って、敵も味方も普通の人も間接的に殺害する殺人マシンの御者になった。

隅っこのほうで怯えて身を隠すだけの情けない御者に。

*

「ずいぶんやつれたみたい」

リリウムが心配そうに声をかけてきた。

「言われなくても自覚してるよ」

本当はそんな憎まれ口なんて叩きたくないのに、俺は酷いクマのできた目をそらすように言った。いまは彼女のことを直視できなかった。

「私の霊薬。使えば少しは気分が楽になるわ」

「要らない」

「どうして？」

「クスリで慰めようって？ あんたも護法軍と一緒に目的のためなら何でもするんだな」

「そんな風に言わなくても……」

「え？ ああ、そうか……そうだな。それもそうだ。ごめん。うん、

「ごめん」

俺は少し頭を冷やした。リリウムは別にいびりに来たわけじゃない。悲惨な戦闘で精神的にきている俺を落ち着かせようと話しかけてくれているだけだ。彼女に非はない。

俺は何度も謝って、リリウムの霊薬を受け取った。

その日はネモレイド市のホテルをあてがわれた。

霊薬は、ベッドサイドに置いたまま使わなかった。

*

殺戮の日々が続く。

と思ったらそうはならなかった。

次に俺が投入された戦闘にグレイグーが現れたからだ。

最悪中の最悪の光景だった。

現れたのは『オース』という名前の付けられたグレイグーで、巨大な全身鎧を身につけた騎士の姿をしていた。その体は灰を何層にも固めた一種の石像で、堅く、重く、不死だった。

3メートル近い巨大な鈍器を振り回し、逃げ遅れた兵士をミンチに変えた。

固めた灰の身体は簡単には傷つくことなく、壊してもすぐに灰が

埋めてしまう。腕を落としても首を粉々にしても足止めできるのはほんの数分だけ。熱も冷気も効果はなく、銃も爆弾も追難魔法もとどめを刺すことができなかった。

グレイ「グーは殺せない。」

その相手に俺は百の手を連れて突入し、戦わせた。

800年前からいまだに動いている純正魔法創造物だ。アーティファクトグレイ「グーであろうとも立ち向かえるはずだ……。」

護法軍も俺もうつすらと期待していた。

一応言わせてもらつと、善戦はした。

だけど敵は、グレイ「グーは何をしても殺すことができなかった。

最初の戦いで勝利したことで、俺自身さえ勘違いしてしまった。

事実はひとつで、グレイ「グーは死なないんだ。

幸い、俺は生きて帰還することだけはできた。

ちぎれた左手の薬指と小指は、灰に埋もれて捨つことができなかった。

*

負け戦は気が滅入る。

護法軍は世界中でこんな気分を味わっているのかと思うと、さすがに頭の下がる思いだった。

包帯で巻かれた左手が熱を持って疼いている。

これほどの重傷は、こつちの世界に来てからの3年で受けたことがない。

痛みよりも精神的ショックが大きい。

それなのに、俺はまだ百の手の性能を信頼して『もしかしたら次は勝てるかもしれない』とどこかで思っていた。

これだけ気分が悪いのに、もしかするとどうにかできるかもしれないという、馬鹿げた希望が頭の中のほんの小さな領域に宿って、そこから離れようとしない。

護法軍の首脳陣も、百の手を見てそんなかすかな希望を抱いているに違いない。

やめろ、そんなのは文字通り希望的観測でしかないんだ。真実はこの左手だ。次はどこを失うことになるのか、想像してみる。

そうやって自分に言い聞かせた。

それなのに、俺はまだどこかで……。

47 諦めること諦めたその先に

大坑道防衛線に駆り出されて2週間が過ぎた。

護法軍大本営からだとい位置にあるけど、今回は馬車ではなくフラッシュカーゴ断続的瞬間移動駕籠の使用が許可されて、およそ2時間ほどで到着した。

魔法による短距離瞬間移動を何度も繰り返して飛ぶカーゴは、今の人類に残された最速の移動手段だ。

前回大坑道を襲った『フィードの女王』は当時大坑道内部の地下都市イレイカにいた高位魔法使いによって追難パニッシュされた。

グレイ「グーが恨みという感情を持っているかどうかわからないが、今回襲ってきたのもまた女王だった。

俺は本格的な襲撃が始まる前にリリウムと一緒に大坑道に着き、早速百の手を取り出し いや、取り出せなかった。

百の手は一貫して原罪の有無を嗅ぎ分けて殺す殺人人形にすぎない。迂闊に黒の箱『禁断』から出せば坑道の中で虐殺が起きてしまっただろう。

やがて、蚊柱みたいに大量のフィードが襲ってきた。どう控えめに言っても絶望的な数だった。

俺は最前線まで上がり、正面から百の手を解放し、味方ではなくフィンドをねらえと固く言い聞かせた。

どこまで理解したのかわからないけど百の手はフィンドを殺しに殺した。

無数のフィンド一匹一匹を、無数の伸びる球体関節の腕が捕まえ、握りつぶし、殴りつけて顔面を陥没させ、下あごを引きちぎり、四肢を無茶苦茶に捻じ曲げ、はらわたを引きずりだした。

化け物と殺人マシンのすさまじい殺し合いだった。

大坑道の入口前は血の海と化した。比喻でなく、赤い波がひたひた足元まで押し寄せるほどだった。

到底直視できない残虐なものだったが、少なくともこの緒戦で味方の兵士は殺されることなく、むしろ百の手の間合いにすっかり入った兵士が鼓膜を破られる怪我を負ったくらいで済んだ。

ほぼ完封に近い撃退に、俺も、護法軍も、地下都市イレイカの民衆も胸をなでおろした。百の手強し。人類に勝機あり。そんな言葉さえ飛びかった。

もちろんそんなうまくいくはずがない。

フィンドの女王は、一糸まとわぬ姿のまま血と肉のばらまかれた戦場跡を四つん這いではいまわり、フィンドに血肉を直に口をつけてすすった。全身血まみれになりながら、あさましく貪った。土ごと、灰ごと口の中に入れてもまるで気にしない。

狂気の姿に護法軍は魔砲撃と機銃掃射を集中させ、血煙の中に女王は消えた。

生死不明のまま時間が流れ、6時間後に女王は血まみれの戦場から生えるように立ち上がった。

その腹は風船のように膨れ、妊娠している風に見えた。

次の瞬間青黒く膨れ上がった腹が内側から引き裂かれて、中から何匹ものフィンドの子が虫のように撒き散らされた。

血肉をすすって、それを再利用したかのようだった。

グレイ「グーは死なない。

胎はひから子供をぶちまけてもすぐにふさがってしまう。

呪われた子供は素早く兵士たちを襲った。襲われた兵士はフィンドになった。ねずみ算式にフィンドは増え、俺と軍がいくら殺しまくってもまた同じように女王が腹に入れて産みなおす。

狂っていた。

防衛戦というなら、これは人間の正気を守るための戦いだ。

3日間の間におびただしい死体が生まれ、その死体からフィンドが生まれた。

リリウムと軍、地下都市の魔法使いが協力してなお抑えきれなかった。

俺は心底疲れた。

ここまでぎりぎりの戦いを強いられるのか。

百の手でさえ最終的にグレイ「グー」には勝てない。いや、誰がやっても同じことだ。

でも、そんなことはじめからわかっていたはずだ。

たぶん、もう手遅れなんだ。

*

まだいける、残された時間は多くないが、まだ反撃の余地はある、まだ大丈夫だ、これから全てをひっくり返す……。

地下都市の暗い部屋の中で目が覚めて、俺は夢の中で連呼されていた言葉が全部ウソだと再認識した。

ベッドサイドの循環砂時計と、俺の隣で眠っているリリウムの白い肩を見比べて、日の差さない空の下のことをもう少しだけ無視して微睡んだ。

リリウムを腕の中に抱きしめると、寝ぼけた声をつぶやいて額を擦りつけてきた。

彼女が俺と寝るようになったのは同情心からだと思っ。

あいにく俺には比較できる経験がないから、推測しかできないけ

れど。

*

大坑道は人類に残された要のひとつで、世界最後の、本当に最後の油田と同じようなものだと考えて欲しい。陥落すれば燃料も石油製品も使えなくなる。

掘り出される秘石が手に入らなくなれば魔法の力が使えなくなり、まず代用食料の生産がストップすることで致命的な被害がおこるだろう。

もう時間の問題だ。

フィンドの女王による侵攻は続き、とうとう坑道の入り口を完全に占拠された。

地下都市イレイカには逃げ場がない。裏口はすでに灰で埋もれていて、かき分けないと脱出は不可能。

あとは正面からグレイ「グー」を押し返すか、主シャフトから飛び降りて自決するかのどちらかしかない。

もろく次々と死んでいく護法軍の中で俺だけが希望のような扱いを受けた。俺が、ではなく俺が主人になっている百の手が。

それは事実ではあったけど、同時にフィンドの女王に太刀打ちできないことも歴然としていた。

「悪いけどもう無理だ、諦めてくれ……」。

俺は何度も音を上げそうになった。

でもその度にリリウムが隣で首を横に振って俺を止めた。

「彼女もまた俺の逃げ場を封じてくる。」

*

フラッシュカーゴ
断続的瞬間移動駕籠は4人乗るのが精一杯で、リリウムと俺と、百の手を入れた黒い箱を乗せると残りひとりのスペースしかない。

俺はそのスペースに誰を、あるいは何を載せればいいのかわからなかった。

リリウムは、どう考えたところで不公平になると判断し、誰も乗せなかった。

フラッシュカーゴが護法軍大本営に到着するまで2時間ほど。

その頃には大坑道の最終防衛ラインを割られ、地下都市は死都になるだろう。

どうしようもない。

リリウムはトゥルーメイジではないにせよ世界最高位の魔法使い。俺はこの世で唯一原罪を持つ人間。ふたりとも無駄死させるわけにはいかない。

俺達は護法軍大本営に戻った。カーゴが動き出す前に、頼むから俺も乗せてくれとすがりつく何人かの同胞を射殺しないといけなかったことを除けば、特に問題のない移動だった。

ポータルが消失したため、カーゴはもう二度と大坑道に行くことはできなくなった。

それも問題ない。

グレイ「グー」に穢された場所だ。もう誰も用はない。

こうして人類最後の要、大坑道は灰に埋もれた。世界の生存可能領域は、この後一週間ほどで3割が削ぎ落とされた。

あと何週もつだろうか。

ああ、参ったな。あとはもう魔法の塔が潰れれば本当に終わりだ。

最後の魔法の塔。

本当に、最後のひとつになってしまった。

残りの人口は何人になっただろう。

毎日のように統計が書き換わるほど死んでいるはずだ。

負傷者もフィードも狂人もどのくらいいるのか。アツシュ・ラツシュに救いを求めて虚ろな死を迎える子供たち。

護法軍が戦力を失えば、秩序が崩壊した人達による暴動が起こり、

じきに食料をめぐる略奪に発展するだろう。

秘石の供給が絶たれれば代用食料が作れなくなる。世界中で飢餓が起こるのは火を見るより明らかだってやつだ。

人間の暮らしはもう戻らないかもしれない。

防毒マスクだけでいつまで保つのか。生命を繋ぐ方法はあるのか。子供に託す何かはあるのか。水も土も太陽も人類から奪われたままなのか。

世界に、先はあるのか。

わかっているだろう？

そんなものは初めから……。

*

「あるとすれば」

護法軍ニムボロウ将軍が、何日も寝ていない目の下を揉みながら言った。

「もはや我々に残されているのは『聖アレクシーヌの光典』だけだろっ」

聖アレクシーヌ。

2000年以上昔の女魔法使いの名前だ。生命魔法における極め

て重大な貢献をした世界史上に名を残すトゥルーマイジとして列聖されたという。

この世界の聖人というのは、ほとんど神に近い。

トゥルーマイジというだけで恐れ多いほどの力を持つのに、聖人とされるのにはそれだけの理由があつて、聖アレクシー又は魔法の暴走によつて出生率が限りなくゼロに近くなつた時代を終わらせた救世主だとされている。

「そんな大昔の聖女様がなんだつていうんだ？ それを俺に話すだけの意味があるんだろうな」

俺はぞんざいな態度でニムボロウ相手に言い放つた。もう礼儀をわきまえる余力がない。こうやってみんなますます消耗していくんだ。

「……半年前の空撮映像だ」

ニムボロウが作戦室のテーブルに光巻物ルミナススクロールを広げた。立体映像が浮かび上がり、そこには灰に埋もれた平原と、その灰の中で透明なドームで守られたように一切灰の積もっていないポイントがあつた。

「防毒隔壁？」

「違うわイリエ、ここはもう」

「そう、隔壁がまともに稼働し始める以前に生存不可能領域になつた場所だ。金碧ラピダスの塔。その跡地だ」

「ラピスラズリ……？ 大本営が緋瑪瑙オニクスの塔の跡地だったみたいに？」

「そうだ。塔が崩壊したのはもうずいぶん昔だがね。だから何も残っていないはずだった。が」

ニムボロウはひび割れた指先で巻物を小突いた。カツンと音がした。化石病、しかも切断では治らない全身播種型。指先が固まっている。

「この、灰が自分から避けているような場所。明らかに聖なる魔法の力が残っている。聖アレクシーヌの遺体とともに光典が隠されている可能性は……ある」

あつてほしい、という響きだった。あるべきだという軋むような響きでもあった。

「それで？ 大昔の聖女がなんだったというんだ」

「聖アレクシーヌの光典には彼女が作り出した生命魔法の秘法が記されている。霊薬の製法もだ」

「つまり、人類を滅ぼしかなかった大呪詛、それを消し去った聖アレクシーヌの秘法を使えば、少なくとも毒の灰を防ぐ方法にはなりうる。そう仰りたいのですか將軍？」

「いかにも。大姉リリウム、その秘法をあなたが明かすことができれば、あるいは」

作戦室が沈黙した。

無茶な話だ。仮定に仮定を重ねている。その聖アレクシーヌの光典とやらが金碧の塔の跡地に本当に存在するのか。その光典に生命魔法の秘法が本当に記されているのか。その秘法で、本当に人類を延命できるのか。

「この映像が確かだとして、ぎりぎりの状況になったから今さら持ちだしたなんてことだったら」

「無謀すぎる、と言いたいのだろう？ お前の言いたいことは承知している、兄弟イリエ。この映像自体はある護法軍士官が命がけで空に上がり撮影したものだ。彼はその映像と引き換えに天まで登り切って死んだ」

「將軍、つまりあなたはこう言いたいのですか？ 黒い箱を現地に持ち込んで、光典を持ち帰って来いと」

リリウムの言葉に俺はぎくりと肩を震わせた。黒い箱『禁断』は、もう俺の所有物になっている。

俺に行けと言っているのだ。

ラビースス
金碧の塔、その跡地はすでに灰に埋もれきつた生存不可能領域で、そこまでたどり着ける保証は限りなくゼロに近い。フィード、灰賊、グレイグー。灰の毒以外にも『敵』の存在がさらにそれを難しくさせる。

可能性は薄すぎる。

でもあえて人員を送り込むなら俺しかない。

百の手なら灰の中でも自由に動ける。敵がいても問題ない。グ
レイグーを除けば。

その上で、百の手を入れた黒い箱に、代わりにその光典を入れて
持ち帰る。たとえ俺が死んでもその箱が大本営まで近づきさえすれ
ば、回収に人員を回すこともできるはずだ。ニムボロウはそう考え
ているに違いない。

可能性は、あまりにも薄すぎる。

全力で否定すべき話だ。

同時に俺は頭からすつと血の気が引いていた。何かを諦めた時は
いつもこうなる。

俺はこの件を引き受けるだろう。

もう断っていられる状況ではない。俺以外には誰がやっても無駄
なことはわかる。

だから諦めた。

俺はもうあとには引けない。

逃げ道も、逃げ出す先ももうない。

だから諦めた。

俺がやるしかないんだ。

48 荒廃の大地、今はただふたりのままで

フラッシュカーゴで可能な限り目的地近くのポータルまで飛び、そこからは『純粹馬車』ラビンススリを使って金碧の塔跡地まで行くことが決まった。

自分の出番を奪われてチャンプは怒りを露わにしたけど、こればかりは仕方がない。

目的地までは灰に完全に覆われて、チャンプの心肺機能でさえ耐えられないという判断だ。

アーティファクト 純正魔法創造物の『純粹馬車』は、人間が心に抱く馬車の概念を抽出してクリスタルの中に閉じ込めたもので、必要に応じてクリスタルから取り出すことができる。概念の馬は灰を吸い込んで何も起きない。死なない馬と壊れない車体のある馬車を使うしか今回の任務を果たすことはできない。

俺もチャンプには死んでほしくなかった。

馬車にはリリウムも同乗することになった。

聖アレクシーヌの光典が本物かどうかを鑑定し、必要であればその場で魔法を行使するためだ。

人類にはもう本当に時間が残されていない。

*

出発はあっさりと3日後に決まった。

俺は後に残すものはチャンプしかない。ほかは何も無い。世話になったかつての俺の雇い主はまだ生きているかもしれないから念のため遺書らしきものを書いておいた。

死んだら俺の部屋の物は捨ててもらって構わない、ありがとうございませう。せいぜいその程度だ。

時間を惜しむように何度かリリウムと寝た。

俺は彼女のことを好きなんだと思うけど、この期に及んで自信がなかった。

リリウムが俺のことをどう思っているかはもっと自信がない。

お互い、何かの埋め合わせをしているだけなのかもしれない。

別にそれでも構わない。

もうこんなことをする相手は、お互いしかないのだから。

*

純粹馬車は青白く光る正体不明の魔法の力でできた馬車で、俺のイメージに合わせてある程度形を変えることができた。

馬車を引く馬はチャンプと同じような姿の大きなものにして、御者台にはカプセルのような覆いをつけて灰を防ぐ庇ひさしにした。

荷台というより客車にした車体には座ったり横になったりするスペースと、百の手の入った黒い箱をうまく運べる構造を作った。

馬車というよりはワンボックスカーをイメージしたので、俺の知っている現代的なデザインが混じっていて何とも不思議な見た目になった。

壮行会もなく、ごくわずかの事情を知る軍人だけに見送られ、もの寂しく出発した。

厩舎の方から、チャンプの長い長いなきが聞こえてきた。

悪いな、お前は連れていけない。

あと……もう会えなくなっても、お前だけは最後まで生きてくれ。

生きられるだけで構わない。生きられるだけ生きてくれ。

ルシウムがそう言い残したように。

*

驚いた。

純粹馬車のスピードは、チャンプの引く馬車よりもさらに速い。

灰に覆われ道無き道になっている街道をさあつと駆け抜け、その疾走にもかかわらずほとんど揺れを感じない。感覚が違うせいで激突や横転の心配が出てくるが、そこは純正魔法創造物。物理的に横

からぶつからない限りは慣性で倒れることはないらしい。

俺はいつもの様に防毒マスクと灰合羽を身につけているが、カプセルつきの御者台は灰の侵入を防いでくれるからずいぶん楽だ。万が一、カプセルが壊れた時のためにマスクは手放せないけど一応マスク無しでも過ごせることはできる。

いや、これは素晴らしい。

俺は素直に驚いて、ここしばらくの闇の沼に沈んでいくような気分から多少抜けだした。

「イリエ、ずいぶん楽しそう」

客車からリリウムの声が出た。

「そうだな。平和な頃に、こんな風に走らせたらよかった」

「……………こんな時代でも楽しんでもいいと思う」

「え？」

「どんなにひどくても、昨日も死んで、今日も死んで、明日も誰かが死んだとしても、楽しんだり笑ったらいけないなんて、そんなことはないと思う」

「そう……………かな。俺には……………」

「私は楽しいよ」

「そうなの？」

「はい。イリエとふたりだけでこうして走っているのは、少し……ほんの少しかもしれないけど、幸せだと思う。私はそう思ってる」

俺は答える言葉を失って、灰合羽の襟を意味なく直した。

俺を元気づけるためにそう言っているだけかもしれない。でもそうじゃないかもしれない。

もしリリウムが本心から言ってくれているのだとすれば嬉しい。そうであって欲しい。

俺はやっぱり彼女のことを好きになっているんだと思う。

*

何事もない日々が3日ほど続いた。

特別製の浄水装置は小型なのに強力な性能を発揮して、穢された川の水からでも冷たい浄化水をつくってくれる。自己発熱鍋で比較的まともな保存食パックを温め、ふたりで食べた。

道は次第にとぎれとぎれになっている。

明日にはおそらく舗装された道もただの地面も見分けの付かない広大な灰の平原に入るだろう。

ここからが本当の、絶望的な生存不能領域だ。

*

翌日は雨が振り、足元がぬかるんで純粹馬車でさえ進むのに難儀した。

御者台に覆いを作っていて本当に良かった。身を隠せるところのない場所で毒混じりの雨にふられたら気分は最悪だし、汚れを洗い流す手間もかかる。

灰が降りだす以前の地図とコンパスを頼りに、俺達は死んだ大地を進んでいった。

*

ずいぶん昔に灰に飲まれた廃村に通りがかった。

雪深い農村のように全てが灰に覆われて、朽ち果てている。

半世紀。

長い時間だ。その間にこうして滅び去った場所はいくらでもあるのだろう。たぶん、集落のていをなしているところを探すほうが早いもう時間はない。

食料の供給も人の行き来もできなくなり、護法軍の補給線も壊滅し、もう軍としての体裁を保つのも限界だ。

あの旧アベリー市はどうなっているだろうか？

あそこがグレイヴに襲われたら、死人の数は街の外の死体の山よりも増えるだろう。本当に、いよいよこの世の終わりが近づいてくるとしてはいる。

俺は　　リリウムと俺はこうして絶滅の荒野を進み、ほんのわずかの希望のために命をかけている。

誰も彼もが死に瀕している。

誰も逃れられない、最後の絶滅の波が起こりつつある。

俺達のやっていることは何なんだ？

もし本当に聖アレクシーヌの光典を手に入れたとして、そのことが本当にこの状況を打開する糸口になるのか？

ならな……いや、まだだ。

まだ、実際にたどり着いてから判断すべきだ。そう考えるべきなんだ。

今はただ、のしかかる重く湿った可能性から目をそらし、ひたすら馬車を駆るしかない。

俺はこの世界にきてからずっとこうだ。御者をやってきて、ずっと御者であり続けてきた。

俺は最初から最後までこうしていくしかない。

生きられるだけ、生きてみせる。

49 虚無に蟠る

ラビマスク
金碧の塔、その跡地まであと……どのくらいだろう。

もつわからない。

灰の毒が濃すぎて、防毒マスクをつけていてもうつすらと気化した毒が呼吸に混じってくる。死にはしないが、頭の働きは鈍くなる一方だ。

「リリウム、大丈夫かりリリウム？」

純粹馬車の客車にいる彼女に声をかけ、無事を確かめた。

「うん……大丈夫。イリエ、あなたのほうこそ」

「俺はまだどうとでもなるよ」

道中で現れたグレイ「グー」クレイマンサー』の無限に生み出される泥人形の手から逃れるため、リリウムはかなり巨大な追難魔法を行うしかなかった。純粹馬車を安全な距離にまで逃す頃には、大魔法の連発でリリウムの精神的疲労は深刻になってしまった。

予備の秘石を山ほど持ってきているが、うまく力を引き出さなくなってきたらしい。

それについては一番大きい可能性がすぐに思い浮かぶが、そのことを受け入れるわけには行かなかった。

まだ魔法は使える。弱まって見えるのはリリウムのコンディションからで、それ以外の理由はない……。

しかし事実として魔法は弱まっている。

次にグレイ「グー」に襲われたとして、どう対処すればいいんだ？

百の手でなんとかするしかない、俺が何とかするしかない。俺には百の手以外、何の力も持っていないんだ。

*

純粹馬車は魔法の力の結晶できていて、壊すことはできない。

正確には、壊しても元の姿に戻る。馬車というものに対して人間が抱くイメージが形になったものだからだ。

だから純粹馬車は壊せない。

ただしそれを操る御者や車内の人間はそうは行かない。車体が倒れば俺は放り出されるし中のリリウムは激しく揺られてけがをする。

出発してから何日経過したのかわからない地点、どこかの死にきった森のなかで俺たちはグレイ「グー」に襲われた。

フイ「ンド化した混ベトンキヤスター凝術士の成れの果て7人組で構成されるグレイ「グー」『祭壇の七人』はひとり殺すとひとりが生まれ、一度に全員を殺さない限り活動が止まらない。

純粹馬車の側面からいきなり生コンクリート弾をぶち当てられるなんていくら警戒していても逃げるのは無理だ。

横転した純粹馬車を一度クリスタルの中に戻し、俺は時間を稼ぐために百の手をグレイ「グー」に向けて放った。

*

見境のない殺人人形なのに、百の手は健気だ。

半壊しながらも俺とリリウムが脱走する時間を稼いでくれた。チャールズ・アシユフォードに感謝しないとイケないな。

だが状況は本当にジリ貧だった。

御者台から転落した俺は肩を痛め、軟膏タイプの靈薬を塗りこんでいるが痛みが消えない。たぶん何ヶ所かで骨にヒビが入っている。

車内で思いつきりシェイクされたリリウムも、頭を強く打って出血していた。

疲労と、痛みと、恐怖とで、もう心身共に限界だった。

これ以上先に進む意味はあるのか？

目的地に辿り着いたとして、目的の聖アレクシーヌの光典は実在するのか？

本当にそれで人類が救えるのか？

救えるとして、その方法で滅亡までに間に合うのか？

全ての疑問を押し殺して俺は純粹馬車を走らせた。

唇の端が切れている。マスクの中は血の味がした。

*

それから二日ほど経って、浄水装置が壊れて使えなくなった。

馬車が横転した時に何かとぶつかつたんだろう。携帯用濾過ポットでどこまでまともな飲水を作れるのかわからない。

それでも喉は渴く。

比較的毒の薄そうな川の水を汲んで、何度も濾過して、コップ半分ほどの一応飲める濾過水ができた。

小便を飲むよりはマシだ。

*

食料が……くそっ、いつの間に灰が紛れ込んだんだ！？

保存食の表面に灰色の斑点が吹き出していた。灰と結びついたカビという最低の汚染が、残された食料の大半に及んでいた。

あと何日分……少なくとも一週間分はあつたはずだ。どうすればいい。たとえ今から引き返しても量が足りない。目的地にたどり着

くことを優先させれば確実に帰りの食料はゼロになる。

水も食料も限界か。

あとは防毒マスクが使えなくなるだろう。道中は灰の毒が濃すぎる。交換用のフィルターはあと何枚あっただろう。多くはない。

本当に行くのか……？

これ以上、本当に進むのか？

濁った色の雨が降ってきた。

マスクのバイザーに貼り付いて、黒い筋が流れた。

俺はしばらく鉛色の空を見上げ、黒い涙の中に身を委ねた。

そろそろ限界だ。

*

空腹を抑えるためにリリウムが代用食料を作ってくれた。

秘石を材料に生み出されるそれはカロリーと食感しか再現できないスナック菓子みたいなものだけど腹は膨れる。それだけで十分だ。

「たぶんあともう少しだと思う」

ルミネススクロール

光巻物から立ち上るノイズ混じりの立体地図を見ながら俺は言った。防毒テントの中でふたりともうつろな目をしている。

「とにかく……とにかく、そうだな、どうすればいいの……」

睡眠不足のせいで頭が回っていない。何か方針を示さないとけない。でもいいアイデアなんて思い浮かばなかった。いいアイデアなんてものそもそもないのかもしれない。

「聖アレクシー又の墳墓……」

「ん？」

「光典が眠っているのは聖アレクシー又のお墓でしょ？ その中は灰の影響を受けないから、そこで休みましょう。後のことはその時考える」

「……そうだな。リリウムの言うとおりだ」

きっぱりと言い切る態度はやっぱり姉に似ている。俺がそう言うのと、リリウムはふっと力が抜けて眠りに落ちた。

俺は彼女に毛布をかけてやり、さっきの言葉を頭のなかで繰り返した。

リリウムは光典が存在することを前提としていた。

それが怖かった。そんな話ではなかったはずだ。あるかどうかもわからない、本当に聖アレクシー又と関係があるのかさえ確証のない、そういう道のりのはずだ。

俺はぼんやりと、何が待っていてもショックを受けないよう先行

して絶望しておくことにした。

絶望に心を慣らしておけ。俺達は、そもそも目的地まで届かないかもしれないんだ。

十分に繰り返して、心が次第にゆるい麻痺を起こした。

そして本当の絶望が背筋に居座った。

どれだけ心を慣らしても、それより最悪の事態が待っているのなら何の意味もない。そしてそんな事態は おそらく当たり前のように起こるのだろう。

虚無が来た。

それが来ると、俺は強く諦めないといけない。諦めることを諦めないといけない。

それだけやっても虚無からは逃げられない。

諦めても、諦めても、諦めても、俺の心には虚無が住んでいる。俺の3年間は『そういうもの』だった。

ああ、そういうことか。

俺は唐突に悟った。

グレイ「グーは、灰の中からやってくるこの世界の、人類全部の虚無なんだ。

だから誰も逃げられない。勝ち目もない。殺すことは不可能だ。

そこまで考えて、俺は気を失うように眠った。

無意識にリリウムの手を握っていた。

*

灰が積もっていない。

「リリウム、なあ、ここが聖女様の墓なのか？ そうなんだろう？」

ささやかな秋の花が円形の清らかな土の上に咲いていた。季節はいつの間にか第三乾季に入っていたらしい。

鉛色の灰曇りからの日は薄暗く、風は乾き、見渡すかぎりの灰の海に畝を刻んでいる。灰色の砂漠だ。

純粹馬車を降り、俺は背中におぶったリリウムをその場所へ運んだ。

魔法のことはわからない俺でも、その『聖地』が他の場所とは違うことがはつきり感じられた。暖かく、心地いい。灰の降らない屋内でベッドにくるまっているような安らぎを感じた。

俺はほとんどためらいなく防毒マスクを外し、短く呼吸した。こんなに甘い空気を吸ったのはこっちの世界に来てからは初めてだ。

毒は混じっていない。

聖人の遺体が放つ半永久的な浄化魔法の力だろうか？ 詳しく分析することは俺には無理だ。

「リリウム、大丈夫か？ ちゃんと聞こえてるか？」

背中のリリウムをそつと清らかな地面の上に下ろし、彼女の顔色を確かめた。

疲労、そして魔法の連続使用で明らかに弱っている。これまでグレイグーから逃げ延びるため何度か無理をした。その時の怪我でいくつかアザができていて、ひどく治りが遅い。これは俺自身もそうだ。ほぼ間違いない、灰の毒がゆっくりと身体を冒しているせいだろう。

半分眠ったように意識が薄いリリウムを横にさせ、俺自身もあくらをかいた。

空気がきれいなのは、この場所に大きな力が眠っている証拠だろう。少なくとも、まったくの空振りではなかった。それだけでも救いになった。

でも、そこからどうすればいいんだ？

確かに聖なる土地だが、墳墓という感じはしない。地下に空間が作られているとしてもどこから降りればいいのか、見ただけではわからなかった。

まあ、見ただけでわかるようなら2000年以上隠されたままあり続けたわけがないか。

だからとにかくリリウムに意識をしつかり持つてもらって、魔法で探すしかない。それしかもう思いつかない。俺の力では無理なんだ。もう百の手も半壊してまともに動かないし、純粹馬車を操れたとしても、それだけだ。俺にはそれだけしかできない。

「頼むよりリリウム、早く目を覚ましてくれよ……」

貴重な水を飲ませて、微熱が続く体に靈薬を使っても、うまく働かない。

想像はつく。でも何も気づいていないふりをした。認めたら膝から崩れ落ちる。

「魔法で……開けられるシンボルがどこにあるはず。それを見つけて……」

リリウムが仰向けのままぼんやり言った。本当にリリウムの声なのか、何か神がかり状態になって彼女以外の誰かがしゃべっているのか、区別がつかなかった。

シンボル。

俺はマスクを付け直し、聖なる土地の内側も外側もくまなく見ても見当がつかない。

盗掘を防ぐ目的で、しかも2000年間手付かずで守りきられた仕掛けをだしよう。

それはきつと、過労で今にも倒れそうな俺が見つけれられるような簡単なものではないはずだ。

一体どこに……？

と、灰の中でいきなり足を取られて無様に転倒した。比喩でなく全身が灰に沈み、マスクの隙間や灰合羽の袖に毒の灰が紛れ込んでくる。汗で毒の成分が溶け出し皮膚からじわつと染みこんでくるのがわかった。

どこを、なにを探せばいい？ 何のために？ 俺はこんなところで何をして……。

一瞬の迷いは、もっと恐ろしい物に打ち破られた。

見渡すかぎりの灰の荒野に、無数の花が咲いていた。

灰色で、人間の指を花びらにした花だ。さっき俺の足に絡まったのもその灰で出来た花だ。

『彼岸花』は俺の身体を掴み、ころばし、引きずっていく。グレイ「グー」だ、この聖地の周囲一帯全てがグレイ「グー」の園だったんだ。

俺は悲鳴を上げ、リリウムに逃げるよう叫んだ。逃げる？ どこへ？

俺は灰合羽を彼岸花に引きちぎられ、マスクに指をかけられた。

死ぬ！！

こんな灰だらけの場所で防毒マスクを剥ぎ取られたら人間は生きていけない……！！

「百の手！ ちくしょう、誰でもいい！ なんとかしてくれ！」

俺の叫びが、灰一色の無言の大地に響き渡った。

49 虚無に騒る(後書き)

次回、最終回

50 ありがとう さようなら

何がどうなったのかわからないが俺は地下にいた。

天井を突き破って、聖アレクシーヌの遺体が眠っているという墓所に落ちたらしい。防毒マスクのバイザーが割れて、額から流れた血が髪の毛に絡んで固まっている。どのくらい時間が経ったのかわからないが気絶していたらしい。

空気は澄んでいた。

本当に聖女アレクシーヌの聖なる力が残っているらしい。毒の影響が完全にシャットアウトされている。

どうやって助かったんだ俺は？

グレイ「グー」『彼岸花』に取り囲まれ、俺はもう死ぬ以外なかったはずだ。

最後に百の手へ救いを求めたのは覚えている。

でもそれは根本的には意味のない行為だ。グレイ「グー」は殺せない。たとえ古代の殺人人形であっても同じことだ。

それに、百の手はすでに半壊状態で、まともに俺の指示に従ったかどうかわからなかった。

強打した背中をかばうように立ち上がると、灰合羽の襟から精巧

な手のパーツが落ちてカシャリと乾いた音を立てた。

理解できた。

百の手が、彼岸花にまとわりつかれた俺の襟首を無理やり掴んで、この地下墓地に放り込んだんだ。

それだけの役目を果たした後、おそらく彼岸花と最後の最後まで殺し合い、もうバラバラにされたのだろう。

百の手は　　百の手も死んだ。

俺にできることは何もない。

これでもう、本当に何もない。

*

地下墳墓は人間5、6人が入っても狭くない程度の空間で、金色というか飴色というか、とにかく淡く輝く明るい黄色に満ちていた。暖かく、この時代の人間には隠されてしまった太陽の光と同じものだ。俺は直感した。

間違いなく、本当にそこには聖アレクシーヌの遺体が安置されていた。完璧な保存処理が行われているらしくそのまま起き上がってもおかしくない状態の、美しい女がクリスタルのケースで眠っている。

床や壁は魔力付与された真鍮でできた直線曲線が幾何学模様を描いている。それ自体が魔法陣のような働きを示すのだろう。

このいかにも秘密めいた墓なら、きつとニムボロウ將軍の期待どおり『聖アレクシーヌの光典』も眠っていてもおかしくない。いや、そうであるべきだ。もし、ここまで来て何も意味がなかったら、俺は……。

詳しくはリリウムに聞くしかない。

「イリエ、目が覚めたのね」

ちょうどいいタイミングで、後ろからリリウムの声がして、振り向いた俺は思わず足を滑らせた。

リリウムは血まみれで、特に左腕がどす黒く血に染まっていた。何かが刺さっている。

「ごめんなさい、私、灰を吸い過ぎたみたい」

リリウムの持ち上げた左手は、肘から先が30センチ近く伸び、鉤爪が生えていた。

フィード化だ。

毒で変形しかけた左手にナイフを突き立て、浄化魔法をありったけねじ込んで腕自体を封印したらしい。フィード化の進行は止められても治癒は不可能だ。つまり、切り落とすしか……。

「あゝあ。こんなことならルーシィ姉さんの義手を持ってきておいたらよかった」

リリウムは強がって、場違いな普通の女の子のような口調で言った。その奥の苦痛を俺が聞き取れないと思っっているのだとしたら、ちよつと自信過剰じゃないのか。

「リリウム、光典つて一体どんな形してるんだ？　せめてそれだけは見ておきたい。あるのか、ないのか、それだけでいい」

「球体か、立方体か……たぶんそういう立体物の形になっているはず。本やウィジャ・メモリとは」

「別物が」

「うん。未来まで保存することを考えたら紙の本ではないと思う」

「これかな？　この……ベッドにはまつてる水晶玉」

それは青く美しい球体で、糸が絡むように金色の縞模様が走っている。実際には水晶ではなく金碧ラヒスラスリの塔の一部を削って作ったものではないだろうか。

リリウムは球体を魔法的に覗いた。強力な情報量と、左腕の痛みから立ちくらみを起こす。

「この中に聖女の秘法が収まっていると思う。それは間違いないと思うんだけど、記録の容量があまりすぎて解析に時間がかかりそう」

「そっか。それもそうだな。じゃあ、帰り道の間じっくり中身を見ればいいだろう」

「そうね、そうしましょう。それがいいと思う」

俺は引きつった笑いを浮かべていた。

リリウムもそれにつられ、熱に浮かされたみたいな目で笑った。

俺たちはお互いに何かから目をそらそうと必死だった。

まだ今は、もう少しだけ、旅の成功をよろこびたかった。

今だけは、もう少しだけ、後もう少しだけはこのままで。

*

墳墓の外には灰の腕、彼岸花が見事なくらい咲き誇っていた。

聖アレクシーヌの力が残っている範囲だけは嘘みたいに清らかで、それ以外は見渡すかぎりの彼岸花だけしかなかつた。

純粹馬車までの距離はほんの10数メートル。でもそこにたどり着くのはまったく不可能に思えた。彼岸花の園を無傷で突っ切ることなどできやしない。

無理だ。

俺は、俺達はついに膝から崩れ落ちた。ここまで命がけでやった。何度も死にかけ、リリウムは片腕がもう使えない。切断するしかないだろう。

それでも馬車に乗りさえすれば、俺はまた護法軍大本営に戻る自信があった。強がりだ。同時に強がりなんかじゃない。死ぬほど苦

劣するだろうけど、やり遂げてみせるといふ気持ちはあった。

でも、純粹馬車までの距離わずか10メートルが果てしなく遠い。彼岸花の一輪に掴まれただけでも死の危険がある。聖地以外は全てが灰の領土だ。

これは今の世界の縮図だ。

人間の居場所はもうない。

グレイ「グーは何も語らずそのことを示しているようだった。

「……私が追儼魔法パニッシュで時間を稼ぐ。イリエ、あなたは馬車まで走って。これを」

リリウムは決意の表情で光典を渡してきた。

反論をしようと思えばいくらでもできる。そう思った。でも俺にはもう根拠が残っていない。そんなことはだめだ、ふたりで一緒に馬車まで辿り着く方法を考えよう……。

そんな方法、どこにあるんだ？

ありはしない。

リリウムの言うことが正しい　もしどうしても光典を持ち帰ることを優先させるのなら。

俺はうなずいてしまった。

防毒マスクの内側で俺はどんな顔になっていたんだろう？ わからない。どんな感情からリリウムの提案を飲んだのか。

リリウムは最後の手段を使った。残された秘石の力を束にして、純粹馬車までの直線を浄化の光でなぎ払う。そうすることでグレイ「グー」を追い払い、道を作り、そこを俺が駆け抜ける……。

光は、放たれなかった。

魔法の力が出せない。

左腕がフィード化した影響か？ それともグレイ「グー」の妨害か？ なにか灰の力が邪魔しているのか？

それらは事実で、でも本当の、一番の理由じゃない。

魔法の力の源が断たれたんだ。

わかるだろう？

最後の魔法の塔だ。

最後の魔法の塔、ファイアオーバー火蛋白石の塔がグレイ「グー」によって崩壊したんだ。

トゥルーメイジの全滅。

大坑道占領。

最後の魔法の塔の沈黙。

そこまで行けば、もうひとつの事実は簡単に想像できる。
護法軍の壊滅だ。

*

イリエ、あなたの世界。

ああ、地球か？

うん。チキユウってどんな世界？

どんな世界、か。説明するのって案外難しいな。

何でもいいよ、教えて？

そうだな……普通の世界だよ。

普通？ 普通って？

地獄の噴火なんてなかったし、毒の灰が降ったりしないし。人間もいっぱいいて……機械と電気と……あと……。

あと？

魔法がない。

え？ それじゃどうやって……？

魔法がなくても生きていける世界なんだ。神様も魔法の力なんてくれなかったみたいだし。かわりに原罪なんてものを背負わされた。

魔法がないなら、私いらねえね。高位の魔法使いなんて言っても、魔法が不要ない世界なら。

そんなことは、その……ないと思うよ。

どうして？

いや、なんていうか……。

なあに？ 話してよ。

……俺には、必要だ。

……。

俺には、リリウム。俺にはお前が必要だ。なんて言ったら、どうする。

嬉しい。

そうか。

うん。嬉しい。イリエ、私……。

何だ？

私、あなたの赤ちゃん、ほしいな。

*

フィード化が抑えられなくなったリリウムは、俺に銃を渡してきた。

リリウムは死んだ。

俺が引き金を引いた。

*

この世界はもうすぐ終わる。

ずっとそう言ってきた。

ずっとそう思っていた。

でももうすぐっていつだ？

どうなったら世界は終わるんだ？

どの時点で？ 何が起こったら？ 何が無くなったら？

狩り尽くされて絶滅した生き物のように、人間という種がひとり残らず死んだら確かに世界は終わるだろう。いくらこの世界に魔法があつて、魔法の力で霊を呼び寄せる事が可能だとしても、魔法を使える人間がひとりもいなくなったら二度と復活できない。

ではグレイ「グー」とはなんだ？

地獄の浮上と毒の灰はまだこの世界の自然現象として説明できる。

でもグレイ「グー」という怪物は、人類を積極的に滅ぼそうとしていた。やつらは根本的にひところしなんだ。

何のために？

グレイ「グー」は捕食をしない。食べ物を取る必要がないからだ。誰も確かめたことはないが繁殖もしないらしい。灰の中から勝手に生まれるからだろう。

人類を殺して殺して根絶やしにするまで殺そうとしているとは思えない。その一点だけは確かなようだ。

放っておいても人間は絶滅していただろう。たぶんあと一世紀もあれば勝手に全滅したはずだ。

それを縮めた。何か理由がなければそうはしないだろう。

それがずっと疑問だった。

だけどもいま、生存可能な聖なる土地にいて、その周りを誰も生きられない灰の荒野に囲まれていると、わかるような気がした。

リリウムと俺だけの世界。

リリウムは死に、俺だけが最後の生き残りになった世界。

俺が死んで、その後に残るのは誰もいない生存可能領域で、やがてはそこも穢されるだろう。

そこには灰しかない。

人間は誰もいない。

その後、地上を闊歩するのは、グレイ「グー」を始めとする人間ではない者達だ。

あの怪物どもは人間を滅ぼすこと自体を目的としているんじゃないんだ。

人間を滅ぼして、この世界を乗っ取る気だ。

世界を乗っ取るには人間が邪魔で、なぜ邪魔なのかが今になって分かった。

魔法だ。

魔法は神の愛で、神の存在の証明で、人が神に愛されている証拠だ。

魔法を使える人間こそが魔法の神の証なんだ。

だからグレイ「グー」が人間を殺すのは、人間を殺すんじゃないで、魔法の神を地上から消すために、神殺しのためにやっている行為なんだ。

何の確証もなく、俺はそう悟った。

世界が滅びる。この世界から神の証拠が消える。人間はそのために絶滅する。

では、俺は？

あのチャールズ・アシュフォードと同じように、原罪を背負って生まれたイレギュラーの俺が死んだらどうなるんだ？

あるいは反対に、俺が生き残っていたとしたら？

魔法の力が消えて、神の存在が消滅したとして、本来部外者だった俺が生き残って……それからどうなるんだ？

異世界から俺を、俺たちを転移させた神様は一体何を考えていたんだ？

俺たち 俺を残して全滅したクラスみんなは、何のため生き、何のために逝った？

運が悪かった。そんなふうには片付けてしまってもいい。この世界の仕組みは、やっぱり部外者の俺には完全には理解できないんだ。

俺や俺たちクラスみんなには、神に託された何らかの目的があったのかもしれない。滅びかけた世界をどうにかして救う、そんな使命を背負わされていたのかもしれない。

だって、何の意味もなく転移させられたのだとしたら、あまりにも悲しいじゃないか。

俺はもう振り回されるのは御免だ。

誰であろうと、神になんて従うものか。

聖書の神であれ、魔法の神であれ、あるいは存在するかどうか知らない地獄の神にだって。

俺は懐から護身用の拳銃を抜いた。

肝心な時にいつも存在を忘れてしまうこの拳銃の存在が、今は頼もしい。

自分で撃ち殺したりリリウムの血の気の失せた横顔を眺めてから、こめかみに銃口をあて、ほとんど間を置かず引き金を引いた。

幸い何の痛みもなく事は済んだ。

このあと世界がどうやって終わったかなんてどうでもいいことだ。

俺の世界はこれで終わり。

まあ、俺のことなんて初めからどうでもいい。

今度はクラスメイトだった連中ともうちよっとなんて仲良くしようと思
う。

リリウムを紹介しないといけないからな。

最後まで聞いてくれてありがとう。

お別れだ。

50 ありがとう (お礼) 後書き

(終焉)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7679cq/>

終焉世界

2017年4月1日18時40分発行